を盡した。それによりて私は生死の山を後にすることが出來た。その教は迷ひの門戸を鎖し、自在證悟の門を開いた。この尊い法寶の說かれた時に、私と八萬の諸天は淨法眼を獲て、惡業を解脫した。いまその教を聞いて思ふに、世には變らぬものは一もない。」

云ひ終るや、感極りて悶絕して地に仆れた。阿難が一經を誦する每に、彼は感極つて仆れたと稱せられる。諸弟子の釋尊に對する崇敬と思慕の念は何れ愚はないけれども、憍陳如は亦格別であつた。彼には弟子として師に對する外に、主君を思ふ老臣のやうな態度があつたのである。

（一）『增阿』第二三・『本集』第二五・『許帝』第六・『四律』第三二・『西域』第八。

（二）『五律』第一五・『四律』第三二・『緬傳』一ノ一一八頁。『本集』第三四・『釋語』第一。

（三）『佛讃』第三。

（四）『常釋』第七ノ四。

（五）『古印』四三五頁・『佛讃』第三。

（六）『須佛』一九〇頁。

（七）『中阿』第五六・『四律』第三二・『五律』第一五・『增阿』第一四・『毘僧』第六・『許帝』第七・『西傳』三八頁・『須佛』一九〇頁・『緬傳』一ノ一一七頁・『佛讃』第三・『本集』第三四。

（八）『增阿』第三。

（九）『西傳』一五七頁。

第三　耶　舍

附離垢、善實、具足、牛王

波羅捺の町に耶舍（Yasas）といふ長者の息子があつた。父母は一人子のこととて愛すること甚しく、暫くも手離しすることが出來ない程であつた。當時豪奢の頂上であつた春夏冬の三時殿を設けて耶舍を住はせ、侍女音樂等の五欲の樂は何一つ缺くる處はなかつた。

かやうな歡樂の家に成長した耶舍はいつとはなしに厭離の念に襲はるゝやうになつた。或夜歡樂の甘さに疲れきつてそのまゝ眠りに陷つたが、曉近くヒヨツト眼覺めて見ると、四邊は靜かである。夜氣は冷やかに肌に迫りて心は何んとはなしに澄みわたつた。昨夜の歡樂も想ひ出せば淺間しくも感ぜらるゝ。と見れば燈火の影に諸妓はこゝかしこに假寢してゐる。何んといふ淺間しい醜態であらう。小鼓を首に懸けて眠るもの、琵琶を狹むもの、五絃を執るもの笙篌を持つもの、又は抱鼓、簫、笛等を握るもの、何れも晝のたしなみを忘れ、姿を亂して只管眠

りを貪つてゐる。中には半身を露はしてゐるもの、髻を毀はして横つてゐるもの、睡涕を片頰に流してゐる者もあれば、カツ〳〵と物凄く齒を咬む者もある。耶舍はこの淺間しいといふよりは物凄い光景を見て思はず戰慄した。「あゝ之が人間の眞相であるか。人は虛飾の假面に欺かれてこの淺間しい尸のやうな相を知らずに抱いてゐる。」彼はすつくと立ち上つて物に怯えたやうに其處を奔り出た。

「あゝ我には倚る處なく、安穩の住居もない」彼は心にかく叫びながら狂氣の如く波羅捺の巷に奔り出で城外に向うた。その時夜もまだ明けざるに、不思議にも城門は開け放されてゐる。彼は檻を出づる獸のやうに城外に奔つた。

どこといふ宛もなく奔つたのであるが、城より北に進み、金河の畔に着いた。そして思はず大聲をあげた。

「あゝ私は落着く處がない。悲しいことである。」

この時はもう夜もほの〴〵と明け初めた。ちやうど曉の經行に釋尊はこゝを通られて、耶舍の聲をきゝ、其姿を認められた。そして徐に手を擧げて御招きになつた。

「私の處に來るがよい。こゝは少しも惱みがない。」

耶舍は爽な御聲をきゝ、河を隔てながらも靑しい沙門の姿を見て、胸に歡びの希望が湧いた。彼は高價な瑠璃履を河岸に脫ぎすてゝ淺瀨を渡り、直に釋尊の御許に跪いで敎へを請ひ、崇高い相好を拜して心ゆくばかり法雨に浴した。釋尊の聖智は曉の冷氣とゝもにヒタ〳〵と彼の胸に注いだ。彼は炎熱から遽に淸凉の池に浴するやうに、立ろに心の垢を脫して證りを開いた。宿善ある若き人の心は白絹のやうに染り易い。彼は身に莊嚴なる俗服を着けながらも、心は三衣を着する比丘のやうに淸らかなものであつた。彼は身に著けた俗服を省みて耻かしく感じた。この時釋尊は耶舍の心を知つて仰せらるゝやう。

「瓔珞を身に纏うて形は俗であつても、心は煩惱を脫して高勝い境にあつたならば、家にゐても山林の比丘と變ることはない。之に反して身に三衣を着し、山林の中にゐても、心に世榮を貪るならば俗人と云はねばならぬ。

されど甲を佩び、重袍を著くれば强敵を制するやうに、俗衣を改めて染衣を纏ふことは煩惱の賊を破ることとなる。」

聲に應じて俗人の容は消えて、出家の姿となつた。

耶舍の家には、彼の家出を知つて大騷ぎとなつた。諸妓が彼の母に告げると、母は狂氣のやうに父に告げて彼の在處を求めしめた。父は中殿に沐浴して髮を梳つてゐたが、之を聞くや驚き起つて諸人を八方に奔らせ、自分も金河の畔まで探してくると、見覺えある我子の玉履がある。さてはこの淺瀨を渡つたに相違ないと、喜びの胸を躍らせて河を渡つた。此時釋尊は逸早くも耶舍を隱して長者の來るを俟ち、痛切に人生の無常を說き、安穩の道を授け給ふと、長者は夢の醒めたやうに敎を奉じ、やがて父子對面して手を執つて道を喜び、打ち連れて長者の家に到り、釋尊は耶舍の母を初め一門の人々に敎へを垂れ給うた。長者の父母は非常に隨喜して五戒を受けて優婆塞（善信士）優婆夷（善信女）となつた。

この時耶舍の友人四人も同じく出家して釋尊の弟子となつた。其名は雜垢（Vimala）、善實又は善博正しくば善臂（Subāhu）。具足又は滿足（Pūrna）。憍梵波提（Gavāmpati）牛王又は牛主である。又其他の交友五十人も共に出家して證りを開いた。

この中牛主の傳をあぐれば、梵音ガヴーンパチ（Gavāmpati）牛主、牛王、牛跡と譯せられ、

憍梵波提、憍桓鉢とも音譯せられる。釋尊は彼を指して

「天上に居ることを樂んで、人中に處らない」

と仰せられたと記載されてあるから、或は閑寂な處にありて獨り坐禪を樂んでをつたことかも知れない。

(三) 釋尊入滅の後大迦葉は王舍城に於いて第一結集の會を催した。この時諸大弟子は皆な集つたが、彼は獨り天上界の尸利沙宮（或は尸利沙樹の幽居）にありて世尊の涅槃を知らず、この集會にも加はらなかつた。尊者阿那律は天眼を以て之を知り、大迦葉に語りて使を遣らしめた。使の比丘は不那（Puna 前にあげた滿足比丘かも知れぬ）と呼ばれた。彼は直に憍梵波提の下にゆきて、「滅後の結集に列るやうに」といふ大迦葉の使命を傳へた。憍梵波提は之を聞いて「吁、大聖世尊はもう涅槃の雲に隱れ給うたか。一切世間は空虛となりて、天魔は時を得たりと喜び、人々は迷ひの暗に鎖されることであらう。無上の明燈世に在しまさば、我は直にゆきて尊容を拜むであらうけれども、あゝ今はもう我事も終つた。いまより涅槃に入るであらう。汝は我衣鉢を攝めて、諸長老尊に捧げ、慈恕を受けよ」

と云ひ了つて虛空に躍り、種々の光りを放ち、火を作りて身を焚いた。その時身の中より碧瑠璃のやうな四筋の流れ逆つて、各一偈を唱へた。

第一流水

福德つきて
吾等は捨てられぬ。
輝ける日は暮れて
闇の人を誰ぞ救はむ。

第二流水

諸行はみな刹那に滅び
世はなべて苦みにみつ。
さはれそは凡夫の迷ぞ
作者、受者はともに空なれ。

第三流水

心放逸ならず
速に善を修めよ。
容華も年命も
やがては無常の鬼に嚙まれむ。

第四流水

稽首諸老尊
我ことは既に了へたり。
母牛を追ふ小牛のやうに
大師の御あとを追うてゆかむ。

不那比丘は憍梵波提の衣鉢を攝めて、直に王舍城に歸り、尊者の入滅を語り、彼もそこに示寂した。

彼の生涯は終日雨雲に覆はれた日が、夕べに暫時雲の切れ間に光りを放げたやうにも譬へられる。雲の上に輝いた彼の全歴史は地上の我等は知ることはできぬ。吾等は唯涅槃の際に於ける彼の精神を知る丈で滿足せねばならぬ。

(一)『四律』第三二・『五律』第一五・『毘僧』第六・『本集』第三五・『緬傳』一ノ一二〇頁・『須佛』一九二頁・『西傳』三八頁・『佛讃』第四

(二)『增阿』第三。

(三)『西傳』一四九頁・『毘雜』第三九・『傳法』第一・『迦結』『摩律』第三二。

第四　摩訶迦旃延

(一)大迦旃延尊者は實名那羅陀(Naladа)といひ南印度阿槃提(Avanti)國の獼猴食村の波羅門の第二子であつた。家は富み榮えて父は國王の師、大迦旃延(Mahākā yāyana)は其姓である。この尊者が有名となるや人その姓を以て呼ぶに至つた。

尊者の兄も亦英資を備へてをつた。初め兄が家を出で諸國を歴遊し、あらゆる學術技藝に通じて故郷に還り、人々を集めて吠陀論等を廣說したが、那羅陀は家にありて既に兄に勝れた學識を有してをつた。卽ち彼も亦人々を集めて兄のやうに諸論を講じたのであつた。之が爲めに勝氣の兄は密に那羅陀を惡むに至つた。父は夙に之を知つて南の方優禪耶尼城に近き頻陀山にゐる阿私陀(Asita)仙人に弟那羅陀を托した。阿私陀は那羅陀に取つては母方の舅で、嘗つて釋尊が誕生せられた時、淨飯王に招かれて之を相し、「この王子は後に出家して證りを開くに相違ないが、自分は年老いてゐる爲めに、その敎に逢うことは出來ない」と云つて泣いた人である。彼は甥の那羅陀の聰明を愛して心を籠めて敎へ導き、久しからずして四禪に通じ五通を獲せしめた。

(二)阿私陀は亦豫め釋尊成道後第一に鹿野園に法輪を轉ぜらるゝことを知つて、或時甑炙山を出でゝ波羅捺の鹿野苑の邊に舍宅を設けて、日に三度那羅陀をして覺者の出世を念ぜしめ、若し佛の出世を見ば、直に敎を受けて道を修めよといつた。かくて阿私陀は天壽を卒へてこの世を去つた。師に訣れた那羅陀は才に誇りて道を修めず、供養に耽溺して佛の出世を顧ることはなかつた。

傳ふる所によれば、波羅捺城に近き曠野に一古城があつて、その中に古からの偈文があるが、何人も讀むことは出來ない。云ひ傳へには覺者の世に出づる時にはその文字は自と讀めるやうになるが、その眞意は覺者でなければ知ることは出來ぬとのことである。或時一夜叉王は伊羅鉢龍王にこのことを語り、王の爲めに古城の偈を讀み來つて、覺者の出世を告げた。件の龍王は身の毛も竪ちて歡んだ。今や我得脫の時節は來つた。久しく覺者の出世を待ちに待つた甲斐はあつたと、六齋日(八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日)に美はしの娘を連れて龍宮より恒河の岸に赴きそ

の偈の眞意を解する者には、美女と金銀財寶を與へるであらうと聲言した。その偈は

王中の上は誰ぞ。
染者は染と等し(きや)。
いかにして無垢を得るや。
愚者とは何者ぞ。
流さるゝ者は誰ぞ。
智とは何ぞ。
流不流より解脫とはいかに。

人間には讀めなかつた神祕の文字は、今や幾久しき暗の幕を拂ひて人間に傳へられたが、一句々々が皆な抽象的な疑問で、その答は從來の凡ての學說を以てすることが出來るけれども、夫等の學說の解答は依然として問ひに過ぎないので、いまやこの偈文は眞の新なる覺者を望んでをつたのである。大龍王が高價な懸賞を掲げて天下に問うたことは、事實の眞僞は兎に角、深い意味を暗示してゐる。

この時、那羅陀は龍王の聲言を耳にして、七日の間に偈の意味を解くであらうと約束した。さて家に還つて思惟へても、どうしても解くことは出來ぬ。已むなく今度は龍王に代りてその偈義を廣く他人に求めた。先づ不蘭迦葉等の六師に尋ねたけれども、彼等は解りきつた淺薄な文句を並べる丈で、偈の眞意に徹するやうな答をして呉れぬ。少しく進んで尋ぬれば彼等は只徒に氣を揉んで、目を瞋し怒聲を發するに過ぎなかつた。彼は最後に鹿野苑に行きて釋尊に尋ねるに至つた。彼初め思ふやう、耆年に達してゐる老婆羅門さへ解らぬことを、聞けば年も若い瞿曇とやらの解る筈がないと思うたが、道の有無は年齢の多少に依るものでないと再び思ひ返して、鹿苑に赴いた。誠にこの疑問に答へらるゝ人は古今に亘つて釋尊一人であつたのである。釋尊の努力は是に對する答へを獲る爲めであつた。そしてその證悟はこの問ひの活きた解答であつたのである。那羅陀の問ひに應じて釋尊は撞木を俟つて發する洪鐘のやうに答へられた。

王中の上尊は第六天王ぞ。
染者は染と等し。

染されば垢なし。
染者は愚にて
愚者は流に漂はさる。
能く減する者は智ぞ。
一切の流れを捨て
人天を離れ
流に溺れず
死に惑はされず
能く(正)念を主とせば
諸流より解脱せむ。

聰明の那羅陀は之を聞いて一句々々ヒタ〳〵と身に泌み渡るを覺えた。彼は善く諷誦して釋尊を敬禮し、そのまゝ龍王に告げた。かくて龍王とゝもに再び釋尊の御許に詣でゝ教を受け、遂に出家して弟子となつた。

天性明敏なる那羅陀は、偉なる釋尊の人格に化せられて教團の大弟子となつた。舅師阿私陀の望みはこゝに遂げられたのである。爾來那羅陀は教團の內外に說法教化して盛んな利益を施し、摩訶迦旃延の名は人より人に傳へられた。

一。(三)彼は或時、迦毗羅衞國の訶梨聚落の精舍に於いてこの村の長者に「一切の流れを斷ち、亦その流源を塞ぐ」等の偈文を廣說し、「長者よ、眼識が貪りを起す時にその貪欲は眼界に流れ出づる。故に眼から起る貪欲を眼流といふのである。耳鼻舌身意の流も亦之と等しい。この欲流を斷ち、その貪欲の源を塞がねばならぬ」等と述べた。後この長者の病の床を訪れて、三寶を念ずることを敎へ、更に亦この村の八城長者の病を見舞うて化益を與へた。

又或時は釋尊祇園に在せし時、彼は獨り稠林の中にありて西方の國王摩偷羅王の爲めに四姓平等の理を說いた。「婆羅門は第一にして餘の種類は劣、婆婆門は白にして餘の種族は黑と貶すは、獨り彼等の言ひ草にして、正しい道理に合はぬ。婆羅門種の人々でも盜淫を擅にしたならば、王は夫々その國法に從つて處罰をなすであらう。人間の價値は種族に依るものでない。行業の善惡に依るものである」と敎へ、王をして隨喜の念に咽ばしめた。

二。(四)或時彼は波羅捺國烏泥池の側にあつて多くの比丘とゝもに食堂にあつた。この時尊者の名聲は盛んに四方に擴つてゐた爲めに、耆年を超えた老婆羅門が尋ねて來て杖を力に食堂の邊に立つて默つてゐた。彼は心密に諸比丘が自分のやうな老長者を勦り敬ふであらうと待ち設けてゐたのであるが、彼等は少しも顧みてくれぬ。婆羅門は堪へ兼ねて自ら口を開いた。「汝等はなぜ自分のやうな老士を恭敬はないのであるか」摩訶迦旃延之を聞いて「我等は老士を恭ふ敎へを奉じてゐるけれども、この坐中には吾等よりも老士がをらぬ」といふ。老婆羅門は驚きの眼をあげてその故を問ふと尊者は重ねて「梵士よ、齡耆年に及び、又は八十、九十になりて髪白く齒落ちるとも、貪りを離れずして、色香味觸に耽る者は、尙年少と云はねばならぬ。若し又二十五才の少壯者にして、膚に光澤あり、髪黑くして、美しい人でも、よく愛欲を解脫するならば老宿士と云ふべきである」といふと、老婆羅門はこの敎へに悅服して去つた。

三。(九)或時彼が阿槃提國の獼猴室村に住すると、この村に魯醯遮といふ婆羅門がをつて、懇に尊者を恭敬した。或日の事、この婆羅門の年少の子弟が薪を採りにいつて尊者のゐる窟の邊りに巫山戲まはり「をるぞ〳〵。禿頭の奴がゐるぞ。どうせ碌な者ではあるまい」と一人が云へば「おい〳〵、餘り惡口するな。師匠が敬うてをらるゝ人ぢや」と制する者もある。尊　は之を聞いて、窟外に出で少年達を集めていふやう

「古の婆羅門は眞面目に妙戒を修めて宿命智を獲、眞の禪を樂み、常に慈悲心をもち、五根の欲を制したが、今の婆羅門は眞實の行を捨てゝ、邪道に奔り、獨り塚間に餓ゑて、髪を編み蠶衣を着け、表に形を苦めて內心には放逸をもち、全く虛假の婆羅門となつて、利養を求めてゐる。

少年等よ、是等は眞の波羅門とは云はれぬ。澄淸に心の塵垢を去り、衆生を惱まさない者を眞の婆羅門といふのである。」

彼等は尊者の語を聞いて內心に瞋りを含み、その旨を師の婆羅門に告げた。師は之を聞いて驚き怪み「自分があれ程敬うて親切を盡してゐるのに、左樣な惡罵を吾等に浴せかけるとは心得ぬことである」と急いで尊者を訪れて、上の趣を述べると、尊者は遠慮なく少年に語つた如く述べた。婆羅門の心は相應に尊者を敬ひ、友情を以て交らうとするのであつたが、尊者はそんなことに頓着なく自分の信ずる處を述べたのである。婆羅門は一度は心に忿つたが、改めじ

尊者の說く處の門戸はなんであるかと尋ねた。尊者は「門」の字を緣としていふには

「婆羅門よ、眼は卽ち門である。この門により我等は物質を見る。耳鼻舌身も亦心の門である。愚痴の凡夫はこの門を護らずして、外物に捕へられ、智者はこの門を能く護つて心に滿足を獲解脫を得る。」

直截簡明に打つてくる太刀を奪ひとつて對手の胸を抉ぐるやうに婆羅門の中心を衝いた。婆羅門は甘露の法を獲たと喜んだ。

四。(六)釋尊、阿槃提國に在せし時、彼は諸比丘に向つて無常の理を說いた。

「比丘よ、一切の合ふものは離れ、建なる者も遂に疾病に侵される。若きも老い、老いては死の領に入る。譬へば花に宿る朝露の如く、日出る迄の短い命である。その盛んなる日の天下を照すとも、やがては暗黑の夜に沒せねばならぬ。すべて生るゝ者は死し、盛んなる者は衰へ、會ふ者は別る。萬物はかやうにして常なきものである。されば恩愛心に任せず、戀ふる者も逝き、戀はるゝ者も逝く。惡病身に入る時は骨肉漸く衰へ、惱みは晝夜に心身を苛みて、水漿咽を下らず、醫藥効なく、神呪行はれず、命終らんとする時には、六痛つぶさに至つて、つく息も迫り、脈搏も絕え、顏色うせて、惡汗にじみいで、虛空を握んで碗蜒りまわる。かくて神去れば屍を送りて野外に出で、或は火に燒き、鳥獸の牙に任せる。一片の煙と化して灰となるか、又は支節碎れ、筋骨離れて泥土に歸る。塚間に送りし父母妻子、知友も空しく悲みの涙を絞りて、別れ〳〵に家に歸り、何人も代りとなることは出來ぬ。

比丘よ、汝等この理を知りて泡沫の世榮に著せず、一心に道を修めよ。」

痛切なる敎誡は諸比丘の腸を抉つた。

五。(七)釋尊滅後、釋尊は波羅梨國の長者竹林中にあつた。この時國主文荼王第一夫人逝きて、王は悲嘆の餘り飮食を取らず、政を見ず、臣下に命じて夫人の死屍を麻油に浸して、あかず打ち眺め、「この口はなぜもの云はぬか、この手は我を抱かざるや」と、明暮追慕の情に咽んだ。

王の悲嘆はいつやむべくも見えないので、臣下の人々は大に愁ひて、尊者の威德を王に說いて敎へを受けしめた。「王よ、この國に大沙門あり、名は那羅陀尊者といひ、大神通を有し、博識にして何事も知らぬものなく、辨才ありて語る時はいつも微笑を含んでゐる。王よ願くば敎を受けられよ。」王は臣下の言を納れて駕を嚴にし、寶羽の車に乘りて城外に出で、尊者を林

中に敬禮して教へを請うた。

尊者は王の爲めに人の世の夢幻泡沫をとき、進んで老病死のやむなきをのべ、一偈を唱へた。

悲まば
外魔ぞ入らむ。
智者悲まねば
外魔は愁ふ。
威儀嚴に
布施を好まば
大なる福祐來り
愁憂も頓に消えむ。

尊者の教誡は王の惱みを拂ひ、一心に三寶に歸依せしめた。

以上の外に尊者の事蹟は多く知ることは出來ぬ。

（一）『本集』第三七。
（二）『本集』第三七・『五律』第一五・『四律』第三二。
（三）『雜阿』第二〇。
（四）『雜阿』第二〇・『增阿』第二四。
（五）『雜阿』第九。
（六）『生經』第二。
（七）『增阿』第二四。

第五　三迦葉

優婁頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉

(1) 三迦葉は兄弟である。長兄は優婁頻螺迦葉（Uruvilvākāśyapa）といひ、摩竭陀國（Magadha）尼連禪河（Nairañjana）の優婁頻螺村にをつたので、地名を以て名としたらしい。釋尊成道の年はこの迦葉はもう百二十歲の高齡に達し、德望國中に聞え、五百の弟子を有してをつた。次兄は伽耶迦葉（Gayā-kāśyapa）といひ禪河の畔なる伽耶にをつたので此名あり、弟子三百人。弟は那提迦葉（Nadi-kāśyapa）と稱して二百人の弟子を有つてをつた。三人ともに火神（アグニ Agni）に仕へて共に禪河の畔に住み、兄は優婁頻螺に住み少しく下流に次兄の伽耶迦葉は住み、それより少しく下つて那提迦葉は住してをつた。そして迦葉三兄弟として知られてをつた。

成道第一年釋尊は鹿野園に五比丘を度し、そこに夏安居をすませて諸弟子を四方に派遣し自ら伽耶の附近なる優婁頻螺村に往きて優婁頻螺迦葉を訪ねられた。

迦葉は日の暮れ方に遠來の沙門が來たと聞いて逢うて見ると威容盛んなる壯年の沙門である。聞けば一夜の宿を賴むといふ。彼は祭つてゐる毒蛇の室を思ひ出していふには、「そこに私等兄弟の外は入ることの出來ない毒蛇のゐる室がある。卿若しそこでも宜しければ、宿るがよい」といふと件の沙門は快く肯ひてその室へ入つた。迦葉思ふやうは、「吾等三兄弟は證を獲てゐるから蛇害を受けないが、その沙門は相好は嵩高いけれども屹度蛇害を受けるであらう。

件の沙門は云ふ迄もなく釋尊である。靜に遠からぬ毒蛇の室に入つて草を敷いて坐し、今宵毒蛇を調伏しやうと思はれた。夜に入るや、毒蛇は人の氣を知つて瞋恚の大火焰を吐いた。釋尊も亦精神をもつて火焰を放つて之に應じ、二火洞然として夜の暗を燒き、林の隈を照した。迦葉を初め多くの弟子は之を見て「あゝあの沙門は可憐さうに殺されて仕舞ふ」と流石に哀愍の情を催してをつた。

翌日釋尊は毒蛇を鉢に入れて迦葉に見せられた。彼は一度釋尊の威神に驚いたが、何をいつても國中に大師と仰がれる程の人であるから容易に憍慢の頭を下げない。「いくらこの沙門が偉

いといつても、未だ私には及ばない」と思うた。この時釋尊はこの毒蛇を世界の外に棄てられたが、之も迦葉を驚かすに充分であつた。迦葉は中心悅服しないけれども、ともかくも離れ難く思うたと見えて、釋尊に請ひて「此處に暫く滯在して供養を受けて下さい」と願うた。釋尊は「汝、若し毎日のやうに私のゐる處へ來て、私を請ずるならば、こゝに止るであらう」と仰せられると、迦葉は快く諾うた。

其夜釋尊は遠からぬ林中に入られたが、迦葉が出でゝ見ると、林は美しい四つの光りに照らされて鮮である。明日、約の如く釋尊の御許にゆきて光の故を問はうと釋尊は「四天王が聞法に來たのである」と仰せらるゝ。迦葉は心中驚きながらも、態と平氣を裝うて朝餐の爲めに釋尊を自室に請ずると、「先づ卿はさきに行くがよい。私は直と後から行くであらう」と仰せらるゝので、迦葉は先に自室へ還ると、釋尊は既に神通を以てヒマラヤ山の林中にある高さ百由旬なる閻浮樹の果を採つて、迦葉より早くその室に俟つてゐて、驚く迦葉にその果實を與へられた。其夜は帝釋天が聞法に來たので釋尊のをられる林中は昨夜よりも更に美しく耀いた。翌日も亦迦葉の還るより早く閻浮提の國界にある訶梨勒樹の果實を採りてその室に俟ち、其翌日は同處にある阿摩勒樹の果實をとり、その翌日は北鬱單越の自然の硬米を取つて迦葉に與へられた。そして夜は娑婆界主と梵天王が聞法に來た。迦葉の心は漸々畏敬の念を增した。

又釋尊が水を須ゐんとする時、尼連禪河は自ら曲りて御側を流れ、死人の衣を取つて浣はうとし給へば帝釋天の神通によりて地は凹みて自ら池を成し、阿毗釋迦山神は大石瓮を送つて洗濯の用に供した。濯ぎ終れば傍の柯賒樹は自ら曲りて掛竿の用をなした。夫毎に迦葉の心を驚かせた。又迦葉の五百人の弟子が神火の用たる薪を割らんとて斧を上げると、そのまゝ宙に押へられたやうになつて下らない。迦葉は驚いて、之もあの沙門の仕業であらうといふので、往いてその由を申すと、釋尊の意に從つて斧は自ら下つた。又數千の神火を點ぜんとすれば、どうしても火はつかない。之も前の如くにして佛意に隨つて火は點ぜられた。その中に年中行事の一ともいふべき大法會が來た。國内の民衆は七日の間この迦葉の許に集つて大供養をなすのである。迦葉密に思ふやう「この大沙門は崇高い相好に加へてあれ程の神通を備へてゐる。若し人々がこの沙門を見るならば自分を捨てゝこの沙門を供養するやうになりはせまいか。」流石の德崇き老道士もこゝに最後の恐れを懷いた。釋尊の偉大なるは充分認めるけれども、若し人々

が我を捨てて彼に歸依しては大變であると思うたのである。之といふも、迦葉の心の奥に尙ほ釋尊に對する反抗の我念があることを證してゐる。釋尊は之を御知りになつて、七日の間は身を隱して、迦葉の一人舞臺として滯りなく法會を濟ませた。法會がすんで迦葉が安堵してゐる處へ釋尊は悠然として現はれ來り、「卿の心を知つて態と法會中は姿を隱した」と仰せられた。迦葉はもう自分の心を見すかされたと思うて慚愧を懷いた。迦葉の歸伏の日も近いたのである。

時に熱帶の大雨は一週間も續いて尼連禪河の水は溢れて、その邊一帶は湖のやうになつた。迦葉は船に乘つて釋尊の林に行くと、世尊は禪河の上を歩いてゐらせられる。迦葉は今更の如く釋尊の威德に驚いたが、尙ほ自己全體をあげて歸依するの念を起さなかつた。この時釋尊は時機至れりと思はれて空中に躍り上り

「迦葉よ、汝は證りを開かずして、自ら證りを獲たと思うてゐる。我より見れば汝は決して誠の證りを開いてをらぬ。」

と仰せられると、迦葉は電光に撲れたやうに、この最後の叱責に逢うて、中心の我を叩き折られた。釋尊の來訪以來三ヶ月間の神通說法は、こゝに最後の點睛によつて一時に躍動し、遂に中心から歸依の情を起して弟子となつた。五百の弟子も師とゝもに具足戒を受けた。釋尊が長い間の努力はこゝに美はしい實を結んだのである。

こゝに於いて迦葉は被服や火神に供へる祭祀の具を盡く禪河に流すと、二人の弟は是等の流れて來たのを見て兄の身を氣遣ひ、諸弟子を連れて兄を訪れると、兄は二弟に對して釋尊の弟子となつた逐一を物語つた。二人は元より長兄を信じてをつたことであるから、五百の弟子とゝもに釋尊の弟子となつた。釋尊は三迦葉と千人の弟子を隨へて伽耶山に上られた。東方遙かに王舍城に續く山々谷々は美しく開展されてゐる。折節彼方の岡に一點の火光が見えた。釋尊はこの火に因みて大法說を試みられた。

「比丘よ、一切のものは皆な燃えてゐる。眼も燃え色（事物）も燃え、眼識も燃えてゐる。眼が外界の事物を見て心の內に苦樂の感覺を起さしめると、この感覺は貪瞋痴の炎を煽り、生老病死、愁憂苦惱の火を盛んならしめる。然るに淸淨に行を修める眞の佛弟子は、欲火を滅する爲めに、外界の火はもはや內心を燒くことは出來ぬ。こゝに眞の智慧は獲られることであ

る。されば汝等は神通と思惟と教によりて道を修め、從來の儀式、供犧等をなすことは要らぬ。」

三迦葉を初め千人の比丘は無漏心に住し淨法眼を獲た。かくて釋尊は一同を隨へて王舍城へ赴かれた。時は春も暮れんとして初夏の熱さは早く來りて人々を惱せた。一同涼風をまつて居ると、帝釋の神通によりて涼風そよ〳〵と吹き來りて熱さを拂ひ、大衆は蘇る思ひであつた。

一行は頻婆沙羅王に迎へられて迦蘭陀竹園に着いたが、群集は優婁頻螺迦葉と釋尊を見て、何れが師であらうかと怪んだ。釋尊は之を見はして、迦葉をして火神を棄てた理由を述べしめた。迦葉は佛の意を知りて

「人々は常に美味を貪り、聲色に心を馳せて、犧牲の功德を信じてゐるけれども、私は是等を垢あるものと認めて犧牲を供へることをやめた。たゞ涅槃こそ休安の一道である。心の垢れを脫し、生死の繫縛れを離るゝ涅槃こそ眞の幸福である」

といひ終つて、釋尊を敬禮した。こゝに至つて群集は初めて迦葉の轉宗を知るに至つた。彼の德望の高かつたことは是にても知られることである。そして又釋尊の名聲はこの時より隆々として國中に響き渡つた。かくて迦葉の三兄弟は終生教團の上首となつた。

（一）『五律』第一六・『四律』第三二・『毘僧』第六・『須佛』一一九二頁・『緬傳』一ノ一三八頁・『西傳』四〇頁・『本集』第四〇第四一第四二・『佛讃』第四・『許帝』第九・『西域』第八・『哩佛』第三・『中阿』第一一・『雜阿』第三八。

第六大目犍連

附　蓮華色比丘尼

第一章　出生より歸佛まで

(一)摩竭陀の首都王舍城の北方大凡四里、那爛陀の西商二十丁弱の處に俱律陀(Kolita)と云ふ村があつた。尊者大目犍連はこの村落に生れた。その家の莊麗なことは天宮のやうであると云はれ、五百輛の供廻があつたとも傳へられてゐる。父は王家の師たる波羅門で、名は知れてをらぬが、母の姓は沒特伽羅又は目犍連(Maudgala)譯して採菽といふ。彼はその容貌が母に酷似してゐるので、沒特羅子(Maudgala putra)目犍連子又は母の姓に從つて目連羅夜那(Maudgalyāyana)と稱せられたが、本名は村名の如く俱律陀(Kolita)といつた。顏容は丈夫らしく凛としてをつた爲めに、衆人は彼を見ることを樂んだ。彼は亦學問を好み、當時のあらゆる書籍を讀み耽り、悉く夫等を消化する腦力を有つてをつた。そして彼は一人子であつた爲めに父母の熱愛の中に成長した。

(二)程近い迦羅臂拏迦邑に同學の友優波低沙がをつた。兩人は才智等しく、群を拔いた。そして互の友情は非常に濃であつた。兩人は遂に厭離の念に馳られて家を出でんとを約した。俱律陀は早速父母の許へゆきて、出家のことを願うたが、父母はまだ年若い一人子の出家には、容易に同意することが出來なかつた。片時離れても子の安否が氣遣はれるのに、遠く家を捨てゝ道を修めるといふことは、兩親に取つて烈しい打擊であつたに相違ない。けれども何一つ過失のない聰明の彼が、思ひ込んで翼ふ殊勝の志には、流石に愛着の深い兩親も、動かされない譯にはゆかなかつた。殊に俱律陀が幼い時から立派な人格を具へ、且つ行ひの正しかつた爲めに、兩親を始め一家の人々が、彼の云ふことを實行することは殆んど家憲のやうになつてをつた。之が爲めに今回の出家といふことも、無下に拒む譯にはゆかなかつた。父母は泣く〳〵彼の言葉に任せた。

兩親の聽許を得た俱律陀は、直ちに優波低沙と共に王舍城に赴き、當時學德の高い刪闍耶の弟子となつた。兩人は幾許もなく師に代つて門弟を敎へるやうになつたが、眞實の解脫を獲ることが出來なかつた。彼は優波低沙と相約して更に良師を求め、誰でも先に師に逢うたならば、

必ず知せ合うて行動を共にしやうと申合せた。かくて心ならずも面白からぬ月日を送つた。

成道第二年頃、釋尊は王舍城竹林精舍にあつて道を弘め給うた。或時優波低沙は馬勝比丘に逢うて、諸法因緣の偈を聞き、更に夫が大聖釋尊の敎たるを聞き、喜び勇んで約の如く俱律陀に知らせんとし歸つて來た。見れば優波低沙の顏は法の喜びに輝いてゐる。彼は驚いて其故を聞へば、優波低沙は馬勝比丘から聞いた諸法因緣生の偈を唱へた。俱律陀も之を聞くや否や、一道の光が暗中に閃くのを感じた。彼は今迄あらゆる敎に接したけれども、何も眞に胸を刺すやうなものはなかつた。多くの敎は、彼を導くよりも、彼の鋭い心に破られる材料に過ぎなかつた。然るに數句の偈であるが、因緣無我の敎は、彼の胸を貫くものがあつた。(三) 誠や過去遠々の昔から、植ゑた善根がいまこゝに熟した腫物のやうに破れる時節が來たことであらう。乃ち相携へて師刪闍耶を捨て、釋尊の弟子となつた。

(一) 『西域』第九・『本集』第四七・『須佛』二〇〇・『西傳』四四頁『古印』四七〇頁。
(二) 『西域』第九。
(三) 『毘出』第二。

第二章　修　道

一　耆闍崛山の修道

(一) 歸佛後、彼は釋尊の敎の如く修めた。彼は竹林を出で、獨り耆闍崛山にあつて「聖默然」を修めた。そは心を一つに淨めて、感覺を離れ、觀想を去り、全く無覺無觀三昧に入つて法の喜樂を味ふことである。目連はこの定に入つてゐたが、やがて復感覺ある天地にでた。この時釋尊は遙に竹林精舍にあつて之を知り給ひ、直ちに目連の前に表はれて、

「目連よ、汝「聖默然」に住するならば、放逸を起してはならぬ。道を修めることを止めてはならぬ」。

と仰せられた。目連は之を聞いて又其禪定に入つた。かくすること日に三度に及んだ。

或日は又同處に「聖住」を修めた。そは一切相無相の現象を念はず、心を正しくし、身を寂にして、寂滅にあることである。彼はその定に入つたが、やがて復諸法を念ふやうになつた。こ

の時も釋尊は竹林精舍から、遙に神通を表はして目連の前に表はれ、

「目連よ、汝「聖住」を修めるならば、放逸を起してはならぬ。」

と仰せられた。目連は此の訓誡に接して、再び一切諸法の相を離れて寂靜の境に入つた。その日も之を繰返すこと三度に及んだ。

かやうに釋尊の嚴しい教養と、そして彼が天賦の宗教的才能と、熱誠とによつて、僅に歸佛(一)後七日にして正しき證りを開いた。彼は他日耆闍崛山に於て、多くの弟子にこの時の修道の道程を說き、終りに

「自分は箇樣に懇篤な世尊の教誡によつて、證りを開くことが出來た。故に自分は正しく佛の子である。佛の口から生れ、法に從つて化生し、佛法分を得た。かく僅かの修道によつて禪解脫を獲たのは、正しくかの輪轉聖王の王子が、未だ王位に上らない先に、既にもう王の珍寶を獲ると同じく、自分も佛の子となつた爲めに、長い修道に依らずして、禪解脫を獲たことである。」

と自分の修道を誇らずして只管世尊の德化を稱へた。

(一)『雜阿』第一八。

(二)『須佛』二〇三頁。

二　睡　眠

(一)之も彼が覺を開く前後の事蹟らしい。釋尊が鹿野園に在せし時、目連は摩竭國善知識村に在つて道を修めた。獨り安靜な處に座して思惟してゐると、いつか睡眠に落ちた。この時釋尊は數十里隔つてゐる鹿野園から忽然として目連の前に表はれ給ひ「目連よ、睡眠を貪つてはならぬ。若し睡眠に襲はれたならば、法を聞いて唵誦んぜよ。さすれば睡眠を滅すことが出來るであらう。若し尙ほ襲はれるならば、その法を他人に宣べよ。乃至、兩手を以て耳を捫と模り、冷水にて滿身を洗ひ、室を出でゝ四方を望み星宿の耀くを見よ、更に室を出でゝ屋根に上り、大地を步き心を攝めよ。道に尼師檀を繫いて結跏趺座せよ。或は室に入つて右脇に臥して正念正智なれ。さらば睡眠を滅することが出來るであらう。

目連よ、床に寢て安眠を貪る事を忻うてはならぬ。財利を貪り、名譽を求めてはならぬ。是

等は皆な世俗の事である。世俗の事に思ひを注げば、徒に心を勞するのみにて、禪定にあることが出來ぬ。目連よ、山林の安靜なる處、人里遠き高巖石室の惡聲なき處にあつて、道を修めるに若くはない。汝若し村に入つて行乞するに、利を厭ひ、供養を厭へ。されど又徒に高大なる心を持つて村に入つてはならぬ。人若し敬はざれば種々の煩惱が起るであらう。更に法を說くに當つて、徒に荒々しく說いて師子の吼ゆるやうであつてはならぬ。法を說くには、力を捨て、力を滅し、力を破壞らねばならぬ」

目連はこの懇にして而も嚴な敎誡に接して、肅然として威儀を正し、釋尊を禮し奉つて、究竟の覺りに至る道を問うた、世尊は更に問ひに應じて覺りに至る方便を御說きになつた。

（一）『中阿』第二〇。

三　目連と惡魔

更に吾等は、彼の修道に關して、左の事蹟を非常に興味多く感ずることである。

（一）彼は或時、釋尊とゝもに婆奇瘦國鼈山怖林鹿野園の中にあつて、世尊の爲めに窟を作り、獨り露地を經行いてゐると、魔王が身を微くして彼の腹中に入つた。されど目連は既に覺りを開いて諸弟子を敎授する時であつたから、細な魔王の働きを奇異に感じて、直樣道に趺座して腹中を觀じ、魔王を認めた。既に所在を知られた魔王は、彼の叱責を受けて腹中より出でゝ目前に姿を表はした。この時目連は魔王に語るやう。

「魔王よ、遠き古、枸樓孫佛の出世せられた時、二人の大弟子があつた。一は音尊者というて、其說法の聲は高く徹りて千世界の涯に及んだ。他は想尊者というて、善く威儀を守りて托鉢し、獨り山林にゆきて無想定に入つた。兩人は常に師の如來を助けて道を弘めた。馬王よ、其時我は惡乳といふ魔で妹の魔は黑というた。そして汝は實に我妹の子であるから我とは親戚の誼みがある。魔王よ、我はその時彼等兩人を初め一切持戒の沙門を惡んだ。彼等は靜に戒を持ち、獨り自ら修めて思ひを凝してゐる。譬へば猫が鼠を覘ふやうに、たゞ靜然として動かない。そして鼠が出れば直に捕へる。彼等の行ふ處は凡てかやうである。かやうに陰忍な奴は其儘にしておくことは出來ぬ。我今から國の人々を誘うて彼等を迫害せしめるのであらうと、多くの人々をして沙門を傷けしめた。彼等は人々の迫害を受け、衣裂け、鉢破れ、身體に瘡を受けて

も、尙ほ枸樓孫如來の敎を守つて其敵を憎み、常に天地に滿つる慈心を以て人々を慈しんだ。かやうに其心に隙がなかつた爲めに我は入ることが出來なかつた。けれど我は執念深く第二の方法を案出した。我は直ちに人々を誘うて、彼等沙門を敬ひ、供養を厚くせしめた。けれども彼等は亦如來の敎へによつて、無常を觀じ、名利の念を遠けた。かくして我は彼等の心を亂すことが出來なかつた。魔王よ、こゝに於いて我は最後の手段をとつた。夫は第一の弟子音尊者を撲殺すことである。或時音尊者は枸樓孫如來に從うて、曉衣を著け鉢を持ちて巷に食を乞うた、我は其時少年と化りて、手に大杖を執り、道邊に立ちて音尊者の頭を擊つた。頭破れ血流れて滿身を浸せども、彼は少しも騷がず影の形に添ふが如く師の後を追うた。如來はこの時龍の如く四方を見、我を認めて「汝、厭足くことを知らぬ凶魔」と宣給へば、言訖らざるに大地は二つに裂けて、吾を呑み、そのまゝ大地獄に墮ちた。

魔王よ、我は數十萬歲の間、自らの罪によつて大地獄に宛轉り廻つて苦毒を嘗めた。魔王よ、瞋の火、毒我の焰は、人を燒かずして先づ自身を燒く。汝久しき間惡をなし、佛を犯し聖衆を亂さんと企てゝをる。其報いは遠からずして汝の上に下るであらう。」魔王は目連の詞りを受けて戰き恐れて姿を隱した。

この物語は、彼の修道の深い處を示してゐる。釋尊の敎は無我の理を覺るにある。然るに惡我は久遠劫來の自性である。これによつて吾等は輪廻を重ねて來た。證りを開いた彼の如き偉人の胸にも矢張り惡魔の囁きがあつたことは頗る注目に價する處と思はれる。然るに彼は明徹つた智慧によつて一點の曇りとも云ふべき魔を看破した處に深い味があるのである。彼が往昔佛僧に讐をなした惡我は自らであつたと自覺し、そして惡魔の誘惑を退けた處に光輝ある靈の勝利があると思ふ。

（一）『中阿』第三〇・『魔燒』・『弊魔』

第三章　目連の特長

目連の特長については、前に舍利弗の性格を敍べた處に略記載したことであるが、尙ほ彼の細な事蹟を辿る前に、いま少しく其概念を判然させておく必要がある。

舍利弗の智慧第一といふに對して、目連は神通第一と稱へられてゐる。この內容を古文書に徵すれば、空中を翔けたり、地を潛つたり、其他樣々の超自然的の奇蹟を行ふことを指すのであるが、私は夫を考へるに先ちて、其處に至るまでの經路を迹けて見たい。舍利弗を智慧の人とすれば彼は意志の人であつた。才の勝れた舍利弗に對して彼は豪爽の質を備へてをつた。舍利弗が明快な頭を以て能く人々の迷妄を破つて、眞實の智慧を植ゑつけると、彼は夫を養うて生活の上に浸潤ませた。舍利弗は智を與へ、目連は行を與へた。舍利弗を創業の人とすれば彼は守成の人であつた。前者は天の人、後者は地の人であつた。卽ち目連は堅實な意志の人、勇者であつた。この趣きは經典の多くに記載されてある。

(一)月の十五日、釋尊瞻波國恒伽池邊に於て法を說き給ふ時、只默然としてゐらせられる。初夜も過ぎ中夜過ぎたれども尙ほ默然として一語も申されぬ。阿難右肩をぬぎ「世尊よ、中夜も過ぎて後夜も旣に盡きんと致してをる。どうぞ御法を說いて下さい」。と申すと、釋尊は「この中に不淨の比丘がゐる。淨比丘の間に不淨の比丘のあるは良き稻の中に惡草の生へてゐるやうなものである。こゝには淨戒を說くことが出來ぬ」と仰せられた。この時目連は定に入り、他心智を以て衆比丘の心を見、遂に二人の不淨の比丘を見出して、其前に立ち「汝等、速に去れ」と云つたが二人は默然としてゐる。彼は兩人の臂を捉へて引き立て行き、門外に押出し「癡人、遠方へ行け、此處にをつてはならぬ。」と叱つた。さて二比丘を放逐しておいて改めて世尊に對つて說法を請ひ奉つた。その豪爽なる態度が見えるやうに感ぜられる。

(二)更に琉璃王が釋尊の故國を滅さんとする時、彼は釋尊の御許にゆきて、王の大軍を他の世界へ擲へ擲著てることを請うた。けれども釋尊は許されなかつた。「目連よ、汝は宿緣を他の世界へ擲げることができるか」と仰せられた。目連は今度敵を仆すことをやめて、味方を保護することを考へた。彼は迦毗羅城を空中に置くこと、さもなくば城に鐵籠をかけることを乞うた。けれ

ども釋尊は「汝宿緣を空中に停め、又は之に鐵籠をかけることが出來るか」と仰せられ。

空を地となし
地を空となすも
宿業の繫ぐ處は
力及ばず

と抑せられた。流石に焦つた目連も業報の已み難きを忘うて鬱勃たる勇氣を押へた。

(三) 成道第七年頃、釋尊は三十三天に上つて摩耶夫人の爲めに法を御說きになつた。この時難陀、優般難陀の二龍王は、釋尊が自分等の上を飛びゆくを憤つて之を妨げんと企てた。卽ちこの道は天の道であつて人間の道でない。然るを彼が自由に通らんとするは謂れないことであると云ふのである。二龍の惡意を知つて、大迦葉、阿那律、迦旃延、須菩提等の諸大弟子は各競うてこの惡龍を征伏せんことを乞うたが、釋尊は遂に目連をして之に當らしめた。彼は命を承けて二龍を降伏し併せて二龍の害を蒙らんとした波匿王の危難をも救うた。

上にあげた後二つの記述は荒誕不稽も甚しいやうに思はれるが、私はこの記述の歷史的研究はやめにして、兎も角も當時の大きな出來事に對する彼の殉教的の勇氣や、力量が認められると思ふ。勿論是等の記載には事實を誇張したり、象徵詩のやうに造り上げたやうな點は充分あるとしても、彼の特長を認めるといふ點に就ては何も是等に妨げらるゝことはない。否な隱れたる彼の勇氣と力量をかやうに象徵したと思へば寧ろ面白くも感ぜらるゝ。かやうな實行的な彼の性向が生涯を通して一面には嚴烈しい布教となつた爲めに、到る處外道の邪義を推破して多くの人々を佛教に歸せしめた。夫等の實例は多く傳へられてをらぬけれども其明な證據は、外道に惡まれて、遂には彼等の毒手に仆れたことによつて知られることである。多くの佛弟子中彼等が特に目連を目指して、憤怨を霽らした處に、彼の性向や特長が反證されると思ふ。

最後に、云ふ處の神通に就いては、別に研究を要する大問題であるが、今日一部に八釜しく研究もせられ、又實驗もせらるゝ催眠術、千里眼等の事實に徵すれば幾分の想像も出來ぬことはないと思はれる。印度人は一般に冥想的であるから科學的に廣く各種の現象を研究することが少かつた代りに、深く精神の中へ喰ひ入つて、其廣い主觀の天地を觀、又は驚くべき精神力を發揮したことは、他國人に比して著しい特色である。殊に佛弟子の如き嚴烈な修道によつて

心を鍛へた人に取つては、常人の想像のつかぬ精神力を持つてゐたことは慥である。疾病や打撲のやうな肉の痛みでも、彼等は得意の定に入つて能くその痛みを忘れ、苦みを癒した。この力を積極的に打ち出した處が所謂神通又は神變である。目連尊者の如き意志の強い、實行力の勝れた人は同じ證りを開いたにしても、殊にその實行的な方面卽ち神通力といつた驚くべき強い實行力を獲たに相違ない。かやうに考へてゆけば、彼の神通第一と云はれた處も稍輪畫丈でも解るやうに思はれる。

（一）『中阿』第九、第二九・『四律』第三六・『誦律』第三三。
（二）『增阿』第二六・『西傳』壹壹七頁。
（三）『增阿』二八。

第四章　目連と在俗者

在俗者に關する目連の事蹟は餘り多く傳へられてをらぬ。左に擧ぐる二三は多くの經典から漸く蒐めたものである。

一　給孤獨長者の子

（一）或時、目連尊者は朝まだき祇園精舍を出でゝ舍衞城を行乞し、給孤獨長者の家に行くと、長者の子は種々の外典を暗誦してゐる。尊者は之を見て、長者に申すやう「外典は鐵の石榴のやうなもので、いかに苦心しても食べることは出來ぬ。然るに佛の敎は初から終りまで善美を盡してゐる。能く解了めば涅槃に赴くことが出來る。卿は何故に佛敎を學ばせないのであるか。」長者は敎へる人さへあれば喜んで我子を托したいと申すので、こゝに尊者は長者の子を敎育することを約した。かくて長者の子は毎日のやうに祇園精舍に通つた。

當時、舍衞城に於て、毎年秋の初めになると追剝がでゝ諸人を惱ました。彼等は財物を奪ふのみならず小兒まで掠奪して奴僕のやうにこき使うた。安居も卒へて秋風のたつ頃、賊共は集つて話合ふ中、毎日のやうに祇園精舍に通ふ長者の子を奪はんと相談した。精舍の位置は舍衞の巷から南一里の處にあつたから、路には深い林もあつた。彼等はこゝに待伏して長者の子を奪ひ去つた。子の從者は辛くも免れて給孤獨長者に告げた。長者も驚いて直に波斯匿に訴へると、王は臣下の毗盧叱加に勅して早速賊共を捕へしめた。處が運惡くも此人は長者と仲が惡か

つた。彼は事を左右に托して容易に出掛やうとはせない。長者の子の危險は刻々に迫つた。この時目連に歸依してをつた天人があつて、事の由を委に目連に告げ知した。彼は子の行末を案ずる父母の悲歎を慫むとゝもに精舍に通ふ路に於いて盜賊の跋扈することは、教法の流通に多大の妨害をなすに至るを念うて賊を懲さんと決心した。彼は直ちに神通を以て毗盧叱加の軍衆を現はし、大に戰鼓を鳴らして賊を圍んだ。彼等は驚き恐れ、長者の子を捨てゝ辛うじて身を以て遁れた。既にして目連は神通を收めて道邊の樹下に坐した。童子は毗盧叱加將軍に助けられたと思うて尊者の前を通ると、彼は明日も舊の如く業を受けに來いと申してそのまゝ祇園精舍に歸つた道に毗盧叱加將軍に逢うた。彼は童子の來るを見て怪んで故を問ふと、毗盧叱加將軍に助けられたと云ふ。將軍は之を奇異に思ひ、道に何人かを見なかつたかと問へば師目連に逢うたと語る。さては譽れ高き目連尊者が神通を現はしたことであると深く目連の威德に服し、殊に功を人に讓る無我の行爲に感じ入つた。

二　商人の崇拜

(二) 更に在俗の人々が、尊者を崇拜し、或意味に於て信仰の對象としてをつたことは、左の事蹟によつて知ることが出來る。

舍衞城の商人で、常に目連の教を受けてをつた人が、多くの人々と一所に航海したが、一日風荒れ波逆捲いて、船は惡龍の捉ふる所となつた。人々は各日頃仕へてゐる神々に祈つたが何の効驗もなかつた。その時先の商人は一心に尊者目連を念じて救を求めた。その念が通じたと見えて、尊者目連は神變を以て金翅鳥王を表はし船の頭においた。惡龍は之を見て驚き恐れて海底深く姿を晦ました。この鳥は龍を取つて食とすると稱せられてゐるのである。かくして船は恙なく還つて衆人は危を免れた。これ偏に尊者の慈恩であると喜んだ。

これも舍衞城の商人で、目連を師としてゐた人が多くの人々とゝもに治生（なりわひ）の爲めに地方を廻り、或時險しい山道にかゝりて、賊の脅す所となつた。人々は皆な奉仕する神々を念じて救ひを求めたが何の効驗もなかつた。此時彼の商人は一心に師目連を念じた。此時も目連は神通を以て國主の兵を現はして賊を追ひ拂つた。商人は一同目連の慈恩を感じた。

是等の記載は果して眞の事實を傳へてゐるかどうかは素より考ふべき餘地は充分あるけれども、とにかく多くの商人が彼を崇拜し、危急の場合に臨んで、殆ど無形の神佛を念ずる程に、

信仰の對象となり、力となつてゐたことが知られる。

（一）『根毘』第五。

（二）『誦律』第五八。

三　東園精舍の建立

(一)舍利弗が給孤獨長者に聘せられて祇園精舍を建立したやうに、目連は亦毗舍佉(Viśākha)夫人に聘せられて東寺を建立した。

夫人は鷲伽國(Aṅga)跋提耶城の長者檀陀闍耶の娘で幼より釋尊の感化を蒙つたのであるが長じて舍衞城の長者鹿子(Mṛgāra)の子滿增(Pūrṇa-Vardhana)に嫁いだ。然るに彼女の厚信は遂に一家をあげて外道の教を捨てゝ佛教に歸せしめた。殊に舅鹿子の如きは、毗舍佉の勸めによりて佛教に入つたのを喜んで、彼女を母のやうに思ふと云つた。之が爲に彼女は鹿子母の名を獲た。かくて彼女は終生教團の外護に力を盡した。(二)其一例を擧ぐれば、彼女は或時佛及び大衆を家に請ぜんとして、婢を遣して時刻の宜しきを申さしめた。この時恰も東の空より圓形の黑雲ムク〳〵と渦捲いて滿天を覆うた。釋尊、宣給ふやう、「今黑雲遽に起り來つたのを見るに、必ず大雨が至るに相違ない。各この雨に浴すれば垢を除き病を癒すであらう」と、かくて阿難の傳達によつて諸比丘は沛然として篠を亂すが如き大雨に沐浴した。熱い國であるのと、殊に教團には大勢のことであるから浴室の沐浴も思ふやうに行かぬ爲めに、比丘も、比丘尼も多く河に入つて沐浴した。之が爲めに夏期に於いて熱帶の大雨を見る時は瀑布に打れるやうに雨浴を試みるのである。恰ど諸比丘の雨浴最中に毘舍佉の使の婢は精舍に着いた。雨を冒して門內を見れば多くの比丘は裸體のまゝ雨の中に立つてゐる。無知の婢は之を見て驚き歸つて毘舍佉に告げた、祇園精舍には一人の僧も居らぬ。唯裸形外道のみである。されど毘舍佉は之を聞いて諸比丘が雨浴衣を持たぬことを思つた。彼女は再び使を遣りて大衆を家に請じて樣々な饗應をなし釋尊の說法の後、彼女は釋尊に向ひ奉つて八つの願ひを申し上げた。一、比丘に雨浴衣を施すこと、二、比丘尼に雨浴衣を施すこと、三、客比丘に食を施すこと、四、遠く旅立つ比丘に貯への食物を施すこと、五、病比丘に食を施すこと、六、看病の比丘に食を施すこと、七、病比丘に醫藥を施すこと、八、比丘に粥を施すこと。是等は皆な當時教團に於いて欠乏する所であつた。そして又無くてはならぬものであつた。遠來の比丘が長い旅路に勞れて漸く精

舍へ着き、夫から一里以上もある處に行乞することは非常な慘めであつた。殊に遠方へ赴く比丘にあつては人里離れた深山幽谷を通らねばならぬ。その際貯への食物のないことは非常な危險である。病比丘への施食、施藥、看病比丘への施食等の必要は申す迄もなく、比丘、比丘尼へ雨浴衣を與へることは教團の風儀と云ふ點から彼女が非常に必要のこと、考へた所であつた。比丘が雨浴するも、河水に浴するも、さまで見苦くはないけれども、老若の比丘尼が裸體になつて衆人の通る河水に浴することは非常に見苦しいものであつた。或は單に見苦しいばかりでなく、(三)この河水浴をなすとき淫奔女が來て、その肉體美を賞めて、若い比丘尼を煽動することがあつた。是等は教團の外護者たる彼女の見るに忍びざる處であつた。かやうに綿密に教團の欠陷を見るの明と、之を滿さんとする敬虔な心を釋尊は非常に御喜びになつて、その願ひを許し、更に彼女の爲めに一偈を御說きになつた。

(四)歡喜んで僧に布施して
慳み嫉みの心を去る。
其酬いは天上に表はれて
永く安穩の樂を得んと
心に福德を樂めば
この世の快樂は極りなく
後の世は天に生れて
遂に無漏なき證りを得ん。

かやうに熱心なる教團の外護者であるから、遂に女の手を以て大伽藍を建立するに至つたのである。(五)今その精舍建立の因緣を尋ぬるに、祇園精舍に二人の大比丘尼があつた。一は大世主(憍曇彌)というて常に禪定を修め、他は法與(法施)というて誦經を樂んだ。そして兩人に屬する諸比丘尼も各其師の如く二樣に分れてをつた。然るに坊舍の狹隘の爲めに兩方の比丘尼は一所にをることゝなつて、之が爲に彼等は道を修るに尠からぬ不便を感じた。卽ち大世主の比丘尼が禪定にある時は法與比丘尼の方は誦經を止め誦經を始める時は、禪定を止めなければならなかつた。二人の大比丘尼は、嚴しく比丘尼を督して互に侵さしむることはせなかつたが、どうしても別れて道を修むるよりも、半ばの効果しか收めることが出來なかつた。

當時毗舍佉は深く法與比丘尼の德を慕ひ、常に訪れて資生の具を施したが、或時法與比丘尼は上に述べたやうな修道の不便を語りて、別に一寺を建立せんことを請うた。彼女は快く諾うたが、適當の土地を有たないといふ。是に於いて法與比丘尼は勝髮夫人を訪れて懇に造寺のことを語り、計畫は既に成つたけれども、適當の地は皆な王の所有となつてゐるから、どうぞ我が爲めに造寺の地を賣り拂はんことを王に申して下さいと賴んだ。素より佛敎に熱心な夫人は非常にその美擧を喜んで早速に請ひて、自由に適宜の地を選定することを許した。

かやうにして造寺の因緣は熟した。[六]毗舍佉は非常な熱心を以て祇園精舍の東北一里許りの處に廣大な地を購ひ、地代九千萬金を投じ、更に九十萬金を以て大寺の建築を企てた。卽ち釋尊に請ひて大工事の監督として尊者目連を聘した。彼は諸方の木石を蒐めて二層の大精舍を建造し、一層各五百房に分たれたと稱せらるゝ。之を東園、東寺、又は鹿子母講堂、或は單に鹿堂とも稱せられた。功成るや盛んな法會が營まれ、毗舍佉は大衆を供養すること七日に及んだ。

鹿園精舍の建立は、非常に修道の便益を與へた爲めに、益敎團の勢を增した。時代の前後と、建立の難易はあつたにしても、舍利弗、給孤獨長者の祇園精舍と、目連、毗舍佉の東園精舍は、誠に敎團に於ける一對の美譚といはねばならぬ。

（一）『美釋』第六〇。『須佛』第一二六頁。
（二）『誦律』第一八。『根毘』第四九。『四律』第一〇。『五律』第五。
（三）『四律』第二六。
（四）『四律』第一〇。『五律』第五。
（五）『根毘』第二三。
（六）『美釋』第六〇。『法顯』。

四　蓮華色女

[一]蓮華色女（Uthalavarna）は得叉尸羅（Takshasila）城の長者の娘であつた。容顏は美はしく宛然靑蓮花の匂ふやうであつたから父母はこの名をつけた。彼女が妙齡に及んで聟を迎へた頃、父は疾の爲めに終つた。後彼女は女兒をあげたが、其母は閨の淋しさにえ堪へで、彼女の夫と通じた。彼女は之を知りて狂氣の如く家を出で、遂に富裕な波羅捺の商人の婦となつて彼地に伴はれた。かくて十數年を經て彼女の夫は商用の爲めに得叉尸羅に行き、彼地に滯在中、

客愁をやらんが爲めに數千金を投じて妻に似たる少女を購うて妾とした。この少女が蓮華色女の子であることは商人の夢にも知ざる處であつた。商人は美人を獲て喜んで家に歸つたが、流石に妻を憚りて少女を近所に隱し、購うた貨物の半を與へ、自分は何喰はぬ顏をして家に歸つたが、妻は貨物の少きに驚きて故を問ふと賊の爲め奪ひ去られたと出鱈目のことをいふ。そして彼れは賊を尋ねに行くというて出掛けた。暫くして夫の留守に、夫の友人が訪れたので、夫は賊を尋ねにまゐりましたと語ると、友は笑ひて、夫は美しい賊を尋ねにいつたのであらうと云うて、夫が妾を連れて來たことを告げて去つた。妻は主の歸るを待ちて自分を欺いたことを責め、更に其妾を家に入れんことを申し出でた。夫は妻の義俠を喜んで、少女を家に迎へたが、妻は自分の故鄕の生れなる由を聞いて子のやうに慈んだ。或時少女の髮を梳いて呉れながら兩親のことを問ふと、母は蓮華色といふ人であつたが自分の幼少の時、家を出でられたといふ。之を聞いた蓮華色女は、嘗つて母の爲めに夫を寢取られた時にも彌增した驚きを感じた。蟲の知せか何とはなしに一目見てより可愛ゆく感ぜられたことが不思議に思はれたことであるが、夫が我子とは誠に夢のやうな話である。之が通常の場合ならば、搔抱いて心ゆくばかり嬉し涙に暮れることであらうが、淺間しやその可愛い子が母の身から夫の愛を奪うた憎い女である。蓮華色女はこの强烈しい二股の思ひに狹まつて、死なん許りに苦んだ。果てはフラ〳〵と家を出でゝ諸方を彷徨ひ、遂に波羅捺より東七十餘里を隔てたる王舍城に赴いて遊女となつた。彼女の心は淺間しい運命の弄びの爲めに荒れ果た。先には母とゝもに一人の男を諍ひ、後には子とゝもに一人の夫に侍かねばならなかつた。もう世の中は何が何やら解らぬ。親子の愛情が幾度も夫婦の愛情と衝突して、正しい心の秩序は失はれた。かくて彼女は親を捨て夫を捨て、更に子を捨て、第二の夫をも捨てた。否な心ならずも捨てさせられたのであつた。この境遇に行きついた美しい女の營む生活は知れきつたことである。

王舍城に於ける浮れ男は、尙ほ彼女の殘んの色香を獵つた。推量るに彼女の年は未だ四十路を超えてはゐなかつたらしい。天性の仇姿はどこ迄も彼女を墮落の淵に導かずんばやまぬと云ふ有樣であつた。されど彼女は美貌とゝもに怜悧な女であつた。殊に育ちが立派であつた爲めに、何處ともなしに品性の勝れた處があつた。これあるが爲めに、二回ながら淺間しさを感じて、自ら身を引いたことである。今や浮れ男の弄びとなつてゐても、心の底には淋しい賴りな

い念が潜んでをつた。殊にこんな境遇にある女の常として、華かな歡樂の後に來る悲哀は、屢過ぎ去つた胸の痛みに觸れて、世を厭ひ身を咀ふの念は時々彼女の心を嚙んだ。彼女の道に入る機緣はこゝに熟したのであつた。

一日彼女は浮れ男に煽動かされて、尊者大目犍連を誘惑せんと企てた。この時尊者は城内の園を逍遙(きやうよう)うてをつた。彼女は尊者の後を追うて歩みより、樣々の嬌めかしい姿を盡して、尊者の心を誘はんと試みた。この時　目連は彼女の心の奥を見た。盛りを超えた女の身の心にもあらぬ脂粉を粧ふことの果敢なき心を見た。時は至れりと思うて彼は直ちに神通を以て身を空中に躍らせて彼女に語るやう、

「女よ、汝は厭ふべき身を有つてゐる。醜い骨は骨と連り、筋脈は蛇のやうに全身に蛇蜒(うねり)捲いて、赤血、黑血はその間を流れてをる。汝の皮は不淨(きたな)い涕(はなしる)、唾(つばき)、淚(なみだ)、糞尿を包み、九つの孔からは穢い氣と液が流れてゐる。汝若し一度身の不淨に氣が付いたならば、誇つた身體も夏の厠のやうに厭はしく思ふであらう。されど愚の汝は、愚痴に欺かれて盲目の如く厭ふことを知らず、常に汝の姿に迷うてをる。恰も老いたる象の深みに溺れるやうである。」

彼女は驚きの目をあげて尊者の御相好を仰いだ。その崇高い人格の光りは、鋭い聲とゝもに彼女の胸を衝いた。彼女は長い惡夢から醒めたやうに、身の淺間しさを感じて、渴仰の念に咽んだ。

「尊者よ、私は長い間穢(きたな)い身を飾つて人々を欺き自分をも欺きました。人々が若しも眞に私の體を知つたらば、屹度尊者のやうに、夏の厠と我身を避けたに相違ありませぬ。然るに我心は愚痴に覆はれて我身に執着いたしてをります。どうぞ我爲めに尊い御法を說いて下さい。生きて甲斐ない淺間しい身なれば敎へに從うて道を修めたいことであります。」

かくて目連の說法によつて、彼女は敎の眞諦に入ることが出來た。乃ち目連に導かれて釋尊を拜し、直ちに祇園精舍なる憍曇彌比丘尼の許へ行きて道を修め證りを開いた。釋尊之を讃めて、比丘尼中神通第一であると仰せられた。目連によつて道に入つた彼女は圖らずも師の持長を受續いだ。かくて彼女は比丘尼中の上首となり、敎團の模範的比丘尼となつて善く諸比丘尼を督し、傍ら在俗の人々を敎へ導いた。(二)釋尊が三十三天から御下りになつた時、彼女は神通を以て轉輪聖王の相を表はして、先導し奉りて諸人を驚かしたとも稱せられてゐる。其他美貌の

爲めに年少の波羅門に犯されやうとした時に、伴り承諾ひて、某處に行かんことを約して男の手を離し、其暇に糞を以て身體に塗つた。波羅門は大に怒つて彼女を撲ち、殆んど兩眼も抉出せられん許りの打撲を受け、漸く神通によつて身を免れた。かやうに身を守ること嚴しく行ひの高かつた爲めに衆人の歸依を受けたが、之(三)が爲めに後年、提婆達多が阿闍世王に斥けられて、空しく宮門より歸る時に、ゆくりなくも宮中より行乞して出づる彼女を見て、惡心急に起りこの尼が自分を惡しざまに王に申したに相違ないと、罵り怒つて蓮華色比丘尼を撲つた。彼女は苦痛を忍びながら「大德は、世尊の親戚にてゐらせられる。我何の恨みあつて大德を惡しざまに申さうぞ」と云へど、提婆の憤怒は益激しく、遂に大力の拳を堅めて彼女の頭を亂打した。彼女の頭は破れて命も危くなつたが、漸くにして祇園精舍に歸り、衆比丘尼を集めて最後の說法を試みた。

「姉妹よ、壽命ある者は必ず死に至る。世の一切法は皆な無常である。そして無我である。仁等勤め勵みて善法を修め、寂靜なる涅槃に入れ。我いま提婆達多によりて涅槃に入るであらう」かくして靜に涅槃に入つた。

(一)『根毗』等四九・『四律』第六。
(二)『增阿』第二八・『西傳』八一頁。
(三)『毗僧』第一〇・『西傳』一〇六頁。

第五章　目連と舍利弗

目連と舍利弗の關係については、舍利弗傳の上にも屢記載したけれども、未だ親しく兩人の關係を事蹟の上に求めたことはなかつた。

一。(一)或時舍利弗は婆奇瘦國鹿野園に於いて、諸比丘の爲めに內心の穢れを知る人と知らざる人、內心の穢れなきを知る人と知らざる人の四種人を說いた。夫等の一々に實例をあげて褒貶し、懇に修道の要を說いた。この時に目連もその中にをつたが、舍利弗の說く所に心絃の共鳴を感じた。彼は舍利弗の說法の終るを俟ちて、舍利弗に申した。

「尊者よ、我嘗つて王舍城に行乞して、車師某（車を造る人）の家に至り、その主人の話を聞いたことがある。或時主人が他の車師を訪れた。その時他の車師は恰ど車軸を修繕しやうとし

てをつた。訪れた車師は、あの毀れた處を斫り捨て、そして適當な新しい木を篏めたらよいであらうと思つてゐると、件の車師は其通りに毀れた箇所を切り捨てゝ立派に修繕した。默つて眺めてゐた彼は、心の歡喜びをおさへることが出來なかつた。この時二つの心は全く一つになつたのである。

尊者よ、今の我心は訪れて喜んだ車師の心である。尊者よ、諛諂、嫉妬、欺誑の心あつて、信心、正念、正智慧がないならば、其心狂ひ惑うて行ひは修らぬ。是等は修道によつて切り捨てねばならぬ。尊者よ、諛諂、嫉妬等なく、道を勵みて正念、正智、正定を獲れば、心狂はずして正しい行業をなすことが出來る。

誠に尊者舍利弗の說法を聞くことは、飢ゑたる者の食を獲る如く、渴いたる者の清水を掬ぶやうなものである。道を修めて、煩惱を拂ひ、正しい智慧を獲た人の尊者の說法を聞く味を云へばかの身を清めて、美服を纏ひ、樣々の寶玉の飾をつけた美しい少女に靑蓮華、薝蔔華等の美しい鬘を贈るやうなものであらう。彼女は贈る人の心と其贈物を喜んで、兩手に之を受け、そして其美しい髮を飾るのである。尊者よ、其少女の喜びは今の我喜びある。」

二人は尙ほ互に讚め合つて其座を立ち、諸比丘は二大弟子の敎へを歡び、更に隔てなき二人の法の交りを讚め稱へた。

二。(二)釋尊が祇園精舍に在はせし時、目連は舍利弗とゝもに、王舍城の竹林精舍の一室にあつた。或夜のこと、後夜に及んで舍利弗は傍の目連に語るやう「今宵尊者は正しき寂滅定に入つてゐられる。我初めより尊者の息を聞かない」。「否、尊者よ、今宵は寂滅定に入つてはをらぬ。我精神は働いてをる。我今夜祇園精舍に在す釋尊と御話し申した。」之を聞いて舍利弗は「祇園精舍はこゝより百數十里を隔てゝゐる。尊者、神通を以て此處へ行つたのか、又世尊神通を以つて此處に來られしや」「否、尊者よ、我も世尊も神通によらず、只天眼天耳を以て、坐ながらにして、御話し申したことである。我世尊に「慇懃なる精進」といふことを問ひ奉ると、世尊は、目連よ、晝は經行し、若くば坐りて障礙りなく敎へを念じ、自ら其心を淨め、初夜も晝の如くし、中夜には房を出でゝ足を洗ひ、還つて右脇に臥し、足を累ねて念を明かにし、正念にして思を凝らし、後夜にまた徐に起つて晝の如く經行し坐禪して自ら心を淨める。目連よ、之を「慇懃なる精進」と名けると仰せられた。」と申すと舍利弗は之を聞いて大に目連を讚へた。

「尊者はまことに大なる神通と、大いなる功德を具へてゐる。そして吾も亦尊者と等しい力をもつ。之を譬ふれば、高山に向つて小石を投げるやうなものである。投げられた石は、高山と等しい色となる。吾等が法の中にあつて、等しい力をもつのもこのやうなものであらう。道を修むる凡ての人々は尊者を恭敬はねばならぬ。供養せねばならぬ。かくする人々は大いなる善利を受ける。或は單に尊者と往來する人、交はる人々も善利を獲るであらう」。

目連も又同樣に舍利弗を讃め稱へた。

三。二人は又神通を較べたことがあると傳へられる。釋尊或時阿耨達池に在らせられた。[三] 池は香山の南。大雪山の北にあつて、周り百餘里、金銀又は寶玉を以て其岸を鏤めてゐる。底は金沙輝きて、清波渺漂、宛然鏡のやうであると稱せられる。[四] この風光明眉なる處に、多くの弟子も隨ひ奉つた。只舍利弗のみ祇園精舍にあつて衣を補うてゐる。釋尊は目連をして之を呼ばしめた。彼は命を承けて得意の神通を以て直に祇園精舍に赴きて舍利弗に逢ひ、阿耨達池に來るやうと申した。この時兩人は子供の戲れるやうに樣々に神通を較べたが、舍利弗は常に目連を凌いだ。かくて目連は力盡きて湖畔の釋尊の御許に還ると既に舍利弗は我より先に釋尊の御前に坐つてゐる。目連は再び舍利弗の神通に驚いた。

是等の傳說を委しく記すことは極めて煩はしい。何かの事實を可笑しい程幼稚な文學的脚色を施した痕は歷然と見える。この種の傳說が如何程の歷史的價値をもつてゐるかは疑問であるが、兎もかくも、或方面に於いて舍利弗の悟道が目連の夫に勝つてをつたといふことを記したことは慥かである。卽ち舍利弗の天才的の頭の動き方と、目連の堅實なやり口の相違を見て、目連を貶して舍利弗をあげたものであらう。この關係は、其時の神通較べの後、釋尊の御話として傳へられてゐる兩人の本生譚によつて興味多く知られることである。

古、[五] 中印度に巧な畫師があつた。彼或時他國に行きて彫刻師の家に宿つた。その時主人は木を以て美人像を造り、粧ひを凝らして客の閨に侍らした。客の畫師は長き旅寢のつれ〴〵に、心うつとゝして思はず手を捉れば、美人の體は崩れ散りて手足もばら〴〵になつた。畫師は驚いて身を退いたが、自ら深く欺かれたこと、辱められたことを感じて、己も技術を以て主人に一泡ふかせんと思ひを凝らし、夜の明くる迄に、客室の壁に絞れて死んでゐる自分の姿を描いた。室の光線の具合で其畫は實のやうに見えた。翌朝、日高く昇つても、客は起きない。主人

は昨夜のことも氣がゝりであつたから、客室の戸を開けて見ると、客は壁に添うて絞れてゐる。その傍には自分の作つた美人像は手足所を異にして仆れてゐる。あゝさては、眞に入つた自分の技術に欺かれて、屈辱を感じ、遂にこのやうに自殺を企てたことであるかと、一方には自らの技藝に誇りつゝも、今更の如く客人の死を悲みて、早速官に訴へて檢死を請うた。係りの人來つて、主人とゝもに能く檢べて見れば、壁に描いた死人であつた。主人も役人も深く畫の技術に感じ入つた。畫師は舍利弗、彫刻師は目連である。

又昔二人の畫師があつて王命に從ひ、宮殿の壁畫を描いた。兩人は互に自らの技術を誇つて、其技を比べんとするのであつた。半年を經て一人の畫師は其畫を仕上げた。然るに他の畫師は自分の描くべき反對の壁面を磨いてゐる。壁は日毎に光りを增すばかりで、一線も描かれることはなかつた。されど兩人ともに壁畫は完成つたといふ。王を初め多くの群臣がそこへ行つて見ると、一方の壁畫は鮮に描かれてゐるが、他の一方の壁畫は薄衣を隔てたやうに漂渺として更に一段を添へてゐる。よく〳〵檢すれば一方の畫が磨かれた壁面に映つたものであつた。眞實に描いたのは目連で、他は舍利弗である。

又昔中印度に象牙細工に巧な人がをつた。この人、象牙を刻んで一斗の象牙米を獲、波羅㮈に行きて、某畫師の家を訪れた。その時主人は所要の爲めにをらなかつたから、其妻に先の象牙を與へて夕餐の料にといふ。妻女は云ふがまゝに之を炊いたが、水が乾いても飯は煮えない。その中に主人も歸つて、妻の話を聞き、怪しく思うて檢べてみると象牙である。欺かれたと思うて　彼は近所の林の中に大な池を畫き、其主に狗の死體を描き添へた。そして妻に命令けて、何かの口實の下に先の彫刻師をして清水を汲ましめた。彼は何心なく瓶を持つて教へられた池に赴いた。黄昏時であつたらしい。彼は水中の死狗を見て、片手で鼻を押へながら瓶を下せば、畫いた泉の底にある石に當つて瓶は微塵に碎けた。彫刻師は目連で畫師は舍利弗である。

以上の物語りの何れにしても、目連は舍利弗に一籌を讓ることゝなつてゐる。殊に第二の說話に於ける壁面を磨いて、他の繪畫を映すといふやうなことは、舍利弗の敏捷なる天才的な頭の動き方をよく表はしてゐると思ふ。されど之に對する目連の堅實な、努力的な實行的の特長も充分認められることである。

之を要するにこの二大弟子の關係は、優劣の比較を主とせずして、只兩者の特長を知ること

が必要であると思ふ。卽ち上に擧げた（一）、（二）の事蹟によつて充分會得むことが出來る。（三）の優劣の如きは、兩者の或方面を示したもので、兩者の根本的の優劣を釋尊が決定られたと見るべきではないと思ふ。

（一）『中阿』第二二。
（二）『雜阿』第一八。
（三）『西域』第一。
（四）『增阿』第二九・『毘藥』第一六。
（五）『毘藥』第一六。

第六章　目連と釋尊

この題目についても、上來屢縷述した所であるが、尙ほ二三の事蹟を擧げて一層この關係を明かにしやうと思ふ。

一。釋尊、或時五百の大衆とゝもに、迦毘羅城閻婆梨園に在せし時、舍利弗、目連の兩人は五百の大衆を率ゐて諸方を遊行し、漸くこの處に來つたが、在住の比丘と遊行の比丘とが、珍しさの餘り佚みに語り合ふ聲は、囂々として林に響き、さながら荒波の間に喚く獵師共のやうであつた。釋尊は直に阿難を御召しになつて、喧燥の理由を御聞きになり、彼をして舍利弗目連に云はしむるやう「汝等暫時も此處に居つてはならぬ。」兩人は仰せを畏みて、五百の大衆を督して園を出で道に添うて歩んだ。

釋種の人々は之を見て大に驚き憂へた。「五百の大衆は一年の遊行を了へて、漸く世尊の溫容に接することが出來るのである。その上大衆の中には新に出家した人々も加つてゐる。幼い犢子の母牛を失ふたやうに、今や世尊の尊容に接し奉らなかつた爲めに新來の比丘が心變りをせぬであらうか。」かやうに思うて彼等は直に釋尊の御許に詣でゝこの理由を申して、舍利弗、目連をはじめ諸比丘を御呼び下さることを請うた。釋尊もこの言を納れて更に阿難をして彼等大衆を呼ばしめ給うた。

兩人は釋尊の御呼びを喜んで、比丘に申すやう、「汝等衣鉢を攝めて、今より世尊の御許に詣でよ。世尊いま、慈悲を垂れて吾等の懺悔を御受け下さる。」かくて諸共に世尊の御許にまゐ

る。

釋尊は先づ舍利弗に仰せらるゝやう「我先に汝を初め諸比丘を去らした時、汝はどのやうな考へを起したか」舍利弗は「世尊よ、我その時思ひますやうは、世尊は常に鬧を嫌ひ閑靜なる處を御好みになり、獨り安かにしてゐらせられる。この故に喧燥しくする諸比丘を去らしめ給ふ」釋尊は「其次には如何に思ひしや。」舍利弗「是故に我も亦靜なる處にあつて鬧を避けやう」この時釋尊は「舍利弗よ、左樣な心を起してはならぬ。我もし閑靜な處にあつた時には、大衆を督し導く事業は、汝等兩人を俟たねばならぬではないか。」と仰せられた。

釋尊は更に目連に御尋ねになると、「世尊は獨り無爲寂靜なる處に居らんと御思召して、吾等を去らしめ給ふことゝ思ひます、と答ふ。「其次にはいかゞ」と宣給へば「我其次に思ふやうは、如來いま諸比丘の喧燥を叱して、吾等を去らしめ給ふ上は、吾等力を盡して大衆を離散せぬやうに至さねばならぬ。」之を聞いて釋尊は非常に御喜びになつた。

「目連よ、汝の云ふ處は實に善美を盡してゐる。大衆の標首となるべき者は、我と汝の二人である。目連よ今より後汝は諸の後學の比丘を導き敎へて、永く安穩の處を獲、生死の苦みを離れしめよ。」

かく御讃めになつて、釋尊は諸比丘に對して、修道の要義を九項に頒ちて懇に御說きになつた。六十餘人の比丘は此の時證りを開いたと稱せられた。この一事によつてみても、如何に釋尊が法の爲めには、少しも假借する所がなかつたことが解るとゝもに、舍利弗、目連の兩人の頭の働き方が見られると思ふ。舍利弗は諸比丘の過失を上首たる自分の責任であると感じて、自分も釋尊のやうに靜に法を樂うと思ふた。然るに目連は御叱りを受けると同時に、大衆を離散しないやうにと思うた。こゝが目連の特長であつて、釋尊から常に「母のやうに養育する人」と讃められる處である。

二。(二)釋尊或時大衆とゝもに蘇羅婆國に遊行し、ゆいて毗蘭若に至り、とある林に止り給うた。その時この地の某婆羅門、釋尊の盛名をきゝて御許に詣で、種々の敎化に接して、歸依の念を起し、遂に三箇月の夏安居を此地にいたされんことを請ひ、自ら其供養を申し出た。釋尊は其請ひを許してこの地に止りて安居せられたが時に米價高くして人民飢餓に苦み、中には飢死するもの多く、死骸道に横はると云ふ慘ましい光景となつた。この時先の婆羅門は遽に欲に眼眩

みしと見え、三ヶ月の間、少しも供養することはなかつた。諸比丘は約束の供養を失ひしことゝて、已むなく四邊に行乞したけれども、上の如き有樣であるから空しき鉢を懷いて歸るといふ有樣であつた。時に波離國の馬商人で、五百疋の馬を驅りてこの地にをつたが、衆比丘の困難を見るに忍びず、日々諸比丘に五斤、世尊へは一斗の馬麥を供養した。世尊は之を諸比丘に頒ちて、漸く日毎の口を濡した。

この時、目連は釋尊の御許に詣でゝ申すやう「世尊よ、今米價高く、人々飢に苦しんで死ぬる者も少くはない爲めに、とてもこの地には行乞することは出來ませぬ。諸比丘は毎日のやうに麤惡い食物をとつてゐますから、瘦衰へて見る影もない有樣である。是故に世尊もし御許し下さるならば、私は諸の神通のある諸比丘を連れて、鬱單越國へ行きたいと思ひます。そこには自然の米が澤山あつて、食を獲るの困難はありませぬ。」釋尊は之を聞きて「神通をもたぬ比丘はどうする。」目連「神通をもたぬ者は、私が連れまゐります。」釋尊「目連よ、左樣な企ては已めるがよい。汝等のやうな神通ある者や、又夫等の人々に緣ある人々はよいけれども、未來の人々をどうする。」と目連の企てを御止めになつた、如何なる力も業報の力を遏めることは出來ない。之は先にあげた迦毘羅城滅亡の際に、目連が大いなる業報の力を遏めんとして釋尊の止むる處となつたと同一軌に出でゝゐる。釋尊が涅槃に近かれた時に、毗舍離から拘尸那竭に赴かれ、其處に最後の神力を出して大石を空中にあげ、更に各種の力を說き、前に上げた目連の請ひを述べられ、「目連の神力は偉大であるが。如來の神力は實に偉大である。舍利弗の智慧は廣大である。が如來の智慧は更に廣大である。されど是等の力にも遙かに勝れるものは無常力である。」と仰せられた。釋尊の敎へは周圍の改造が主でなくて、各人の內心の改造が主であつた。周圍は只だ此の內心の改造の爲めの材料に過ぎぬ。故に場合によりては周圍の困難といふことも畢竟內心の改造の好き材料となることもある。されば神通といふことも、敎化の已むを得ない時を除くの外は之れを禁ぜられた。吸りに神通を示せば徒に人々の好奇心を滿すに過ぎないことゝなり、從つて諸比丘も亦其神通といふ活動が、深い修道の智慧から來ることを知らずして、只結果たる神通のみを獵んと焦せるやうになる。更に修道の功成りて、神通を獲た比丘でも、知らず〳〵目前の利益や、骨肉の關係なぞの爲めに、神通を濫用せんとする傾きがある。前に上げた目連の企ての如きは慥にさうである。是等は既に修道の要義を離れて徒に周圍

を改造せんとする錯誤に陷つてゐるのである。

三。(一)舍利弗が甞つて釋尊の教呵を受けたやうに、目連も亦教呵を受けたことがある。

釋尊、王舍城竹林精舍に在せし時、目連は王舍城の年少い十七人の樂人を弟子として具足戒を授けた。是等は腕白盛りの年であるから、嚴しい教團の規則は堪へ難い苦みであつた。殊に食事は分量に制限があつて飽食は嚴禁されてあるから、食欲の昂進する時代の彼等は晡時頃には堪へることが出來なかつた。かくて彼等は僧坊の中に於いて、子供の啼眞似をやつた。釋尊は之が爲めに衆比丘を御集めになり目連に御問ひになると、彼は實の如く申す。この時釋尊は種々に目連を御叱りになり。

「年二十歳に滿たない者には具足戒を授けてはならぬ。具足戒を受け道を修めるには、寒熱、飢渴に堪へ、蚊虻、毒虫、毒蛇の難を忍び、他人の惡語、病氣等の身體の苦痛も忍ばねばならぬ。然るに二十歳に滿たぬ年少の者はこの苦みに堪へることは出來ぬ。汝は是等の理を心得ずして吸りに年少の人々に具足戒を授けた。」

と仰せられ更に諸比丘に向ひて「汝等今より後二十歳に滿たざる者に具足戒を授けてはならぬ。若し犯すものは波逸提の罪である」と仰せられた。

(一)『增阿』第四一・『遊衢』。

(二)『四律』第一・『增阿』第三六。

(三)『誦律』第二一。

第七章　目連と天上界

この章を述ぶるに當り、簡略に佛典に表はれたる古代印度の宇宙觀を紹介する必要があると思ふ。この概念によつて、佛典を繙くと、今迄漠然としてをつたことがさぞと了解せらるゝ節が多いのである。

(一)大虛空に依りて最下に風輪がある。廣さ無限にして十六億由旬、その質の堅固なることは金剛の固さも及ばぬ。その上に水輪がある、その厚さ十一億二萬由旬であるが、その上が乳の凝るやうに膜となつて金となつた。その厚さ三億二萬由旬、故に水の厚さは減じて八億由旬となる。この金輪の上に須彌山を眞中にして輪山が周り、山と山との間には海がある。之を九山八

海と稱しその外側の山を鐵圍山といふ。

須彌山は四寶から成立てゐる。北は黃金、東は銀、南は碧琉璃、西は紅玉、そしてこの四方に各一洲づゝ海に突出でゝゐる。吾等の住んでゐる處はその南で南贍部州又は南閻浮提（Jambu-dvipa）といふ。大空の碧りなるのは、須彌山の碧琉璃の映射するによるといふ。北は北俱盧洲又は北鬱單越（Uttarakuru）、東は東勝神州又は東弗婆提（Pūrvāvileha）西は西牛貨州又は西瞿耶尼（Aparagodāna or Godhanya）、之を須彌四州といふ。四州相互の關係は恰も今日の各星辰の間のやうに廣遠である。須彌山の海に入りて金輪に達する間は八萬由旬、海面より頂まで八萬由旬、一由旬は凡我七里に當る故に、その海底（金輪）よりの高さは十六萬由旬卽ち百十二里である。

須彌山の半腹までは四層に頒たれて四つの世界を成してゐる。是等の層は瘤のやうに山から大空に突出でゝ四方を周る。第一の層は海面より隔ること一萬由旬（七萬里）、第一と第二、乃至第四に至る相互の隔りは等しく一萬由旬である。下三層の世界には四王天所屬の天人住み、第四層には四天王が住んでゐる、その上にある三十三天（忉利天）は須彌山の頂にあり、その上に夜摩天、兜率天（都史多天）、化樂天（樂變化天）、他化自在天の四天がある。之を欲界六欲天といふ。その莊嚴なる宮殿、山川草木の美しき自然、盡きざる歡樂の有樣は經典の各所に豐麗に描かれてゐる。更に其上に色界十八天、無色界四天がある。是等を總稱して天上界といふのである。そして四天王（持國—東、增長—南、廣目—西、多聞—北）は四王天（四層天）に住み、帝釋は三十三天を司り、梵王は色界の初禪天を統べてゐる。この三天王は釋梵四王の名にて、屢釋尊を初め教團の諸比丘と交渉してゐる重要の天部である、そして南贍浮州の下二萬由旬（十四萬里）にして無間地獄がある。その上に相累りて七大地獄がある。以上佛教當時の印度の宇宙觀の大要である。

一。釋尊、竹林精舍に在せし時、目連は耆闍崛山にあつた。或夜帝釋天王は妙堂觀から下つて目連の許に詣で、稽首きて足を禮し退いて一方に坐した。その天身から放つ處の光りは普く耆闍崛山を照して、綠りの木立は時ならぬ光彩を添へた。この時帝釋は自作の偈を誦した。

慳む心の垢を去り
時に應じて施すは

布施の賢者ぞ。
さらばこん世に
幸ぞあらなむ。

目連、帝釋にいふ、「布施したる人の來世の幸とは何。」帝釋申すやう、「尊者よ、私はいま自分の幸ひを喜んでゐる。日月の照す處、須彌四州にも、四王天、夜摩天、等の諸天にも、乃至これ等の世界の百千を集めても、我三十三天の毗闍延の堂觀のやうな壯麗なものはない。堂觀の數は一百一にして、一々の堂觀は七重に聳え、一重毎に七つの房あり、房には天女七人、侍女七人、姿も匂ふ春の粧ひに、輝くばかりの妖艶を添へてをる。尊者よ、この幸福は昔吾れ慳みを棄て、布施をなした妙果である。」

かく自らの喜びを述べ、尊者を禮して姿を沒した。

二。(四)或時、目連耆闍崛山に於いて、禪定に入り、靜に思ふやう「嘗つて帝釋が釋尊の御許に詣でゝ、愛欲の念を解脫することを問うたことがある。其時世尊は、帝釋よ、一切の法は空である、此身は無常である。この理を觀ずれば、欲の想なく、無常の恐れもなくなる。卽ち生死の苦み盡きて、安隱な涅槃に至ることが出來る、と仰せられた。あの御教へを聞いた帝釋は、今尙ほ覺えてゐるであらうか、但しは教のやうに實行してゐるであらうか。」かくて目連は王舍城の耆闍崛山(Gṛdhrakūṭa)から直ちに三十三天に上つた。屈げたる臂を伸ばさない中に、彼は五十六萬里彼方なる須彌山の頂に著き、直ちに帝釋の居城に至つた。その時彼は、蓮池の傍に天女と戯れてをつた。美しい聲で天の歌をうたふ者もあれば、調子に合はせて舞ふ者もあつた。されど彼は尊者目連の近くを見て、流石に恥ぢを覺えて天女の歌舞を止めた。天女は默然つて崇い目連の姿を眺めた。目連は帝釋に近くや直ちに世尊から聞いた愛欲解脫の教を聞きたいと云ふ。彼は尊者を禮しながら申すやう「我天界は樂みが多くて、先の事は多く忘れてゐます。之が爲めにあの時の御教へも今は少しも覺えてはをりませぬ。尊者もし御聞き申したいならば、竹精舍に在します世尊に御問ひ下さい。

只、此處には立派な堂觀がある。この程出來上つたものであれば、どうぞ御覽下さい。」

といつて尊者を誘ふ。尊者は默然として導かるゝまゝに堂觀に入つた。美しく粧うた多くの天女は綾羅の衣、七寶の瓔珞を翻して、歌舞に餘念がなかつたが、遙に來る淸素に崇高い目連

を見て、恥愧しく感じて姿を隱した。帝釋は只堂觀の美を讃へて滿足してゐた。是時目連は帝釋の心を慨れに思うた。彼は目前の快樂に心眩みて、あだなる天上の榮に心身を沒してゐる。我少しく彼の迷を醒してやらうと、直ちに禪定に入つて神通を現はし、一の足指をあげて堂觀に着くれば、さしも莊大なる天宮は大地震のやうに震ひ動いた。多くの天女は驚き怖れて、逃げまどひ、帝釋も身の毛竪ちて慄へ戰いた。この時目連は、再び世尊から聞いた愛欲解脫の要義を說いて呉れと云へば、帝釋は夢の醒めたやうに、「一切空寂を觀じ、身の無常を觀ずれば、恐れなき涅槃に至ることをうる」といふ。目連は夫に依りて、目前の快樂の空なることと、涅槃の眞樂なることを說いて、直に耆闍崛山へ歸つた。

この傳說の眞僞はともあれ、權力を恃み、富貴を力にしてゐる人々が、欲樂に耽溺して、清い聖賢の天地に入ることが出來ないでゐる有樣がよく描かれてある。そして夫等の人々の目の醒めるのはどうしても、盛んな快樂が、病氣、天災、不幸等の爲めに根抵から破壞されなければならぬといふ消息がよく示されてある。この意味に於いて、美しい肉欲世界、限りなき歡樂境の天上界と、淸素な、寡欲な、肉欲を斥けた精神一枚の生活を主とする釋尊の敎團とは、極端な對比を示し、そしてその色彩を非常に鮮かならしむることと思はれる。

三。(五) 成道第七年頃、釋尊は母后摩耶夫人に法を說かんが爲めに三十三天に上り給ひ、波梨耶多羅樹、拘毗陀羅香樹の美しき林にありて、柔輭き白石の上に坐して安居を送られた。先に天女となりし母后は釋尊の右に坐し、二人の天人は母后の左右に侍き、集る天人は十八由旬の廣きを埋めたと稱せられた。

下界には目連祇園精舍にありて、釋尊に代りて大衆を統理し、この地に安居を送つたが、諸比丘を始め優塡王、波斯匿王等の國王、並に歸依の人々は、釋尊を慕ひ奉つて、目連の許に詣で、佛の在處を問ふと、彼は釋尊の昇天を告げて三月の安居の終るまで待てというた。

人々は目連の敎に接して安堵の胸をなで下したが、安居の終るを待ちて、再び目連の許に行きて、一日も早く世尊の溫容に接したき旨を熱心に訴へた。この時目連は大衆の心を察して、直ちに三十三天に上り、釋尊の在す林より遠からぬ處に現はれると、雲のやうな天人は釋尊を中に繞つて、說法を聞いてゐる。目連はこの盛んなる法會を見て躍り上るばかりに喜んだ。「あゝ天上にもかやうな法會が開かれたか」と。釋尊は彼の心を御察しになつて、「目連よ、我天人

の爲めに法を說かうと思へば、彼等は直に集る。又彼等を去らしめやうとすれば、彼等は自と去る。彼等天人は我心に隨つて來り、我心に隨つて去るのである。」この時、多くの天人は代る〳〵釋尊の御前に出でゝ自督を述べた。かくして天人の去つた後、目連は衣を整へて釋尊を敬禮し奉り、「世尊よ、いま下界の人々、久しく世尊の溫容を仰がない爲めに、一刻も早く世尊を見奉らんことを願うてゐます。どうぞ大衆を憐んで閻浮提に御降り下さい。」釋尊は懇に之を御受けになつて、「目連よ、我七日の後、天より降つて、僧伽舍城外の優曇鉢樹に至るであらう」と仰せられた。彼はこの御語を聞き、喜んで下界に降つて、集れる人々にこの旨を傳へた。人々は之を聞いて、歡呼の聲をあげて目連に感謝した。七日の後釋尊は其處に御下りになつた。時は十月十五日であつた。

（一）『倶舍』第一一・『長阿』第一八—第二二。
（二）『正念』第二二・『長阿』第二〇。
（三）『雜阿』第一九。
（四）『雜阿』第一九・『增阿』第一〇。
（五）『雜阿』第一九・『增阿』第二九・『僧刹』下・『緬傳』第一ノ二一九頁・『哩佛』第三。

第八章　目連と餓鬼

一。(一)釋尊王舍城の竹林精舍にいらせられた時、目連は勒叉那比丘とゝもに耆闍崛山にあつて道を修めた。或日兩人は山を出で城下に行乞した。某處に行くと目連は心に思ふ所あるらしく微笑を洩した。道に至つた聖者は、如何に鬧がしい巷の中にあつても、心を動かすとはない。心動かねば容貌に現るゝこともない。彼等は端肅い容貌、嚴な威儀を守つて歩いてゆく。されば聖者の微笑は何か特別な意味がなければならぬ。勒叉那比丘は彼の微笑を見て其故を問うた。けれども目連は「こゝは途上である。問ふべき時でもない。又答へる時でもない。」と云うて行乞を了へ、釋尊の御許に詣でゝ、勒比丘に微笑の理由を語つた。

「勒丘丘よ、あの時我途に一人の有情を見た。身の大さは樓閣のやう、苦み悶き、啼き叫んで空中を飛んでゆく。我之を見て思ふやうは、自ら作せる罪の酬いによつてこの苦しい身を受けてゐる。愍な者であると。この故に思はず微笑を洩したことである。」

釋尊は之を聞いて、諸の比丘に告げ給ふやう

「我弟子の中、眞實の眼、眞實の智慧を具へて、眞實の義、眞實の法の眞相を決定めて、惑はないものはこの有情を見る。我も嘗つて之を見たけれども汝等の不信を恐れて說かなかつた。彼の有情は昔牛を屠つた報いによつて長く地獄の苦みを受け、今地獄の業は盡きたけれども、尙ほ餘罪あつてこの苦みを受けてゐる。目連の見た所は決して謬りはない。」と仰せられた。

二。更に上と等しい事情の下に目連の見た有情は一層無慘しいものであつた。只見る人間の形をした大きな肉團、皮を剝れて生血の滴る赤い肉が、空中を飛んでゆくと、烏、鵄、鵰鷲が競ひ翔けりて、之を握み喰ふ。苦しさの餘り狂ひ叫んで地を走れば、野干、餓狗は先を爭うて猛り嚙み、肋を刳り內臟を握み出す。かくて其有情は大地を蜿蜒り叫ぶ。

三。他の或者は、滿身針のやうな毛を生してゐるが、毛といふ毛は眞赤に熱して五體を燒き、痛みは骨髓に徹る。

四。他の者は、頂に熱火燃え上る鐵磨を載せて虛空を走り、行く〳〵鐵磨はグル〳〵と廻旋して火勢猛烈となり、悲痛の呻吟を絞りてゆく。

五。更に旋風の如く身を回轉して、昏迷しながら空中を馳せゆく者、頭に煮え沸る大銅鑊を載せ、空中を馳せゆく間に銅流滿身を爛らせて啼き叫ぶ者、又は長い廣い舌を燃え上る利斧に斫らるゝ者、兩脇に一双の熱鐵輪廻轉して身を燒き空中を飛行させらるゝ者、又は熱鐵の衣を着け、熱鐵の鉢に熱鐵丸を盛りて食はさるゝ者等であつた。

是等の罪目は、屠羊、調象、卜占、惡語、布施を貪り、供養物を盜みて自腹を肥すといふやうなものである。

經典には是等の有情を餓鬼とは云はず、又普通に云はれてゐる餓鬼とは其苦み方を異にしてゐるやうであるが、今假りに餓鬼の名を標目に揭げたことである。是等の奇異なる有情は六趣の何れかに攝めたら餓鬼といふより外はないと思はれるからである。

凡人の日常生活は、心に怨みを懷き、嗔りを含み、貪り嫉むといふ有樣であるから、其殊に烈しくなつた場合の精神生活をあの崇高い聖者が見たら、上に記載した有情のやうな慘めなものかも知れぬ。目連尊者のやうな洞察す力の鋭い人にあつては、汚い欲望の溷の中、烈しい競爭の握み合ひの中にゐる我々を箇樣に見られたかも知れぬ。かやうに味へば上のやうな惡毒な

苦みもしみ〴〵と味はれることである。但しかうした見方をするのは狹い凡夫の計ひであつて、矢張り文字通りに信ずることが眞實に觸れるのかも知れない。今は經典のその儘を記して讀者の色味に任せることである。

（一）『雜阿』第一九。

第九章　目連の母

道を獲る者の多くは、其喜びの最初に於いて先づ父母養育の恩を思ふを常とする。我目連尊者は元より孝順の人であつた。[一]彼は祇園精舍に在つて初めて神通自在の境に入ると、第一に父母を濟度して養育の恩に酬いやうと念うた。かくて道眼を以て諸方を觀察すると、其母は死して餓鬼道の中に生れてをる。肉落ちて骨瘦せ、青白い皮は漸く五體の骨を包んでゐる。悲みに堪へで目連は鉢の中に飯を盛り、直ちに馳せて母の許に行き、之を供へた。母は嬉しさの餘り、左手に鉢を持ち、右手に飯を摶めて口中に入れんとするに、忽然として火灰となつた。母は泣き叫んで鉢を投げ、目連も驚き悲んで直ちに釋尊の御許に詣で、ことの由を申して愍みを請うた。

この時、釋尊目連に宣給ふやう「汝の母罪深くして、到底汝一人の力にては救ふことは出來ない。汝が母を思ふの情溢れて聲天地を動しても、奈何ともすることは出來ない。今は只十方の衆僧の威神力を藉りるの外はない。七月十五日は道を修める者の懺悔表白の聖日である。この日に麨飯、五菓、汲灌盥器、香油錠燭、臥具を具へ、更に世の甘味を盡して盆に盛り、十方の衆僧に供養すれば、彼等は皆な一心にこの供養を受けるであらう。かく清淨の戒を保つてゐる聖衆の德は大洋（おほうみ）の限りないやうなものである。この懺悔の僧に供養する功德は廣大であつて、七世の父母の三塗の苦みを脫するであらう。」

供養は世尊の宣給ふ如く、孝順なる目連の手によつて行はれた。釋尊は先づ十方の衆僧をして供養を受ける前に、目連の七世の父母の爲めに禪定を修むる意をなさしめ給うた。かやうにして大衆は歡喜し、目連の悲しき涙は拭はれた。彼の母は一刼の餓鬼の苦患を免ることを得た。

この時、目連は釋尊に申すやう「世尊よ、我母今三寶の功德の力、衆僧の威神力により三塗

の苦みを脱れることを得ました。未來世の一切の佛弟子と孝順の心ある者は、私のなせる如くにして、七世の父母を救ふことが出來るでありませうか。」釋尊仰せらるゝやう「目連よ、後の一切の人々、若し孝順の心ある者は、念々に父母を憶ひ、七月十五日は佛の歡喜ぶ日、僧懺悔の日なれば、年毎に百味の飲食を供へて、現在の父母、及び七世の父母の養育の恩、慈愛の恩を報ずる爲めに、十方の衆僧に供養せよ。さらば汝の母の如く、彼等の父母も一切の苦惱を脱れるであらう。」

母に對する尊者が孝順の情は、この一場の出來事によつて、遺憾なく表はれてゐる。そして尊者一人の胸の中に點ぜられた報恩の燭は、無數の白玉に映るやうに、爾後幾億人の胸に點ぜられて、七月十五日は父母報恩の盂蘭盆會が一般に行はるゝやうになつた。盂蘭盆又は烏藍婆拏（Ullambana）、倒懸の意、卽ち亡者の惡趣に落ちて倒に懸るの苦みを受けてゐる者の爲めに三寶を供養して其苦しみを脱れしむるの意味である。目連尊者の清高、超脱の全生涯の中に於いて、この母を想ふの至情の爲めに、身の聖者たることを忘るゝ迄に悲泣せられた人情の美はしさと溫さは、誠に滿目蒼中の一點の紅るとも云ふべきであらう。今迄高く仰いだ尊者は、この章に來りて親しく私共と手を取つて、母を想ふの親しさを感じ合ふやうに思はれる。元より是等史實の眞僞に關しては、容易に斷定し難きことであるが、夫等の如何に係らずこの美はしい物語りは、我等の理智の範圍を超えて、深く實感の闘の中に迫つてゐる。今となつては、この物語りは、尊者の歴史的事實の中に、最も我々と交渉深い部分となり了つた。彼は限りなき人々に先立ちて、父母報恩の至情を盡した。この至情を色味することによつて、我等は遠き尊者と近く對面することが出來るであらう。

（一）『盂蘭』『報恩』。

第十章　目連の殉教

哲人は常に道の爲めに自己の一切を犧牲にしても省みる處はない。かくして我目犍連尊者も亦その教に殉ぜざるを得なかつた。

釋尊の晩年には提婆も既に仆れ、彼の徒衆も散じて、王舍城の主阿闍世王は、先非を悔いて釋尊外護の大善知識となり世は全く新興佛教の風靡する處となつた。[一]從つて王舍城の裸形外道

は益勢を減ずるやうになり、彼等の教團を嫉むの情は日毎に昂つて來た。彼等は先づ大木を仆す前に大いなる枝葉を斫らんことを企てた。そして其撰ばれたる第一の的は我目連尊者であつた。

彼等は先づ浮浪人を語ひて多くの金銀を與へ、伊尸耆利(Isigili)山に道を修めつゝある彼を殺さしめた。彼等は二回まで尊者を打ち洩したが、第三回目には、遂に尊者を取り圍んで瓦石を以て散々に打ち据ゑ、皮破れ肉裂け、骨も碎けて只一塊の肉團と見える程に至つた。彼等は之を林中に投げて去つた。されど彼等は遂に阿闍世王の手に捕へられ、その自白によりて殺害の張本人は裸形外道であつたことが知れ、彼等も次いで捕へられて、火坑に投ぜられた。

(二)一説に、迫害を受けた彼はこの時神通を以て辛くも其場を免れ、滿身紅けに染りて竹林精舍に至り、舍利弗に申すやう「我いま裸形外道に撲れて、骨肉破れ限りなき疚痛みを堪へ忍ぶことは出來ない。今より涅槃に入るであらう。」舍利弗は淺間しき友の姿を見て「卿は神通第一と云はれる程の力を持つてゐる。何故に彼等如きの打撲を避ける事が出來なかつたのであるか」目連曰く「是實に我前世に於ける惡業の酬いである。我今日の疚痛を受けることは決して偶然でない。この故に卿に辭して涅槃に入らうとするのである。」この時舍利弗は目連の入涅槃を止めて、自ら故郷に歸つて涅槃に入つた。目連はこの報を得て、我涅槃に入る時は今なれとて、神通を以て釋尊に最後の御訣れを述べ、徐に故郷の拘離多村に行きて其地に涅槃した。

(三)更に他の一説には、提婆が幾度か釋尊を害ひ奉らんとして墮獄した時、釋尊は尙ほ彼を憐み給ひて舍利弗、目連の兩人を地獄に遣はして、「地獄の苦みを受けること一切にして、證りを開くであらう」と豫言せられたが、兩人は王舍城に歸りてある外道に、提婆が地獄にあること、並に彼の教が間違うてゐることを語つた。提婆の徒黨は之を聞いて深く兩人に怨みを懷いた。彼等は先づ舍利弗を覘うたが、何かの機會で望を果すことが出來なかつた。次に少し遲れて來る目連を襲うた。處は王舍城の巷であつた。彼等は杖を執りて目連に飛びかゝり、行く〳〵巷を通して擊ち續けた。この時若し舍利弗が救ひに來なかつたならば、彼は其場に絶命したに相違ない。舍利弗は神通を以て目連を嬰兒のやうに小くした。そして彼等の毒手を免れて竹林精舍に運んだ。この變事の報知は野火のやうに全市に擴つた。阿闍世王は之を聞いて直に兵を率ゐて其場に馳せつけ、直ちに凶漢を捕へた。王は神通自在なる尊者が、どうして彼等の爲めに

迫害を受けたのであるかと問へば、目連は「我宿世に於いて、父母をかやうに過した報いであると」と云うた。王は直ちに多くの侍醫を目連に送り、若し一週間の中に治すことが出來なかつたならば、侍醫等を黜罰するであらうと云うた。されど尊者の痛手は致命傷であつた。彼等は之を見て王の難題を目連に告げた。彼は之を聞いて、「その間に一先づ治るに相違ない」と云うた。七日の後果して彼は鉢を持ちて苍に食を乞うた。されどその日正午過ぎに涅槃に入つた。

以上三説の中、第一は最も飾りなく事實を記し、他の二説は幾分脚色を施してゐるやうにも思はれるが、どの説もこれぞと云ふ際立つた歴史的證權も有つてはをらぬ。今日は只上のやうに三説を羅列(ならべ)た丈である。尤も何かの標準を定めて長を取り短を捨て、この三説を合糅(がつじゅう)にすることも出來ないこともないが、左様な冒險を企てるよりは、寧ろ讀者の見解に一任することとする。

道に殉ずるの勇氣は、單に目連尊者一人でなく、教團の上首と云はれる人々は、何も優劣はなかつた。然るに彼獨りこの非業を遂げたといふことは、教團に於ける多くの人々に取つては、

彝し難い疑問であつた。(四)彼等は集りてはこの噂さをした。「あのやうな尊い老長老が、どうしてこれ程の悲慘な最期を遂げたのであらう。」釋尊は之を御聞きになつて、「否、諸の比丘よ、目連は能く定められた通りの最期を遂げたのである。彼は前生に於いて、其妻に教唆されて、盲の父母を林中に棄てたが、其歸路ある追剝の仕草に感染して、遂に兩親を殺して其屍を藪の中に棄てた。彼はこの報いによりて長く地獄の苦みを受け、この世に出でゝ證りを開いたけれども餘業尚ほ盡きずして、かやうな最期を遂げたことである。」

尚ほ進んで舍利弗とともゝに其威德を嘆ぜられたことは舍利弗傳に委しく記してある。更に釋尊は諸比丘に命じて、目連の爲めに竹林精舍の門に近く塔を起して懇にこの大弟子を供養し給うた。彼の歸依者が舍利弗とゝもに莊麗な塔を建てたことも舍利弗傳に讓る。

(五)後阿育王は十萬兩を彼の塔に供養して、左の如き偈を以てその德を讃じた

神足中第一　離於老病死
有如是功德　今禮目犍連

(一)『緬佛』二ノ二五頁。『須佛』三四九頁。

教團の人々

(二)『增阿』第一八、第一九。
(三)『西傳』一〇九頁。
(四)『緬佛』第二ノ二六頁。
(五)『雜阿』第二三。

教團の人々第一卷終

索引

ア行

頁數
阿私陀仙人 (Asita)…… 50
伊羅鉢龍王 (Elapatro nāgarājā)…… 51
飢えた夫婦の喩…… 17
優陀夷 (Udayī) (Kaludayi)…… 27
鬱單越國 (Uttarakuruḥ)……110
優婆低沙 (Upatiṣyah)…… 70
優波先那比丘 (Upasena)…… 33
盂蘭盆會 (Ullaṃbana)……126
鴦崛摩 (Angulimāliya)…… 24
音尊者…… 77

カ行

迦羅比丘尼…… 21
九山八海……113
金翅鳥王 (Garuḍah)…… 87
軻連國の四比丘…… 18
拘樓孫如來 (Krakucchandaḥ)…… 77
五分律第十七卷…… 9

サ行

三百四十八戒…… 14
十七群の比丘…… 21
次第乞食…… 17

毗盧叱加 …… 85
飜譯名義集 …… 10

マ　行

醉偸羅王 (Mathula rāja) …… 55
馬宿, 滿宿二比丘 …… 26
勿力伽難提比丘 …… 23
文荼王 …… 59

ラ　行

賴叱恕羅 …… 20
裸形外道 (N rgrantha) …… 127
理璃王 (Viruḍhaka) …… 81
六群の比丘 …… 14, 1[illegible], 21, 26
六群の比丘尼 …… 14, 21, 26
勒叉那比丘 …… 121

慈地比丘 …… 22
神通 …… 83
聖住 …… 73
聖默然 …… 73
聲聞緣覺二乘 …… 4
沙彌均頭 …… 30
須彌四州 …… 114

タ　行

第一結集 …… 39, 46
大小乘の關係 …… 4
提婆(提婆達多) (Devadatta) …… 3
陀驃子 (Dabba Mallaputta) …… 22
長壽王の喩 …… 21

ナ　行

那迦波羅比丘 …… 28
難陀, 優般難陀龍王 (Nandopanandonāgarājā) …… 82
二百五十戒 …… 15

ハ　行

波逸提 (Pāyattikāḥ) …… 113
婆迦梨比丘 (Vakkali) …… 30
跋陀和利 …… 17
跋難陀比丘 …… 18
波羅夷 (Pārājikā) …… 18
毗舍佉夫人 (Visākha) …… 88

教團の人々

釋尊研究叢書　第三編

舍利弗

目次

第一章　出生及び修學……一
一、出生……一
二、出家……五
三、刪闍耶の學說……一三
第二章　歸佛……一七
第三章　叔父摩訶俱絺羅……二六
第四章　舍利弗の性向及び特長……三二

第五章　舍利弗と在俗者……四五
一、祇園精舍の建立……四五
二、給孤獨長者……四五
三、輸屢那の歸依……五三
四、那憂羅公老人の歸依……五七
五、舊友陀然の歸依……六〇
第六章　舍利弗と諸弟子……六二
一、舍利弗と阿難……六八
二、焰摩比丘を敎化す……六八
三、優波先那比丘の蛇害……七一
四、舍利弗に對する謗難……七五
一比丘の妄語……阿濕婆、富那婆娑の惡行……偷羅難陀比丘の惡語……八〇
瞿波離比丘の墮獄
第七章　舍利弗と外道……九〇
一、浮彌比丘……九〇
二、槃特に代つて世典婆羅門を敎化す……九三
三、裸形外道の歸依……九八
四、外道補縷低迦に無我を語る……一〇三
第八章　釋尊と舍利弗……一〇七
一、羅睺羅を度す……一〇七
二、衆比丘の敬禮……一〇八
三、師弟問答……一一〇

四、自恣の一日……一一一
五、舍利弗の微過……一一七
第九章　雜事數項……一二〇
一、惡鬼に撲たる……一二三
二、病氣……一二五
三、酒漢と舍利弗……一二八
四、讃詠せらる……一二九
第十章　證悟問答……一三二
第十一章　示寂……一三五
第十二章　滅後の崇敬……一四四

依用書略標解

長阿	長阿含經
中阿	中阿含經
雜阿	雜阿含經
增阿	增一阿含經
四律	四分律
五律	彌沙塞部和醯五分律
誦律	十誦律
毘出	根本說一切有部毘奈耶出家事
毘僧	根本說一切有部毘奈耶破僧事
毘藥	根本說一切有部毘奈耶藥事

巴沙　巴利沙門果經（Diologues of tle Buddha. I）
緬傳　緬甸佛傳（The Legend of Gaudama Bigandet）
巴涅　巴利大般涅槃經（Dialogues of the Buddha. II）
西傳　西藏佛傳（The Life of Buddha. Ro Ckhill）
須佛　ス氏「佛教論」（A manual of Buddhism—Spence Aardy）
哩佛　釋尊之生涯及其教理（Buddhism—Rhys Davids.）
初佛　初期佛教（Eary Buddhism—Rhys Davids）（以上二部赤沼氏譯）
於佛　オルデルベルク氏「佛陀」（三並氏譯）
中起　中本起經
本集　佛本行集經
大嚴　方廣大莊嚴經
十遊　十二遊經

許帝　佛說衆許摩訶帝經
僧刹　僧伽羅刹所集經
長爪　長爪梵志請問經
生經　生經
南涅　「大般涅槃經」南本
西域　西域記
佛讃　佛所行讃
釋譜　釋迦譜
智論　大智度論
枳易　枳橋易士集

舍利弗

第一章　出生、修學

一、出生

一　中印度、摩竭陀國の首都、王舍城から東南一里半ばかり隔つてゐる迦羅臂努迦(Kalapinaka)邑に摩吒羅(Māthara)といふ論議に長じた婆羅門があつた。

この時は國主頻婆沙羅王が、新に王位を繼いで、勢四方の國々を壓し、年來の敵たる東の方鴦伽國の軍を逆へ擊つて、大に之を破り、新興王國は、旭の昇るやうな勢であつた。之が爲めに、各種の文物は、王舍城を中心として、盛んに起り、論議をこと

ゝする遊行者の婆羅門も漸く王舍城を訪れるやうになつた。

或時、南印度の地師といふ婆羅門は、この地に來つて、論議せんことを求めた。當時の習慣として、國王は、適當の人物を求め、遂に迦羅臂拏迦邑の摩吒羅を招きて、この人に當らしめた。論議の結果は摩吒羅の勝となつた爲めに、王はその居村を以て彼を賞するに至つた。かくて摩吒羅はこの邑の主となり妻を迎へて、一男一女を生み兄を俱絺羅（Kaushthila）といひ、妹を舍利（Sāri）と名けた。兩人また父の遺風を稟けて論議を好み、屢々論議を試みたが、妹は常に兄を凌いだといふ。

或時、博覽多識の譽れある南方の婆羅門底沙（Tishya）といふ人、また王舍城に來つて、論議を求めると、王は亦摩吒羅をして之を論戰せしめたが今度は底沙の勝つ所となつた。王は亦臣下の言を納れて、曩に摩吒羅に與へた迦羅臂拏迦邑を取り上げて底沙に與へたが、底沙は謙讓を旨として、之を復摩吒羅に返した。かくて傍人の媒によつて、遂う娘の舍利と婚することゝなつた。

この時、兄の俱絺羅は、自ら學力の足らない爲めに、父に代りて、底沙と論議することの出來ないのを憤激して、南印度に向つて修學を志した。一說に彼は當時の新學派なるローカヤタ哲學（順世外道）を研究せんと志したといふことである。兎も角この時に於ける彼の奮發の非常であつたことは、彼が家を出掛ける時に、「自分は、經典を學び盡す迄は、決して爪を剪らない」と誓つたことでわかる。後十數年を經るも、誓の如く、爪を剪らない爲めに、世呼んで長爪梵志（Dirgha-nakhabrahmacharin）とうた。

兄が旅立の後、舍利女と底沙は父を奉じて、平和の生活をつゞけた。一夜妻の舍利は靈夢を感得した。鎧甲に身を堅めた異人が手に金剛を執りて諸山を催破し、退いて一の山に立つたと見ると夢が醒めた。この夢を具に夫に語つて兩人とも奇異の感に堪へなかつたが、間もなく舍利女は妊娠した。すると不思議にも、彼女は遽に心が澄み渡るやうに感じて、談論流るゝが如く、流石の夫も舌を捲く程であつた。月滿ちて生

れた嬰兒こそ、後年佛陀世尊に次いで、名聲を轟した大智舍利弗尊者である。本名優波低沙（Upatishya）母の名に從つて舍利弗と稱せられた。舍利（Sāri）は鷲鷺と譯し、弗（Ptra）は子と譯す。即ち鷲鷺女の子といふ意味である。因にプトラといふ語は、プット（Put-地獄の名）とトラ（Tra-保護する）の合したので、子のない人はこのプット地獄へ墮ちるから、子は其親を保護すると云ふ意味で、印度では子をプトラといふとのことである。是等の語根の研究によつても、古代印度の社會制度が、いかに血統を重んじてをつたかゞ知られると思ふ。更に或る飜譯家は舍利弗を身子と譯してゐるが、之はシャリーラ（Sarira）即ち身、肉體、骨身と譯すべき語であるが、夫とシャーリ（Sāri）と誤つたもので、正當の譯としては前述の如く鷲鷺子、梵漢並びあげては舍利子といふべきである。

一說に舍利弗には八人の弟妹があつたといはれる。大膝、純陀、姜叉頡喇拔多闡陀、閻浮迦呵、憍陳尼、蘇達離舍那、之に妹蘇尸彌迦を加へて八人となる。又一說には、兄弟七人であつて、達摩、蘇達摩、優波達摩、低沙、優波低沙、（舍利弗）、頡喇拔多、優波々離拔多、であるといふ。

（一）『本集』第四七・『毘出』第二・『西域』第九・『西傳』四四頁・『須佛』二〇〇頁。

二、出家

多くの兄弟の中に於て、優波低沙（Upatishya）は獨り群を拔いてをつた。彼は明徹つた頭腦と、敏捷い才能を備へ、屢大人をして舌を捲かしめた。當時の習慣と云ひ、殊に博識の父と、怜悧の母をもてる彼は、幼より各種の教育を受けた。その時代に於ける唯一の古典學とも云ふべき厖大なる四韋陀（Chatur Veda）の暗誦をはじめ、各派の宗教哲學の研究等、殆んど至らぬ處はなかつた。九歲から師に就き、十六歲になると、もう其學問は堂に達し彼の名聲は四隣に響いた。

かやうな學識と才能をもてる彼は、亦立派な容貌と體格とを具へてをつた。額平に

して鼻高く、皮膚は印度人の熱愛する紫金色で、手を垂れると膝を過ぎたと稱せられる。かうした何一つ缺目のない周圍と人格を兼備へたことであるから、普通ならば、花のやうな青春の甘さに醉ひ、浮世の歡樂を貪つて飽くことを知らぬといふ年輩であるのに、彼はいつとはなく厭離の情に襲はれた。

印度の諸哲學は、順世哲學を除くの外、一樣に歡樂の皮相を破つて、一面には人世の慘ましい眞相を暴露し、他方には深い〳〵天地の眞に透徹することを敎へた。數論勝論等の、客觀の宇宙、主觀の精神に試みた哲學的解釋は、巧妙にして亦奥深いものである。名高い優波尼沙土哲學(Upaniashad)もこの時既に興りかけたといふことである。素より是等の指示す所に從つて、動ない解脫をうるには、實際上の修行を要することであるが、只机の上に研究したにしても、彼のやうな明徹した頭腦を有てるものに取つては、如何しても其影響を受けずにはをられないことである。彼の胸の中には浮世の歡樂を貪るといふ本能的な强烈の衝動がある。所が亦哲人の思想に觸れた理性はこの人生に對する欲念を根本から破壞さうとする。こゝに痛しい自我分裂の苦痛がある。肯目の樣に歡樂を追はんとすれば、冷靜な理智は人生の凋落を觀照る。それならば正しい理智の通りに欲念をなくせやうとすれば、一方から亦猛烈しい本能は獸のやうに慾情を恣にしやうとする。哲人の腦みはいつもこゝに萌芽を發するのである。

殊に彼の家は富み榮えてをつた。印度は熱い國柄であるから人の各性能は早く熟するを常とする。彼が爛熟した青春の思ひを懷きながら、一方には之を醒す深遠い哲理に脅かされた心持ちは、今日傳へられたる簡潔な素朴な記述を通しても、明かに汲みとることが出來ることである。

「本性は柔輭、その心は賢くして直しく、常に慈悲を懷き、深く世事を厭ひ、乃至煩惱を厭背ひて、涅槃に向ふ」

彼は實に優しい情と、賢明い理性をもつてをつた。この情と理を强くし深くすれば情は歡樂に奔り、理は世變を徹見するやうになる。この氷炭相容れない二の思ひは、上

に述べたやうな自己矛楯、自我分裂の煩悶を釀すより外はない。その結果として、「世事を厭ひ、煩惱を厭背うて、涅槃に向ふ」心となるのである。彼は或時欲念に奔り、或時は深く人生を達觀して、欲情を咀ひ、解脫を欣うたことであらう。かやうにして二千五百年前の優波低沙の胸と私の胸とが、一つ思ひに波打つやうに感ぜらるゝ。

彼の居村に近い俱律陀(Kolita)村に村名と等しい名を有てる青年がをつた。家柄も年齡も、才學も、優波低沙と伯仲の間柄であつた爲めに、兩人は非常に氣が合つて、無二の親友となつた。この青年こそ後年彼と比び稱せられた敎團の異材たる目連尊者である。二人はいつも相會うて、共に遊び、共に語り合うた。宿因のなす所か、互に敬愛して、暫時も逢はねば、佚みに安否を氣遣ふ位であつた。

この當時、印度の民俗は日を卜して御祭りのやうな集會を催した。夫等の委しいことは文獻の徵すべきものはないが、多くの人々は綺羅を飾つて、定められた場所に集ひ、各々高い座を設けてそこに坐し、そして餘念なく舞樂を見物して、終日遊び興じたこと丈はわかる。

或時、王舍城から遠からぬ祇離渠訶山にこの種の催しがあつた。この會合は非常に賑であつたと見えて、王舍城の阿闍世太子も多くの臣下を率ゐて民衆とゝもに、盛んな舞樂を觀賞せられたといふことである。二人もこの會に出でゝ衆人の歡び遊ぶ狀態を眺めたが、所謂歡樂極つて哀情多しの言の如く、兩人は期せずして、烈しい厭離の感に撲れた。俗人の笑ふ時に、哲人は獨り悲まざるを得ない。優波低沙先づ、その場にえ堪へずして、後手の深い森に分け入つて、とある樹の下に憩うた。喧噪を極めた歡樂の巷から幽寂な森へ入つて見ると、今更のやうに心は塵を脫し、汚れは洗はれた感に撲れる。「あゝ人々は空なる歡樂の酒に醉うて、嘆きのこない間の、暫時の夢を貪つて、歌ふたり、囃したり餘念がない。もう百年たつたらあの大勢の者が誰一人も殘るものはないのである。されど思へば是は他人の上ばかりでない。自分も矢張りあのやうな浮世の樂みを夢みて、果敢ない日を送つてゐるのである。愚痴の極み、淺間しい

限りでないか。天の樂神緊那羅の奏でる音樂に心を蕩かしてゐる中にも、人間の嘆き悲しみは、遠慮なく見舞うてくる。今や、自分は、人生に何の欣びもない。只云ひ知れぬ恐怖がある。憂愁がある。この思ひが胸一杯になつて、拂ふことが出來ない。」俱律陀も亦後から森に入りて、優波低沙を見、自分の感じた厭離の念を述べ、佚ひに手を取つて、心ゆくばかり打ち語ひ、遂に出家して道を求めんことを約するに至つた。

優波低沙が、年來懷いてをつた厭離の念は、この歡樂の境に接するに及んで、口火を點ぜられた花火のやうに爆發した。彼は衆人の狂態を愚と見るとゝもに自らの愚を憐まざるを得なかつた。衆人の狂態は鏡に映つた彼の俤である。彼は今まで心の上に薄朦朧と眺めてをつた自己を、今やはつきりと衆人の上に見た。もう凝としてゐることは出來ない。早速家に歸つて父母に强請し、俱律陀とゝもに出家して道を求めた。傳ふる所によれば、父母が出家を許さなかつた爲めに、彼は七日の間食を斷つたといふことである。されど顧ふに、彼が求道の熾烈であつたことは、この傳說も尙ほ眞を語つてをらぬかも知れぬ。

四　當時、印度の宗敎は一般沈滯の有樣であつた。吠陀聖典に依つて崇拜せられた神々の權威は衰へて、祭祀を司る波羅門は、只儀式と習慣の外、何等の心靈の福祉を民間の人々に與へなかつた。神々に對する信仰が薄らいで只儀式の骸だけが殘つた事であるから、其大祭に要する多額の費用を支出しうる富家のみが、盛んな祭りを行うたけれども一般の人々は、もうその敎とはかけ離れた有樣であつた。只其當時、學識ある遊行者があつて、到る處多くの弟子を集めて敎養し又心靈の滿足を望む者や、精神上の事柄を喜ぶ人々をも敎へ導いた。彼等は或意味に於いて、學校の敎師であり、社會の指導者であり、文學者であつた。是等の人々は釋尊の敎團に相對して、民間に多くの勢力を有つてをつた。彼等は矢張り學識に於いても德行に於いても、一般の人々の尊信を獲る丈の素養を有つてをつたらしい。釋尊在世の間も、及び其滅後も、常に佛敎々團に向つて、樣々の迫害を加へたことがある。夫丈け實際上の勢力を有してをつた

ことが知られるのである。夫であるから嘗つては宗教上の實權を握つて、人々の信仰の中心となつた波羅門種の人々は、學識ある遊行者を除いては、只世襲の財産によつて貴族的の生活を送る迄であつた。夫であるから、五優波低沙、倶律陀の如き、身は波羅門の家に生れながら、眞面目に道を求めて出家するのに、父母は驚き嘆いて、之を止めるといふ有樣であつた。波羅門種族の規定として、幼時には父母の膝下にあり（第一期）、長じては師に從ひて聖典を學び（第二期）、壯年に家に歸りて妻を娶り、後繼者を獲（第三期）、再び山林に入りて清淨なる默想の生活を營む（第四期）といふことになつてゐるが、この當時は、第四期の生活といふものは、もう一般に行はれなかつたやうである。

唯罕に六釋尊の道を問はれた、阿羅邏迦蘭（Ālāra-kālāma）仙人の如き小數の學德のある人々が第二期の波羅門を敎養した位である。夫も多くは深山に隱遁してをることであるから、優波低沙と倶律陀は、先づ王舍城にあつて諸弟子を敎養してゐる遊行者六師外道の一人珊闍耶羅胝（Sañjaya-Vairatti）を擇んだ。

（一）『本集』第四八。
（二）『本集』第四八・『西域』第九。
（三）『毘出』第二・『緬傳』一ノ一五八頁。
（四）『初佛』
（五）『本集』第四八。
（六）『本集』第二一。

三、、刪闍耶の學說

彼の說は種々に傳へられてゐる。一未來の果報といふことに就ては、有るとも云へるし、無いとも云へる。夫であるから私は無いとも云はぬ。又無いのでないとも云はぬ。次に「人類は偶然に生じたのか」「又は善惡の業は果報を生ずる」とかいふやうなこと

に關しても、矢張りそのやうに答へる。

この說によつて見れば、彼は詭辯派のやうにも見える。又神祕論者のやうにも見える。

二　一切の人には餘業がある。業緣によつてしば〳〵生死の境を獲る。故に前世の業によつて殺生等の惡業を造つても、敢て罪とは云はれない。

この說によつて見れば、彼は絕對的の宿命論者のやうである。即ち今日の吾々の行爲は過去に規定されたことであるから、吾々の責任でない。責任を有たないから罪報を受ける理由がない。從つて惡いことをやつたと悔むのは、この理を悟らずして、負ふべからざる責任を負うて苦しむことである。

三　道は吾々の努力によつて求めた所で駄目である。八萬劫の生死を經れば、苦み盡きて自ら證りを得る。恰も高山から縷丸を轉ばすに、縛が盡きた所で自ら止るやうなものである。

この說によつて見れば、彼は一種の決定論者である。一種の運命論者である。吾々の運命は決定されてゐる。個人の努力といふものは何の力もないといふのである。

以上の三說はともに經典の各處に散說せられたる所謂斷翰零墨であるから、各の說を以て彼の說全體とは無論することは出來ない。私はこの三說を綜合めて略彼の說を覗ふことが尤も至當の方法と思ふ。

即ち彼は第一說に於いて、俗人の考へてゐる平凡の思想を拂ふ爲めに論理的の思辯を須ゐた。之が彼の理論的方面である。第二に於いて彼は積極的に自說を立てゝ業因緣說を述べ、吾等は自己の運命を過去の業力のなす處と斷念めて、之に就て悲喜の念をもつに及ばぬと敎へた。更に第三說に於いて、絕對的の宿命論から脫け出でゝ未來八萬劫後の得脫を說いた。之が恐くは彼の說の敎權であつたやうに思はれる。吾等は未來八萬劫までは、自力の努力でどうすることも出來ないが、その時には自と業力盡きて平安寂靜の證を得ることが出來るといふのである。

上の綜合説によつて見れば、略彼の説が解せられるやうである。尙ほ彼は説の如何に拘らず六師外道の中に於いて尤も人格が高く、名聲も盛んのやうであつた。[四]夫は優波低沙、俱律陀の兩人が初めに他の五師を訪ひ最後に彼の許に止つて、弟子の禮を執るに至つたといふ經典の記載によつて知られることである。

優波低沙は拘律陀とゝもに、彼の説を學んだが、既に充分の素養と、英才をもつてゐることであるから、僅に晝夜[五]一週間（又は三日間）にして、其堂奥に達し、師の命によつてその弟子[六]二百五十人の教授師となつた。

（一）『巴沙』七五頁・『長阿』第一七。
（二）『南涅』第一七。
（三）『枳易』。
（四）『毘出』第二。
（五）『本集』第四八・『緬傳』一ノ一五九頁。
（六）『西傳』四五頁、『西城』第九『中起』。

第二章　歸佛

文書の示す處はないけれども、兩人はこの師の許に數年を費したらしい。けれども內心の安靜を得ないことは出家以前と少しも變る所はなかつた。彼等は時々語り合ふやう、「師の説は充分に解脫の法を教へてをらぬ。吾々は更に善師を求めねばならぬ。以後は兩人誓を立てゝ、誰にても善師に逢はゞ必ず告げて其法味を共にしやう」と。

靈性の不安に苦しんだ兩人の求道は益烈しくなつた。彼等は是等六師の遊行者の説の外に當時波羅門教の正統派と稱せられた數論、勝論等の所謂六派哲學の説も研鑽したことであらうが、是等は單に深遠の理論を教へるのみであつて、實際上の心靈の要求を滿してくれなかつた。彼等は只管善き師を求めた。火藥は充分に塡裝されてをる。先に彼等をして出家せしめたやうに、僅に一點の靈火も、彼等の迷ひを燒き盡すに相

違ない。

或日、優波低沙は晨朝巷を行くと、一人の遊行者が僧伽梨を著け、鉢を持ち威儀嚴かに、庠序と諸根を攝めて眼もふらず歩み行くを見て、思はず崇高な靈氣に觸れるやうに感じた。恭敬の念ひと、求道の念に驅られて、彼は思はず件の遊行者の後に隨うた。

當時、王舍城の人々は太平の餘澤に狎れて、歌舞、音樂を好み欲樂に耽り、奢侈に流れて、猥りがはしい風俗を喜んだ。成道の翌年正月十五日釋尊が一度頻婆沙羅王に迎へられて竹林精舍に法を說き給ふや、多くの比丘は、各威儀を守つて巷に行乞したことであるから、卑俗の背景の中に浮き出したやうに鮮であつた。優波低沙の後を追うた比丘は馬勝比丘（Asvajit 五比丘の一）であつて、教團中威儀の嚴かなるを以て有名であつた。

『遊行者よ、卿は如何なる人ぞ、卿の師は誰ぞ』優波低沙は師に逢へる歡喜びの胸を躍らしながら馬勝比丘に尋ねた。

『我師は釋種の子、道を悟り給へる大沙門にてゐらせらるゝ。我はその弟子』と比丘は答へる。

優波低沙は尙ほ進んで教を乞ふと、彼は一偈を唱へた。

諸法は因緣より生ずと
世尊は說き給へり。
諸法を斷じて涅槃に入ることも
大沙門は宣說し給ふ。

彼はこの偈を聞いて踊り上るばかりに喜んだ。今まで曇りて解く由もない胸は一時に霽れ上つて、心の穢は洗はれ、喜びは五體にゆき亘つて、淸淨法眼を獲た。心に叫ぶやう。「人は皆な「我」を執じて、輪廻の源を造つてをる。若し「我」想と、「我」の目的となるべき我所を除き去つたならば、宛然日光の暗を拂ふやうに、心の開明を見る

であらう。我今日まで學び來つたことは皆な邪(よこしま)の見解であつた。

宿命説も、因なくして生ずるといふ自然生説も乃至大自在天（Maheśvara）の創造説も皆な邪見である。今や因縁法を聞いて、我胸に無我の智が開けて來た。ああ今こそ眞(まこと)の道を見た。」

彼は馬勝比丘を禮して、約の如く拘律陀の許へ歸つた。拘律陀は友の容貌の晴々として、殆んど別人のやうなのに驚いて故を問ふと、彼は馬勝比丘に教へられた偈を誦すと拘律陀も彼と等しき心境に達した。

兩人はもう一時も凝としてゐることは出來ぬ。早速師の許にゆきて、懇に從來の重恩を謝し、手を取つて釋尊の許へ赴くことを告げた。珊闍耶(さんじゃや)は驚き憤りて再三之を止めたけれども、兩人はいつかな聽き入れない。遂に師の許を辭した。弟子二百五十人も共に兩人の後を追うた。珊闍耶は心身惱亂して、熱血を吐いて死んだと傳へられる。

兩人は弟子を率ゐて竹林精舍に到り、先づ第一に傍の樹下を逍遙せる馬勝比丘を禮して、前の恩を謝し、徐に世尊の御許に詣づ。

世尊は遙に兩人の近(ちかづ)くを見給ひて

諸聖を見るや樂し
共に居るも復樂し
諸の癡輩(おろかもの)を見ず
是ぞ常樂なれ。

と宣給ひ、喜び迎へて具足戒を授け、弟子の上位に置き給うた。鬚髮を剃り、一衣一鉢の姿になれる兩人は、自と威重を有せること七日(二)にして百歳の法臘を經た比丘のやうであつた。母の名に從つて、優波低沙は舍利弗と呼ばれた。

この時彼の年齡は幾歳であつたかは、何の傳記にも記載してはをらぬが、唯彼が晩年に及んで、惡比丘の誹謗を受けた時、「母胎を出でゝより年八十(三)に向ふけれども、自

ら思ふに未だ嘗つて殺生せず、妄語せず」云々と云つてをる處から見ると、もうこの時は釋尊入滅に近かつたらしい。彼はその時七十餘歳である。さすれば八十入滅の釋尊と同年に入滅した彼は、釋尊とは七八歳の相違に過ぎなかつたやうである。之で彼の歸佛の年齢は數へられる。釋尊の成道を三十五歳とすれば、其翌年が舍利弗の歸佛の年であるから、彼は大凡二十七八歳であつたらしい。之から更に溯つて想像すれば最初の出家は十八九歳から二十一二歳の間で、夫から歸佛迄は外道の遊行者に就て學問修行したこととなる。[四]一説に彼は師珊闍耶の説に滿足すること能はずして、遍く諸國を廻つて善師を求めたとも傳へられてある。即ち出家から歸佛迄の間が餘り長いことから箇樣に云ひ傳へられた樣にも思はれる。

[五]舍利弗、目連の歸佛は、釋尊教團の内外に、非常なる影響を齎した。今まで名聲を維持し來つた珊闍耶(さんじゃや)は命と頼む兩弟子に棄てられ、その他の弟子も盡く兩人に從うたといふ有樣であるから、彼の失望痛憤は、殆ど言語に絶したことであらう。彼が激怒悲憤の餘り熱血を吐いて死んだといふことは、王舍城人民をして戰慄する程に驚かしめたやうである。之が爲に摩竭陀國の上流の子弟は、相繼いで出家して釋尊の弟子となつた爲に、市民は大層之を心配して、「かやうに出家するものが多くなつては、遂には我々種族を斷絶せしむるに至るであらう」と云うた。かくて彼等は、城に入つて托鉢する比丘を見て、

「摩竭陀の山都王舍城へ大沙門が巡り來て珊闍耶の弟子達を、皆な改宗せしめた。この次は、誰が歸依することであらう。」

と皮肉に罵つた。比丘はこの語を聞いて。釋尊に申し上げると、「比丘よ、憂ふるに及ばぬ。その謗も、長く續くことはない。七日も過きたら自と止むであらう。今後もし彼等が罵つたならば、次のやうに答へるがよい。

「如來は眞實の語によつて、人を歸依せしめ給ふ。何者か、眞理の力によつて歸依せしむる如來を謗り奉るぞ。」

民衆に與へた影響はかやうであつたが、教團の內部に於いては、釋尊が餘りに兩人に高い地位を與へられた爲めに、諸弟子の間に、不平を抱くものが尠くなかつた。釋尊は之が爲めに有名な七佛通誡の偈を御說きになつた。

諸の惡を作さず、
諸の善を行ひ
自ら心を淨くするぞ
諸佛の敎なれ。

僧は脇目もふらず一心に道を求めねばならぬ。自ら心を淨くするを忘れて、他の地位を羨むが如きは僧の道でないと、比丘等の不平を機として、千古の敎訓を施し給うた。爾後、年の經るとゝもに、舍利弗、目連の實力は益表はれ來つて、何の滯りもなく敎團の重鎭となるに至つた。是れ全く兩人が先天的に卓越した能力を有つてゐたからである。

(一)『本集』第四八、『西域』第九、『釋譜』第一、『緬傳』一ノ一五九頁、『西傳』四五頁、『須佛』二〇〇頁、『佛讃』第四、『大嚴』第二。
(二)『毘出』第二。
(三)『增阿』第三。
(四)『須佛』二〇〇頁。
(五)『緬傳』一ノ一六一頁、『毘出』第二、『哩佛』六二頁。

第三章　叔父摩訶倶絺羅

一先に南印度の方へ研學に赴いた舍利弗の叔父倶絺羅、即ち長爪梵志は、年を重ねて故郷に歸ると家族の多くはもう故人となつてゐる。舍利弗はと聞けば沙門喬多摩の許にありと云ふ。彼は直ちに王舍城に赴き、竹林精舍に來つて世尊と問答した。梵志心に思ふやう、「一切議論は破ることが出來る。一切語は壞ることが出來る。又一切見解も轉ずることが出來る。併しこの中に何が實の理であらうか。自分は今日まで諸說を學んだけれども、一法も心の底に捉んではをらぬ。恰ど大海の底を究めんとして究めることが出來ないやうである。」かやうに考へて釋尊に申すやう。

「私は一切の說を認めない。」釋尊はすかさず、「汝は一切の說を認めないと云ふが、其の認めないといふことが、汝の自說でないか。唯自分の說丈を認めて、理由なく他の說を認めないといふは、既に邪見の毒を飲んでゐるでないか。」

と仰せられた。彼は釋尊の從容として迫らざる態度と、電光のやうに自分の說の根抵に迫つてくる非凡の力量に心から信服した。釋尊は更に進んで無常四諦の理を實際的に御說きになると、此時扇を執つて釋尊を扇いでをつた舍利弗は、此の敎によつて眞に諸法の無常、生滅の理を觀じ、諸の漏を離れて證りを開いた。實に歸佛後十五日目であつた。

長爪梵志も亦舍利弗と同じく、この說法によつて諸の疑惑を離れて阿羅漢の位を獲た。四辨才第一の稱ある摩訶具絺羅（Mahakaushthila）といふはこの人である。

彼の事蹟に就ては、傳へられる所甚だ尠い。

一。或時釋尊が竹林精舍にゐらせらるゝ時、倶絺羅と舍利弗は耆闍崛山にをつた。日暮れ方に、倶絺羅は禪定より起つて、舍利弗を訪れ、明、無明の意義を尋ねた。舍利弗は、「無明は不知といふ。實の如くに五蘊を知らず、四諦の理を知らざるに名ける。

明は是等の道理を明かにして、諸法の眞相を觀ずるをいふ」と答へた。

二。他日、又彼は同處に舍利弗を訪れて、「外物が吾々の眼を、惑はすのか、吾々の眼が外物を執ずるのか」と問うた。舍利弗は、「黑白の二牛を一軛にて繫ぐやうに、貪慾といふものが、眼と外物の間にあつて是等を繫ぐのである」と答へた。

三。更に他日、又同處に於いて、此度は舍利弗の方から俱絺羅を訪れて、十二因緣に就いて、問を起し、識と名色の關係に就いて、俱絺羅に尋ねた。彼は三蘆を地に建てる喩を引いて、その關係を明にした。舍利弗はその答を聞いて彼を激賞した。「卿の云ふ所は盡く皆な寶玉のやうである。理義明かにして深く、誠に世の頂戴する所である。」

俱絺羅も亦「智慧明達」を以て舍利弗を嘆賞した。叔甥の仲なる兩人は、法の上に於いて殊に敬愛の情を以て美しい交りを續けてゐた。

四。或時竹林精舍に衆多の比丘集りて互に語り合うた。その時質多羅象子比丘は、人々の話の了へない中に、不謹愼に長老比丘に問を起した。これを見て俱絺羅は彼を懇に教化し、更に彼を庇護する人々に對ひて道を求むるに精進ならず、謹愼ならざる過失を廣說き、箇樣の人は遂には戒を捨て道を修めることを罷めるに相違ないと申した。

其後果して質多羅象子比丘は、彼の言の如く道を修めることを罷めた爲めに、人々は俱絺羅の先見の明に感服した。

五。釋尊、或日祇園精舍に於いて、四辯を說いて俱絺羅を稱へられた。

「比丘よ、天龍鬼神の至る迄、あらゆる說の義理を明かにするは義辯である。又、如來の說ける十二部經の中の、あらゆる法相を總括つて、缺點のないことが法辯である。

又、過去の人々の須ゐた長短の語、男語、女語、佛語、梵志語、天龍鬼神の語に至るまで、明に會得んで法を說くは辭辯である。

更に、法を說く時に、聊も畏るゝ所なく、能く大衆を悅服するは應辯である。

汝等、法を說くには、摩訶俱絺羅のやうでなくてはならぬ。彼は此の四辯才を備へて缺くる所がない。」

上の材料によつて見ると。俱絺羅は頭腦の明晰な人であつたやうである。四辯才といふけれども、單に發表の巧妙だけでなくして、前の二つは義理を明快に會得することである。彼が最初。釋尊に逢うて「一切の論議は破壞ることが出來る」と考へて、何等の積極的の自說を立てず、唯破壞的、消極的に自分は一切の說を否定する、といふ處で、彼の頭腦の明徹つてゐることが解る。釋尊は之を知り給うて「認めない、否定するといふ自說を認めてゐるではないか」と烈しく切り込まれた議論の强さに敬服して、直ちに自說を捨て、我執を去り、虛心に說法を聞いた有樣が、明かに會得せられる。故に彼は亦「我聲聞弟子之中、俱琵恥羅苾芻は明解聰利第一である」と釋尊の御讃めに預つてゐる。

尙ほ彼は舍利弗と『中阿』第七、第十四、第五十八に數番の問答を重ね『增阿』第一〇に俗人と問答する外、彼の性行、逸話、入涅槃等は全く傳へられてないやうである。

（一）『須佛』二〇二頁、『毘出』第二、『長爪』、『西傳』四五頁、『智論』第一、『雜阿』第三四、『十遊』。

（二）『增阿』第三。

（三）『雜阿』第九、第一〇。

（四）『雜阿』第九。

（五）『雜阿』第一二。

（六）『中阿』第二〇。

（七）『增阿』第二二。

（八）『毘出』第二。

第四章　舍利弗の性向及び特長

私は是迄、出來る丈年代を追うて、舍利弗の事蹟を跡けたが、以下記す所の多くは彼の入涅槃に至る迄で多く年代を知ることが出來ぬ。單に雜然と、多くの事蹟を或種の分類の下に、記載せねばならぬ。私は是等の事蹟を繹ねるに先ちて大體に於て、彼の性向、能力、特長を知りたいと思ふ。その概念を框として、多く事蹟をその中に當て塡め、更に夫等の事蹟によつて、先の概念を強くし、深くし、廣く大いにせんとすることが、私の努力である。

何人も舍利弗と云へば目連を連想し、同時に智慧第一、神通第一といふことを想ひ起す。智慧第一といふ言葉は、非常に多含的である丈け、漠然としてゐる。先づ最初に吾々はその言葉の內容を具體的に知りたく思ふ。

前にも述べたやうに、當時は婆羅門敎の正統派と稱せられた深遠なる六派哲學が組織せられて、數論の自性、神我の說や、瑜伽派の默想的な、神祕的な觀念論等は、形而上學としても、又宗敎的の觀行としても、立派な智識的產物である。舍利弗が天賦の英才を有つて是等の周圍の中に生れ、自由に敎育を受けたことであるから、屹度是種の學說を研究したに相違ない。彼が八歲から師に就き、十六歲にして學問の堂奧に達したと稱讚へられた英資を有つて出家し、私の想像の如く、二十七八歲に歸佛したとすれば、其堂に達したと稱せられてから、尙ほ十數年を學問修行に費したこととなる。此間彼は充分に當時の各思想を玩味したことと想はれる。この想像は私のみならず、彼が四韋陀をはじめ、自餘の諸論を學んだと傳へられてあることを信ずる者は一樣に想ひ起す考であらうと思ふ。

然らば智慧第一と稱せられたことは、是等の素養が佛敎の上に融和せられて、他人の企て及ばざる天地を有つてをつたと云ふことであるかと云へば、私は强ちさうでも

あるまいと思ふ。釋尊の教へられた處は、形の上で清素であつたやうに、思想の上でも極めて簡潔であつたやうである。單に理性の滿足を得る所の哲理としては、當時の諸宗教哲學は勝れた點はあつたであらうが、實際の功果といふことになると、何等の福祉を齎すことはない。釋尊はこゝの處を見破りになつて最初は、教理としては却つて卑近の教であるが、實行上の苦心慘澹たる苦行を撰ばれたが、夫も功果がなかつたので、遂に觀念工夫を凝らして、煩惱を斷つて證りを開かれた。其修道の歴程に於ける、煩惱と智慧の交渉を説明したのが、四諦十二因緣の教理である。其形式は極めて簡單であるが、實際の修道の上には、驚くべき深さと廣さがある。從つて無限い味がある。之より外に當時の佛教徒は何も要せなかつた。夫であるから、凡て新宗教が起る場合に、他の教を廢して自宗を立てるやうに、當時の佛徒も、大師釋尊の大法を唯一として、他は凡て邪教と排し去つた。隨つて從來學んだ學説は皆な邪見である。廢て棄ねばならぬ。彼等の思想は單なる智識でなくして、全心身によつて得たる力である

この力は一切る異教の思想を彼等の胸かち排斥して立場を失はしめた。こゝに實際上の力があり、光りがあるのである。

上の觀察から舍利弗の智慧の内容も稍輪劃がついてくる。彼の智慧は高遠な哲理を指すのではなくして、釋尊の證り給うた靈界に分け入り、その法味の組織的解釋並びにそこに到達るまでの修道の歴程を細に咀嚼めて、是等を衆人に解り易く説示したことであらうと思ふ。

或時、竹林精舍に於いて、世尊は舍利弗に學と法數の意義を御問ひになつた。その時、彼は暫く默然としてをつたが、再三問はれた時、簡潔にその意を答へ、更に大衆に對して「世尊が一日一夜、若くば七夜に、異句異味を御問ひになれば、私も夫に隨つて、御答へすることが出來る。」と云うた。之を聞いた比丘の一人は、そのまゝ釋尊の許へ行きて「世尊よ、今舍利弗比丘から未曾い説法を聞きました」と申し上げると釋尊は「舍利弗の云うたことは、少しも違うてをらぬ。全く其通りである。夫といふ

は、彼の舍利弗比丘は善く法界に入つてをるからである」と申された。

この一事によつて見ても、舍利弗の悟界と、釋尊の大悟界とが、常に弦々共鳴の有様であつたことが知られる。法の主と尊崇せられた釋尊の法味を、自分は悉く味ふことが出來るといふことは、非常に大な言葉である。之を釋尊に申し上げた比丘は、この大な抱負に驚いて、「未曾有の說法を聞きました」といつたのは、半ば疑ひを懷いて釋尊に問ひ奉つたことである。釋尊と舍利弗の心境はかやうに相感應してをることであるから、釋尊は常に舍利弗をして御自分の說法を廣說せしめられた。彼は亦聊も躇躇ふことなく釋尊の御話の後を受け繼いで盛んな敎化を施した。

是等の說法の內容を見ると、四諦、八正道、七覺支等の說明又は相互の錯雜つた關係或は適當なる範疇や比喩を以て、修道の心得、又は法數の分類等を試みたものである。隨つてこの實際の修道に關係のない形而上學の諸問題即ち世界の邊無邊、如來の死後の有無等に就いては、當時の遊行者波羅門の大問題として論究した所であるが、

舍利弗は嘗つて彼等からこの種の質問を受けたけれども、默然として一語も發せなかつた。彼等は舍利弗が默然つてゐるのを、散々に罵つて歸つたことがある。若し舍利弗の大智といふものが形而上學や、單なる思辯論に造詣の深いことであつたならば、この時屹度論議をしたに相違ない。けれども彼は左樣な閑問題は少しも顧みる所がなかつた。是亦釋尊が戲論として嚴しく誕め給ふ處であつた。

當時、多くの敎への中に、釋尊の敎が際立つて一般の人々を感化した所は、實にこの點であつた。人は頭だけ、智識丈で眞の安心が獲られるものでない。日常の生活の上に築き上げた動かない智慧でなければならぬ。同時に煩惱の穢れを離れた靜寂な智慧でなければならぬ。其智慧は眞の修道から一歩々々生れて來るのである。舍利弗の智慧の根柢はこの悟道の上にある。今日高遠な形而上學として學者の机上に尊重ばれる所謂六派哲學なるものは、彼の眼中には、只不用な思辯、戲論とさへ映らなかつたに相違ない。こゝが彼の人格の偉大な所であると思ふ。

釋尊は、舍利弗の智慧を嘆賞せられて、

「舍利子比丘は、聰慧、速慧、捷慧、利慧、廣慧、深慧、出要慧、明達慧、辯才慧を具へてゐる。彼は實智を成就してゐる。

その故は我、略して四諦を說けば、舍利子は廣く之を他の爲めに說き露はす」

と仰せられ、或は又、

「智慧、窮りなく、諸の疑を決了するものは舍利弗である」

とも申された。

是等の言によつても、略彼の智慧の如何なるものであつたかは窺はれぬことはない。凡そ如何なる世間の末技に至る迄も、その道の天才といふものがある。夫等の人々は、殆んど常の人の企て及ばない能力を有つてゐる。況んや强烈しい人間の本能を根本的に覆して、全く人間以上の高い精神生活を營むことであるから、その修道の階次、方法、說明、弟子の薰育等は、同じ悟りを開いた人々の間にも、其能力や性向等に從つて、色々の特長を發揮したことと思ふ。彼の特長はこの智慧であつた。是は敎團に入る前からの彼の特性であつた。彼の個性は渾然として無我の悟の上に表はれて智慧第一の名を擅にしたことである。彼の天賦の智識的才能は、修道によつて限りなく展開けてゆく精神の狀態、一々の煩惱に對する一々の智慧、錯雜いつた精神狀態を截り開く智慧、無限煩惱を實踐的に分類すること、更に法相の上にあつては、釋尊が時に隨つて用ゐられたる數目諸法、即ち四諦、十二因緣、五蘊、十二處、十八界、四大、極微、等の實際的關係等、實に廣さに於いても、深さに於いても、之を客觀的に研究することになれば、立派な宗敎哲學の天地があるのである。今日彼の著書と稱せらるゝ「集異門足論」廿卷、「舍利弗阿毗曇論」三十卷を繙いたならば、初學者に取つては殆ど茫洋の嘆に堪へぬであらう。彼は是等の複雜なる修道上の問題に對して非凡の天才を有つてゐたのである。彼は是等の法相を學んだのでない。自らの深い經驗から、泉の湧くやうに生んだのである。彼は釋尊の敎を祖述したといふよりは、寧ろ師

と同一の味に立つて、自らの胸から生んだのである。この活きた悟りから流れ出るのであるから、彼の智慧は實に深慧である。その智慧は亦修道上の凡ゆる問題を解決することが出來るから廣慧である。この深い廣い智慧は、生死を出づる要法であるから出要慧である。彼は聰敏な徹底的な頭腦を有つてをるから聰慧と明達慧の主である。更に應用の才に富み、活用の機を握んでゐるから速慧、捷慧、利慧をもつてゐる。其上巧な發表力があるから辯才慧があると云はねばならぬ。是等を總括つて、「智慧窮りなく、諸の疑を決する」と云ふのである。

彼は自分で深く味ふと共に、他に教へて深く味はしめた。そして新しく味うて新しく教へた。彼は一つのことのみを繰り返さず、いつも多樣多端な實際の事柄に關して、所謂異句異味を味つたのである。だから澁滯しない。いつも新しい。いつも爽かである。彼が新機軸を出す所は、釋尊の後を引受けて廣說する時でも、自ら弟子に說法する時でも、明かに認められる。

彼の特長はかやうに、智識的方面であつて、英才煥發の人であつたが、通常才氣ある人の缺點として、稍もすれば、輕薄に流れ、虛飾に陷り易いことであるが、彼は、既に煩惱を斷滅して道を生命にしてゐる阿羅漢のことであるから、夫等の弱點は決してない。是等の方面から觀察すれば、舍利弗のみならず、所謂證りを開いた諸弟子は慥に人間以上の處がある。彼等はこの高い水平線の上に、各自の特長を發揮してをるのである。

舍利弗と並び稱せられた教團の英傑は目犍連である。釋尊は常に比丘の儀表としてこの兩人をあげて、諸弟子を教養し給うた。

「若し童子にして鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家して道を學びたいと思ふならば、常に舍利弗、目連比丘のやうでなければならぬ」

或は又

「汝等比丘、舍利弗、目連比丘に親み近いて、承事供養せよ。舍利弗比丘は衆生の

父母である。目連比丘は養ひ育て生長せしめる。即ち舍利弗比丘は、人の爲めに法の要を說いて、四諦を會得せしめ、目連比丘は法の要を說いて第一義の無漏行を得せしめる。是故に汝等、彼の兩比丘に親近せねばならぬ」

更に

十二「舍利子比丘の諸の梵行を生ぜしむることは、生母の如く、目連比丘の諸の梵行を長養ふことは養母のやうである」

舍利弗の說法は、よく聽衆の衷心に切り込んで、迷妄を斷ち、疑を除いて、眞道に導き、目連は長養ひ育てた。舍利弗は眞智の果實を植ゑ、目連は之を培養うた。舍利弗は智慧の利刀を以て、煩惱を截斷り、目連は修道上の事相に就て、薫育て上げた。舍利弗を生母に喩へ、目連を養母に喩へられたことは、誠に簡單な言葉を以て、兩人の特長を示してゐると思ふ。

兩人は實に教團の龜鑑であつたと共に、釋尊の兩腕であつた。釋尊に代つて說法教化するのみならず、亦身を以て大衆を統理することは、教團中兩人の右に出るものはなかつた。

以上の記載によつて、吾々は略舍利弗の特殊なる人格を知ることは得た。最後に一言したいのは、彼の溫い情である。彼は鋭い、冷靜な智慧の人であるとゝもに溫い情の人であつた。親切に弟子の病を看つたこと、涅槃に入る前に釋尊と訣れ奉る所、更に最後の訣を母に告げる所、その眞情がヒタ〳〵と人に迫る所がある。

彼の如きは、罕に見る所の宗教的天才と云はねばならぬ。

(一)『雜阿』第一四。
(二)『長阿』第八・『中阿』第一〇・第二二・『增阿』第一九。
(三)『雜阿』第二二。
(四)『中阿』第六〇。
(五)『中阿』第六・第七〇・『雜阿』第四九參照。

（六）『增阿』第三。
（七）『長阿』第九等。
（八）『本書』第六七頁。
（九）『中阿』第五・第六・第七・第二三・『雜阿』第一七・『增阿』第三五。
（十）『增阿』第四。
（十一）『增阿』第一九。
（十二）『中阿』第七。

第五章　舍利弗と在俗者

一、祇園精舍の建立

舍利弗の歸佛後大凡一年、即ち佛成道第三年の夏頃、舍衞城の須達多(Sudatta)長者は、所要あつて王舍城の知人の家に宿り、計らずも翌日の未明に釋尊の御許に詣でゝ歸依渴仰の念抑へ難く、二日の後、釋尊の御許にゆき、舍衞城の遊化を請ひ、そこに一宇の精舍を建立して教團の滯留所となすことを允された。この時舍利弗は釋尊の命を受け、精舍建立の監督の爲めに、長者とゝもに王舍城から百三十里ばかり隔つてゐる舍衞城へ赴いた。

舍利弗のこの任は非常な重大なものであつた。王舍城は既に國王の歸依もあり、釋尊の感化力も充分認められてあるから、異教徒もさ迄の迫害を加へないけれども、彼處は一人の佛教信者もない。當時舍衞城は王舍城と相對して殷富の都であつたから、

波羅門の遊行者も、盛んに門戸を張つてをつた。その敵地の眞中に、新宗敎の殿堂を建立するといふは、實に命掛けの大事業である。釋尊は之を徹鑒はして、敎團の上首たる舍利弗を御撰びになつた。この行の成否は、敎團の前途に非常な影響を有つてをつた。この偉大な責任を負うて、大智舍利弗は徐に世尊の御許を辭した。

二　傳に依れば長者は舍利弗とゝもに舍衛城に到着すると、其儘家へ歸らないで、適當の場所を探しにかゝつた。二人は遍く城外を巡つた。喧鬧を隔てた、寂靜な所、寒暑の烈しくない、蚤、蚊、蠅等のゐない所でなくてはならぬ。兩人は遂う祇陀太子の園林を選んだ。園中に撒いた黃金の額で買ひ取つたことも、無事に濟んだ。今はもう繩張りをして建築にかゝる丈である。

三　けれども案の如く、異敎者の反對が起つた。彼等にすれば、今迄自分等を供養してをつた須達多長者が、今度は異敎の爲めに莫大な喜捨をして、殿堂を建立するといふことは、いかにも痛憤の至りである。彼等は直と須達多長者の許へ行つて、「精舍を建てはならぬ。瞿曇沙門を迎へてはならぬ」と申し込んだ。之を聞いた長者も憤然として「この舍衛城は卿等の所有物でない。既に國王の許を受けてゐるのに、何も卿等の關る所でない」と斷然はねつけた。彼等は仕方なくして、國王の許へ行つて賴んだけれども允されない。今は實力を以て爭ふの外はないと、再び長者の許へ行きて、「聞く所によれば、瞿曇の大弟子がこゝに來てゐるといふことであるから、彼と吾々と論議して、我々が負けたら精舍を建て、彼が負けたら精舍を建てないと約を結んでどうであるか。」長者は喜んでこの議に同意した。

四　之によりて見ても、當時文化の程度が高く、思想の自由といふことが一般に行き亘つてゐたことが解る。古は波羅門種族が勢力を逞くして、祭祀を司る僧侶が社會の上位を占めてをつたから、國民の宗敎思想は婆羅門敎といふものに限られてをつたが、釋尊當時は、在來の儀式的の宗敎は權威を失うて、各種の學問や婆羅門敎の分派が競ひ起り、殊に社會組織の上にあつては、國王又は族長の權力の下に封建時代のやうに

統括せられたことであるから、國民は其保護の下に何等の教權にも縛られず、極めて自由な狀態であつた。

國民の宗教思想が箇樣に開放されてをつた爲めに、釋尊は一代の間、極めて悠々と圓滿の教化を果されたことである。釋尊の敵は基督のやうに政治と一致した權力ある宗教ではなくして、唯一部民間の尊崇を受くるに止つた當時の遊行者の徒であつた。國王又は族長の如きは、却つて釋尊に歸依する方が多かつた。舍利弗が異教徒の眞中に大精舍を建立するといふ場合に當つても僅に論議によつて可否を決するといふに至つては、彼等の實力のなかつたことは明かであると思ふ。

長者が約を結んだ後七日にして、論議の場が開けた。當時遊行者の論議は珍しいことでもないが、新に起つた佛教と在來の婆羅門教の公然たる論議は、今が始めである。一般の人々は好奇心を以て集り、彼等の徒衆は亦自分等の休戚に關はることであるから群をなして聲援した。彼等の代表者は赤眼婆羅門であつた。この人の事蹟は少しも傳へられないやうであるが、兎に角選ばれて重大な論議の場に立つ人であるから國中きつての大立物であつたことは慥である。彼等はこの人に信頼して勝利を獲るに相違ないと豫期してをつたらしい。

二つの高座は設けられて、舍利弗と赤眼の兩人は各一座を占めた。須達多長者は親ら香爐を執つて妙香を焚き、多くの眷屬を率ゐて舍利弗を擁護し、外道の徒衆も亦多く赤眼に隨うた。群衆は先づ舍利弗の威容の凡ならざるを仰いで讃美を禁じ得なかつた。

傳ふる所によれば、兩人は先づ神通を較べて勝敗を決したと云はれてゐる。赤眼が花樹を化作れば、舍利弗は風を起して吹き落し、彼が龍王を化作れば、舍利弗は金翅鳥王を化作つて之を降伏した。最後には赤眼は、舍利弗の威神に服して弟子となつたと記載せられてをる。

赤眼の徒衆は呆氣にとられ、群集は只管舍利弗の威德に感じ入つた。彼は群集の心

を察して四聖諦を廣說いた。既に舍利弗の威德に信服した群集は、今又熱心な巧な、而も實際に適應つた敎を聞いて歸依の念を深くしたものも少くなかつた。論議の場に於いて彼は非常な成果を收めた。

併しながら一部外道の憤懣は之によつて益昂つた。彼等は公に勝つことの出來ないのを知つて、祕密手段によつて舍利弗を殺さんと企てた。彼等の或者は陰に工夫の群に入つて精舍の建立に雇はれ、機會を獲て彼に近かんとしたが、幾許ならずして、舍利弗の仁慈に感じ、害心を止めて弟子となつた。

もう外道の難も去つた。舍利弗は長者とゝもに手づから繩を執つて設計を建て、十六大屋(或は六十大屋)、六十小屋(或は六十四小屋)は無事に建立せられた。

かくして釋尊の生涯中、第二の故鄕として、說法敎化せられた祇園精舍は建立せられた。「土地は給孤獨長者の買ひし所、林樹は祇多(Jeta)太子の施した所で、二人が心を合せて出來上つた道場であるから、今から後、この地を逝多(又は祇陀)林給孤獨園(Jēta-vana-anāthapindadasya-ārāma)と稱するがよい」とは釋尊が阿難に仰せられた所である。この長い名前を中略して祇園精舍と譯された。

位置は舍衛城の南一里許の處であつた。俗塵を遠ざかつた寂靜な處で、匂芳ばしい花樹や、ヌツト空高く立つてゐる棕櫚、傘のやうに擴つて綠陰を造る菩提樹の間に大小の僧侶は、善美を盡して建てられ、室にゐて冥想しても、外に出で經行するにも極めて適當した處である。

愛すべき祇洹
多の聖衆の遊行せる地
大法の王は此處に在しぬ
この地、我心を歡悅ばしむ。

とは古の詩僧の讃歌である。

誠に祇洹精舍の建立は、釋尊の生涯中非常なる大事業であつた。之が爲めに釋尊行

化の區域は遽に擴つて、教團は亦新なる多くの外護者を得た。

精舍[十二]建立せらるゝや、釋尊は迎へられて初めて舍衛城に遊化せられた。長者の喜びは喩へんやうもない。爾來[十三]長者は舍利弗を師とすることゝなつた。

（一）『中阿』第六・『西域』第六・『許帝』第一一・『雜阿』第二一二・『緬傳』一ノ一九四頁、『西傳』四七頁、『毘僧』第八。

（二）『中阿』第六。

（三）『許帝』第一一。

（四）『初佛』第一。

（五）『許帝』第一二・『西傳』四八頁・『毗僧』第八、

（六）『中阿』第六・『十誦』第三四。

（七）『西傳』四八頁。

（八）『毘僧』第八。

（九）『西域』第六。

（十）『西域』第六。

（十一）『於佛』一九六頁・『增阿』第四九。

（十二）『毘僧』第八・『許帝』第一二。

（十三）『十誦』第三四。

二、給孤獨長者

祇園精舍の建立の後、年を經て給孤獨長者は重い病の床に就いた。彼は使を釋尊の御許に遣はして安否を問ひ奉り、更に舍利弗の許に行かしめて、申すやう、「我今重い病に侵されて命も危い有樣である。生前に一度尊者の溫容に接したいけれども、氣力衰へて歩むことは出來ませぬ。願くば尊者、慈愍を垂れて、我家に來らせ給へ」

舍利弗は默然として其請ひを許し、翌日早く衣を著け鉢を執つて長者の家に行き、

懇に長者の病を問ひ、床から起きやうとする長者を止めて、自ら別の坐につき、「食は進まず、苦みは日々に烈しくなります」といふ長者の語を聞いて、語るやう。

「長者よ、怖れることはない。愚痴の凡夫は不信の故に惡趣に墮ちる。然るに長者は上信を有つてゐる。この上信は、苦みを滅して快樂を生ぜしめ、一來果又は不還果を得る。

長者よ怖れることはない。愚痴の凡夫は惡戒の故に惡趣に墮ちる。然るに長者は善戒を守つてゐる。

更に愚痴の凡夫は、慳貪、惡慧、邪見等によつて、命終れば惡趣に墮ちる。然るに長者は布施と善慧と正見等に住してゐる。是等は皆な苦を滅して快樂を生ぜしめ、一來果、又は不還果を得ることである。」

長者はこの敎を聞いて、身も心も清々するやうに覺え、病も頓に本腹したやうに感じた。床より起つて、尊者に厚く禮を述べ、歡喜の餘り、嘗て、佛に逢ひ奉つて、歸依渴仰の念に咽び、遂に舍利弗とゝもに精舍を建立するに至つたことを、追憶に任せて長物語した。

二　歸佛後二十餘年、給孤獨長者は、再び病の床に就いた。第一に釋尊の御見舞を受け第二に阿難の訪問に接し、第三に、舍利弗の見舞を受けた。

舍利弗は阿難を伴うて長者の枕邊に侍し、懇に語るやう。

「長者よ、病劇しからば、佛を念ずるがよい。如來は至眞等正覺にして、人天の大師にゐらせらるゝ。更に法を念じ、僧を念ぜよ。如來の法は深く尊く、如來の聖衆は無上の福田である。

長者よ、三寶を念ずれば甘露の功德が獲られる。三寶を念ずれば、惡道に墮ちることはない。

長者よ、眼に物を見ても貪欲を起さず、耳に聲を聞いても貪欲を起さず、乃至香味觸法にも貪欲を起さず、更に今世にも後世にも貪欲を起してはならぬ。吾等の生死は

其本無明から起つて、外物を感受し、愛を起し、生老死の悲みがある。かやうに車の廻る如く已む時がない。

長者よ、因縁和合の理を觀ずるを空行第一の法となすのである。」

長者はこの教に接して歡喜の涙に咽んだ。

「尊者よ、我昔から佛に仕へ奉り、諸の長老を敬ひ奉つて今日に及んだけれども、未だかやうな尊い教を承つたことがありませぬ。」

舍利弗は更に語を重ねて

「長者よ、樂みを知つて解脱を得た人は、耶輸提尊者である。又苦みを知つて解脱を得た人は、婆伽黎比丘である。彼は自殺せんとして、刀を觀視めて解脱を得た。長者はこの比丘の思ひを以て解脱を獲られよ」

と言ひ了つて訣を告げた。兩人の去つて後、間もなく、長者は命終つて天上に生れた。彼は光り輝く天身を以て、祇園に下り、虚空の中に掌を合せて釋尊を拜し奉り、更に釋尊、舍利弗、阿難の上に天華を散じて慈恩を報じたといふことである。

（一）『中阿』第六。

（二）『增阿』第四九・『雜阿』第三七・第二二。

三、輸屢那の歸依

釋尊、竹林精舍に在せし時、舍利弗は鉢を持ちて城に入り、行き〳〵てとある長者の家に食を乞うた。長者の子輸屢那、奥より出で來つて、崇高い舍利弗の容貌を見て希有の思ひを起し、「卿は如何なる方ぞ、何の教を弘め給ふや」と問ふ。舍利弗「我は人天の師にまします釋尊の弟子」と答ふ。輸屢那更に「卿、鉢を持ちて靜に立ち給ふは、何を求め給ふぞ。」舍利弗「私は財を求めない。食も服飾も求めない。私の來たのは、卿の爲めである。卿には佛に逢ひ奉る宿因がある。如來の世に出で給ふことは難い。說法を聞くことも難い。長い生死の間に、人身を稟けることも容易のことではな

い。恰ど優曇花の咲くやうである。卿、我と丶もに來つて如來の尊容を拜せよ。如來は必ず卿の爲めに尊い要法を御說きになるであらう。」

尊い舍利弗の言葉に幼い胸も法の喜びに躍つた。彼は父母の許を得て、香花を執り、白氈を捧げ、舍利弗に導かれて釋尊の御許に詣でた。

尊容を仰げば、寂靜に端嚴しくましますこと、秋月のやうにゐらせられる。彼は進んで香花を散し、白氈を捧げて敬禮し奉つた。釋尊は殊勝な少年の志を嘉し給ひ、懇に汚穢を捨て丶淸淨に赴くことを敎へ給うた。少年は心の塵垢を離れて法眼を獲、更に釋尊の仰せによつて、一先づ家に歸つて、父母に出家を許されんことを請うた。

一人子の出家は父母に取つては堪へ難いことである。けれども輸屢那の心は盤石のやうに堅く、動かなかつた。父母は泣く〳〵彼の意に任せた。少年は直ちに釋尊の御許へ參り、仰せによつて舍利弗の弟子となつた。

この時、舍利弗は耆闍崛山にあつた。輸屢那は毎日のやうに、敎を受けた。

「輸屢那よ、色(事物)は無常である。無常は苦みである。一切の諸法が皆な無常であつたならば、そこに常一主宰の我はないではないか。色に我はない。受、想、行、識にも我はない。この理を觀ずるを實知といふのである。」

「輸屢那よ、實の如く色を知らず、實の如く色滅(事物の滅亡すること)色患(事物の吾々に與へる惱み)を知らなければ、色を解脫することは出來ぬ。受想行識についてもさうである。

故に色(事物)の實相は無常であると觀じ、無常は苦みである。是等は變易るものであると觀ずれば、無我の理は獲られる。」

是等の敎を聞いて、輸屢那は獨り閑靜な處に思惟を凝した。彼は舍利弗の敎を身に引きあて丶觀じ、遂う阿羅漢を開いた。彼は直に釋尊の御許に詣で丶自督を述べた。

「世尊よ、我今にして始めて佛を見奉り、法を聞くことを得た。

世尊よ、色は無常である。無常は苦みである。苦みは無我、無我は空である。空は有とも云はれず、無いとも云はれぬ。即ち亦無我である。受想行識も亦この通りであ

る。是れぞ智者の覺る所、我今日この理を觀じて眞に入つた。

世尊よ、我今にして初めて、世尊を見奉る」

（一）『增阿』第二四。

（二）『雜阿』第一。

（三）『增阿』第二四。

四、那憂羅公老人の歸依

釋尊、拔祇（Vrji）國尸收摩羅山鬼林鹿園に在せし時、那憂羅公といふ百二十歲の長者、御許に來つて申すやう。

「世尊よ、我今年老いて氣力衰へ、いつも病に侵されて憂惱が多い。どうか敎を垂れて、安穩な身の上に致して下さい。」

其時釋尊の仰せられるには、

「長者よ、人の身は薄皮を以て痛みを覆うてゐるばかりである。少しも恃怙にならぬ。長者よ。此の身を恃怙にしてゐる者は、須臾の樂みを貪つてゐるので、決して智者のすることではない。

されば長者よ、身に病があつても、心に病のないやうにするが宜しい。」

長者はこの敎へを聞いて坐より起ち、世尊を敬禮して退いたが、不圖舍利弗を想ひ出して、四邊を見ると、尊者は程近い樹下に端坐してゐる。長者は直と舍利弗の許へまゐつた。舍利弗は歡ばし氣な長者の顏色を見て、故を問ふと長者は世尊の敎により て歡喜びを得たと云ひ、仰せの旨を語つた。舍利弗は之を聞いて、

「長者よ卿は尙ほその上に敎を聞かねばならぬ。身は病むとも、心は病まないといふには、如何すればよいか。卿は進んでその敎へを聞かねばならぬ。

長者よ、凡夫は常に聖人を見ず、聖敎を聞かず、常に外物を貪つて、自分の所有と思うてゐる。そして常恒に變らぬもの、破壞れないものと思うてゐる。然るに一切は

無常である。凡夫はこの無常に逢うて苦み愁憂へる。かやうにして身も患へあり、心にも患へがある。

長者よ、故に賢聖の弟子は、善知識の教によつて外物を無常と觀じ、我識も亦移り變ることを思うて、我の念を起さない。既に我執を離れるから轉變に逢うても惱むことはない。憂へることはない。

長者よ、この理を觀ずれば、身に患へがあつても、心には患へがなくなる。」

長者はこの教を聞いて諸の疑を離れ、眞に法を見、法を得、法を知るに至つた。

（一）『增阿』第六・『雜阿』第五。

五、舊友陀然の歸依

釋尊、王舍城竹林精舍に夏坐し給ひし時、舍利弗は遠く祇園精舍にあつて夏坐した。一人の比丘あつて、竹林精舍の夏を終へて、衣を修繕し、鉢を持ちて祇園精舍に赴き舍利弗の御許へ行きて禮拜した。

舍利弗は喜び迎へて釋尊の安否を問ひ、更に王舍城の舊友陀然の消息を問ふと、比丘の申すやう。「陀然は常に道を勵まず、禁戒を犯し、王に依傍けて波羅門や居士を欺き波羅門や居士に依傍けて王を欺いてゐる。」

舍利弗は之を聞いて、衣を攝め、鉢を持ちて遙々王舍城へ赴いた。竹林精舍へ着いた翌朝、城へ入つて行乞し、陀然の家へ行くと、彼は水邊に在つて小作人を苦使うてをつたが、舍利弗の姿を見て、喜び敬うて坐に請じ、金澡罐を執りて舍利弗に食を勸めた。彼三度勸めたけれども、舍利弗は三度請けない。陀然は怪みて故を問ふと、舍利弗の申すやう、

「卿は常は道を勵まず、諸人を欺いてゐるといふことである。私が今日來たのは夫が爲めである。」

陀然の云ふやう

「舍利弗よ、我家にゐて家業を事とするには、安隱に父母を養はねばならぬ。妻子を瞻視ねばならぬ。奴婢に給し、租稅を收め、諸天を祭り、祖先を敬ひ、沙門婆羅門にも布施して、後世は生天の福樂を得ねばならぬ。

舍利弗よ、是等の事は凡て廢することは出來ぬ。さすれば一向に法に從ふことも出來ぬ。」

舍利弗は之を聞いて

「陀然よ、さらば卿に問うてみやう。人あつて父母の爲めに惡行をなし、命終つて地獄に墮ち、獄卒に向うて、汝等は自分を苦めてはならぬ。自分は父母の爲めに惡を犯したのであると云うて、獄卒の手から脫れることが出來ると思ふか。

父母ばかりでない。妻子の爲め、奴婢の爲め、進んでは王の爲め、天の爲め、沙門婆羅門の爲めに惡を犯して地獄へ墮ちながら、上の辨疏を以て獄卒の手を脫れることが出來ると思ふか。

陀然よ、卿は如何にして法に從うて錢財を獲ることが出來ないのか。淨財を以て父母妻子を養ひ、乃至一切の任務を果したならば、諸人は益卿を尊重び、日々に德は進みて衰へることはないであらう。」

陀然はこの敎に接して、夢の醒めた樣に感じた。彼は合掌して舍利弗を敬禮し、

「舍利弗よ、私に端正といふ愛婦がある。實の處私は妻の色香に迷うて、放逸の生活を營んだ。今日より妻を捨てゝ、尊者に歸依するであらう。」

舍利弗の云ふやう

「私に歸依するに及ばぬ。私の歸依する所は如來である。」

「舍利弗よ、我今日より三寶に歸命し、身終るまで優婆塞の戒を守るであらう。」

其後舍利弗は王舍城に遊化すること數日にして、南山村の北尸攝恕林中に住した。

其時王舍城からこの林に遊行した一比丘に聞いてみると、陀然は其後間もなく病の床に就いたといふ。彼は直ちに衣を攝め鉢を持ちて竹林精舍へ赴き、翌朝陀然の家を訪

れた。病苦に惱まされた陀然は、重き枕をあげて舍利弗に語るやう、

「尊者よ、我日夜病苦に惱まされ、頭の痛むことは恰ど利刀に刺れるやう、腹の痛むことも亦其樣である。熱の爲めに五體の熱いことは、鐵火の上に滿身を炙られるにも類してゐる。」

舍利弗は、陀然が常に梵天に愛著してゐることを知つて四梵室を說いた。

「陀然よ、地獄、餓鬼、畜生よりも人間は勝つてゐる。人間よりも天上は勝れ、天上の中にも梵天は勝れてゐる。

陀然よ、如來は、慈、悲、喜、捨の四梵室を以て梵天に生ずる因であると仰せられた。即ち慈心を以て一方を觀じ、更に四方上下一切の處に及び、怨みなく恚なく諍なく極めて廣く極めて大きく、一切世間を觀じ、悲、喜、捨の念もかやうにするを四梵室を修むるといふ。

かく修むること屢にして、欲を斷ち、欲念を捨つれば、命終つて梵天界に生ずることが出來る。」

舍利弗の去つた後間もなくして、陀然は命終した。彼は敎の如く一心に四梵室を修めて天上に生れたといふことである。

（一）『中阿』第六。

第六章　舍利弗と諸弟子

教團に於ける舍利弗の事蹟は、師釋尊と彼の關係、並に諸弟子と彼の關係を知ることによりて、知ることが出來る。

一、舍利弗と阿難

一　或夜、釋尊祇園精舍に在して、阿難に宜給ふやう、

「阿難よ、卿は尊者舍利弗の說法を聞くことを喜樂むか」

阿難は

「世尊よ、苟も智慧ある者は、誰でも尊者舍利弗の說法を喜ばぬものはありませぬ。尊者舍利弗は戒を持ち、多く聞き、道を勵み、煩惱を遠離れ、堅く正念に住して、少

欲知足である。尊者舍利弗は捷疾智慧、利智慧、出離智慧、決定智慧、大智慧、廣智慧、深智慧、無等智慧等、一切る智慧寶を成就へてをります。

尊者舍利弗は、是等の德を備へて、常に能く敎へ、能く大法を讚嘆し、能く四衆を導いて倦むことはありませぬ。」

釋尊は之を聞き給ひて、

「阿難よ、卿の云ふ通りである。尊者舍利弗は、夫等の德を具へて、諸比丘を敎化して倦むことはない。」

釋尊と阿難は、互に舍利弗の德を讃じて、夜の更くるを知らなかつた。

時　須深といふ天人は多くの眷屬とゝもに、天上から下つて祇園精舍に詣で、今迄釋尊の御許にをつたが、尊者舍利弗の德を聞いて、深く心に喜び、偈をもつて舍利弗を讃じた。

尊者舍利弗

平等の智慧、廣く明に
戒を持ち、煩惱を調伏め
無爲の涅槃を得ぬ。

この最後の身をもつて
魔軍を降伏す。
かくて多くの天人とゝもに天上に歸りぬ。

この出來事は、後夜のことであるから、阿難が釋尊の侍者に選ばれた後のことと思はれる。云はゞ家庭に於ける父子の物語りのやうなもので、公然でないから、しんみりと舍利弗の德を嘆ぜられたことが味はれる。阿難の侍者になつたのは釋尊入道第二十年の年であるから、此話は釋尊の五十六歲以後のものであると思ふ。

（一）『雜阿』第四九。

（二）『哩佛』第三。

二、焰摩比丘を教化す

舍利弗の特長は、智慧の劍を以て、根本的に對手の煩惱に止めをさす處にあると申したことである如く、經典に表はれた中に於て、その一例とも見るべきものは焰摩比丘を教誨したことである。

釋尊、祇園精舍に在せし時、焰摩比丘が惡邪見を起した。彼陰に思ふやう、「煩惱の盡きた阿羅漢は、命が終れば、何もなくなる。」この考へが彼の胸に起ると、もう釋尊の仰せらるゝ教への奧底がすつかり解つたやうな心持がした。修行の目的も、證りの內容も畢竟この「何もなくなる」といふ處へ到りつけばよいのであると、

この見解を聞いた諸比丘は、驚いて焰摩比丘に忠告を試みたけれども、彼は頑として動かない。「自分の云ふ處は正しい。其他は凡て間違ひである」と主張した。諸比丘

は彼を伏することが出來ないので、舍利弗の許へゆきて、逐一話して彼への敎誨を請うた。

誠に「何もなくなる」といふ見解は斷見である。よしや見解だけが立派なものでも自分で實際に修行もせずして、只考へ丈、口先き丈に云ふことならば矢張り邪見である。まして「何もなくなる」といふことを頭に考へた丈で固執することは全く斷見外道の徒と云はねばならぬ。諸比丘の心配したことは尤のことである。

けれども、又深く考へて見れば、よしや間違うてをるにしても、箇樣に際立つて、一の考へを起すことは、修道の上に就ては大切な時期である。惡くすれば取り返しのつかぬ邪見の徒となる代りに、善く導けば、一轉して證りの境に入ることが出來る。是等の心の移りゆく消息は舍利弗の最も善く知る處である。彼は諸比丘の云ふ所を快く聞いて、直と焰摩比丘を訪れた。

焰摩比丘は問はるゝまゝに前の見解を繰り返した。舍利弗は之を聞いて、頭から叱責めずに問答體にじり〳〵と問ひつめた。

舍利弗「色（事物のこと）は常住であるか、無常であるか」

焰比丘「無常」

舍利弗「無常ならば苦みか否か」「苦み」

舍利弗「色が無常にして、苦みのものならば、是等は變易の法と云はねばならぬ。汝はこの變易の法の中に、常一の「我」相を認めることが出來るか」「否、認めることは出來ぬ。色ばかりでない。受想行識の他の四蘊も同じことである。」

舍利弗「然らば進んで問ふ。色は如來であるか」「否」

舍利弗「色の中に如來いますか、受想行識の中にいますか」「否」

舍利弗「如來の中に色あるか、如來の中に受想等あるか。」「否」

舍利弗は更に論理的に他の場合をたしかめながら、

「さらば焰摩比丘よ、如來の敎へ給ふ眞實の法は、上に申したやうでなければなら

ぬ。この法の如く眞實に味ひ、眞實に會得せねばならぬ。然るに汝はたゞ獨り極めに考へて、「煩惱の盡きた阿羅漢は、命終れば、何もなくなる」といふことで、如來の教法は盡きてゐるといふのは、正しいと思ふか」

焰摩比丘は、この熱心と嚴正なる教へに接して、洗ひ出されたやうに感じた。彼は立に塵垢を去つて法眼淨を得た。舍利弗は更に語を進めて

「焰摩比丘よ、譬へば長者あつて、財物を守護せしめんが爲めに、廣く僕從を求める時長者の怨家之を聞いて、喜んで僕從となり、表には謹み敬うて主の意を迎へるけれども、內心には隙を覗うて、朝夕左右に侍り、遂に利劍を執つて、主人を刺し殺すやうに、愚痴の凡夫は、いつもこの自分を假和合てゐる五蘊を執じて變らないものと思ひ込んでゐる。夫ばかりでない、この五蘊が恐ろしい怨家であることを知らずに、親しみ愛して遂にはその爲めに害せられることは、彼の愚な長者と異ることはない。焰摩比丘よ、如來の弟子は、先づ第一に、この五蘊を觀ぜねばならぬ。五蘊は愛すべく、親しむべきものでない。病の如く、癰の如く、刺の如く、劍の如く自分を殺すものであると觀ぜねばならぬ。五蘊は實に無常である。苦みの本であり、空にして無我であると念じて、之に執着せなければ、自ら涅槃を覺る。我生死の迷ひは盡き、梵行已に立ち、作すべきことを作し了つた、もう後身を受けないといふことを自覺するであらう。」

既に證りの心機熟した焰摩比丘は、この痛切なる教誡に接して、そのまゝ有漏の心を斷つて解脫を獲た。舍利弗の教誡は、かやうに鋭いものであつた、彼の教誡は七首を以て、直ちに人の心臟に迫る趣がある。

（一）『雜阿』第九。

三、優波先那比丘の蛇害

印度は熱い國柄であるから、道を修める人々は、常に林や巖窟の中に坐禪した。之

が爲めに熱國特有の毒蛇の害を蒙るものが往々あつた。

或時、舍利弗は王舍城に近い林の中に坐禪してをつた。靜かの森、靜かの心、色心の塵もゆるがぬ寂靜であつた。其處から遠くも離れてをらぬ巖窟の中に優波先那比丘も禪定にあつた。外はカン〳〵と日は照りつけてをつても、此處はポチリ〳〵と岩間に水も滴つて淸凉の氣は比丘の身邊を巡つた。

熱さに堪へ兼ねてか、一尺餘の毒蛇は日影の崖を傳うたが、計らずも辷つて坐禪の比丘の上へ墮ちて、比丘を嚙んだ。比丘は舍利弗を喚んだ。

「尊者よ、毒蛇が落ちて來て我身を嚙んだ。どうぞ毒の廻らぬ中に、諸比丘に告げて、洞の外へ出させて下さい。

聲を聞いて、舍利弗は禪坐を立つて、優波先那の許へ行つて見ると、彼の顏色は平生と異る處はない。舍利弗は怪んで

「汝の容貌は平生と異る所はない。毒蛇に嚙まれたといふは眞實であるか」

と問へば比丘

「尊者よ、四大和合し、根塵集つてこの身を作してゐる。其處には我もなく、我所もない。眼が我ならば我所ならば、耳鼻舌身意が我ならば、我所ならば、乃至色聲香味、四大、五蘊が我ならば、我所ならば、毒に中つて容貌も變るであらうが、是等の凡には我もなく我所もない。容貌の變らぬは之が爲めぞ。」

舍利弗は之を聞いて嘆賞を禁じ得なかつた。

「あゝ、汝は長夜に道を修めて、我我所を離れ、色心の繫縛を斷つこと、多羅樹を截るが如く、もう未來世に於いて、輪廻を受けることはない。誠に能も我我所を離れたことである。毒に中てられても言語の變らぬ事は尤のことである」

かくて諸手に比丘をかい抱いて洞外に出せば、愍れや毒氣滿身に巡つて彼はあへなき最期を遂げた。健氣な比丘の命終を見て、舍利弗は遺骸に向うて讃頌を誦した。

久しくも道を修めて

よく色心を調へし
比丘や尊き。

毒鉢を毀つが如く
重病の癒えたるやうに
歡びて命を捨てし
比丘や尊き。

求めずば報もあらじ
かくて死に臨めど悔いず
智慧の眼に世相を觀じ
火の宅を出づるが如く

惡草を絶すが如く
歡びてこの世を去れる
比丘や尊き。

誠に毒蛇に嚙まれて、死を眼前に控へながら、泰然として顏色も變へぬ優波先那の態度は、誠に千古の哲人の俤がある。そして彼はこの禍に逢ひながらも、死に臨みて大德舍利弗と語り、心ゆくばかり自督を述べたことは快心の極みであつたであらう。舍利弗も亦徒に彼の死を悲まず、深く彼の心に入つてその修道を讃美したことは、實に双美と云はねばならぬ。

かくて舍利弗は懇に優波先那の尸を供養し了つて、その由を釋尊へ申し上げると、釋尊は之に因みて、除毒の偈を御說きになつた。

（一）『雜阿』第九。

四、舍利弗に對する謗難

一。佛成道後大凡四十年以後の事であつた。釋尊、祇園精舍に夏座を了へ給ひし時舍利弗も此處に夏座を濟ませて、衣を攝め鉢を持ちて、釋尊の許しを得て、遊行の途に就いた。

舍利弗の去つた後、間もなく一人の比丘、釋尊の御許に來つて申すやう、

「世尊よ、今日尊者舍利弗は、我を輕慢んじて遊行の途に就きました。」

この誹謗を聞きて、釋尊は一比丘を遣はして舍利弗を喚び返さしめ、更に阿難をして諸房を巡らしめ、「只今尊者舍利弗が、世尊の御前に說法師子吼するにより、速に講堂に集られよ。」と云はしめた。

間もなく大衆は召しに應じて集つた。舍利弗も喚び返されて釋尊の御許へ參ると、仰せられるやう、

「卿の去つて後、久しからざるに一人の比丘來つて、申すやう、今日舍利弗我を輕慢めて遊行の途に就いたと云ふ。そは眞實なるか」

舍利弗答へて

「世尊よ、我母胎を出てから今年八十歳に向ふけれども、殺生した覺えもなく、妄語した例もない。又他人と諍うたこともない。設左樣なことがあつたならば必ず心の散つてゐる時である。然るに今日は安居の終へた懺悔の日であるから、私の意は澄み渡つてゐる。どうして他人を輕慢しめる事がありませう。

世尊よ、大地は能く忍んで如何なる不淨なものも受ける。屎尿、膿血、涕唾すら盡く受けて逆ふことはない。世尊よ、我心今日この大地のやうに能く忍んで逆ふ思ひはない。

世尊よ、水は好物も、好からざる物も、共に洗ひ淨めて憐愛の念はない。世尊よ、今日我心も亦水のやうである。

世尊よ。火は山野を燒くに、好惡を擇ぶことはない。我心も亦そのやうである。

世尊よ、箒の塵を掃ふに好醜を擇ばないやうに、角を截つた牛が巷を行つても、溫良にして犯す所のやうに、我心も亦その樣である。

乃至世尊よ、美はしき少女が尸を頸飾りにすることを嫌ふ程に、私は不淨に滿ちたこの身を嫌うてゐる。

かやうに正念に住してゐる私が、どうして他の比丘を輕慢ずることがあらう。若し私の申す通りでなかつたならば、世尊も自ら御知りになることであらう。彼の比丘も亦之を知るであらう。若し我過ちならば、彼の比丘をして我懺悔を受けしめよ。」

赤誠より迸る舍利弗の語は人々の胸を衝いた。釋尊は謗つた比丘に向ひ給ひ

「汝は今過を懺悔せねばならぬ。若し懺悔せないならば、汝の頭は七つに裂けるであらう」

赤誠溢るゝ舍利弗の語に撲れた彼の比丘は今又威神並びなき釋尊の敎誡に接して、彼は身の毛竪ちて恐れ戰いた。直ちに坐より立つて釋尊の御足を禮し奉り、

「世尊よ、我懺悔を受け給へ。」

釋尊「汝は舍利弗に向つて懺悔せねばならぬ。」

かの比丘は舍利弗の足を禮して、過ちを懺悔した。舍利弗は手を以て彼の比丘の頭を摩でながら、

「比丘よ、懺悔は佛法中、甚だ曠大なるものである。過ちに隨つて悔ゆることは大いなる善である。今我快く汝の懺悔を受ける。もう再び犯してはならぬぞ。」

かく云ふこと三度にして、彼は懇に件の比丘に向ひて、墮獄、生天、證涅槃に至る六法を說いた。

舍利弗の深い修養と、偉大な人格と、諸弟子に對する美はしい慈愍が、この一の出來事の上に躍動してゐる。顧ふに彼の比丘は、舍利弗の道を生命としてゐる高い人格を知ることが出來ない爲めに、初め何かの敎へを受けて、心に憤懣を懷いたらしい。

而も之が動機となつて、得難い舍利弗の自督に接することを得た。そして釋尊は亦豫め之をお知りになつて、態と大衆を集めて、この一場の活劇を演ぜしめ給ふ、聖德誠に測り難いと申さねばならぬ。

二。釋尊が祇園精舍に在せし時、舍利弗、目連の弟子なる阿濕婆（譯して馬宿）富那婆婆（譯して滿宿）の二比丘が、騎連といふ土地にあつて放逸の生活をしたことがある。彼等は花を植ゑたり、音樂を弄んだりして、村落の若い女共と遊び興じ、托鉢の際なども威儀を守らずして、歩きながら親しく人々と言葉を交はした。箇樣の生活をしてゐることが、遊行の比丘によつて、遙に釋尊の御耳に入つた。釋尊は直ちに舍利弗、目連の兩人をして、騎連に行きて、兩人に白四羯磨（一定の儀式を備へた敎誡）を作せよと仰せられた。

阿濕婆、富那婆婆の二比丘は、舍利弗、目連の兩人が五百の比丘とゝもに、迦尸（Kāsi）國よりこの地に遊行することを聞いて、是れは屹度我々兩人を擯ける爲めに相違ないと打ち語ひ、直に人々の許へ行つて云ふには、「今度、兩人の比丘がこの地に來るが、一人は目連というて幻術に巧みであり、他の一人は舍利弗というて、眞實らしい僞りの惡說法が甘い。汝等は心を落ちつけて彼等の作す處を觀察し、決して惑はされてはならぬ。」かやうに云ひ觸らして豫じめ兩人の信用を落すことを企てた。

併しこの企ては凡て徒勞に終つた。初めの中は騎連の人々も兩人の惡比丘の云ふことを信じてをつたが、後には舍利弗、目連の威德に服せざるを得なかつた。かくて兩惡比丘は、罪狀を數へられて擯羯磨（此處にをつてはならぬと他にやらろいこと）を受けた。

三。是等は、敢て舍利弗、目連に對して憤を含んだ譯ではなく、只自分等の欲を滿さんが爲めに、無邪氣な惡言を弄した迄であるが、偷蘭難陀比丘尼が、舍利弗、目連を供養する舍衛城の某家へ行つて、「舍利弗、目連の如きは下賤い輩である。敎團の中で、龍中の龍とも稱すべきは、尊者捉婆達、三聞陀羅達、騫默羅達婆、瞿波離、迦留羅提舍の方々である」と云うたのは、提婆達多といふ有力な敎團の反對者と氣脈を通

じてある丈け決して單純とは云はれない。

四。之と連絡して兩人に對する烈しい憤懣を抱いたのは、かの偷蘭難陀比丘尼に讃められた提婆黨の一人である瞿波離比丘である。彼は或時祇園精舍に來つて、「世尊よ舍利弗、目連の兩人は、常に諸の惡行を作してをる」と申した。釋尊は「汝、箇樣な語を吐いてはならぬ。彼の兩人の行ひは純善にして少しも惡いことはない。」と仰せられたが、瞿比丘は尙も服せずして「私は世尊の御語は信ずるけれども、あの惡欲ある兩人は信ずることは出來ぬ」と三度繰り返した。釋尊仰せらるゝやう、「汝は實に愚人である。如來の云ふ所を信ぜずして、妄りに舍利弗目連の所行を謗ることは、甚しい罪である。汝は久しからずして其報を受けるであらう。」

釋尊の御許を去つて間もなく彼の比丘の身に大さ芥子のやうな惡瘡を生じたが次第に大きくなつて胡桃のやうになり、更に掌の大さとなり、膿血流れ、發熱甚しく、滿身さながら燒くが如く、苦み叫んで命終り、大鉢曇摩地獄（八寒地獄）に墮在した。

其夜天人來つて釋尊の御許に詣でゝ偈を唱へた。

諸人の世に生るゝや
禍の斧、其口にあり、
後遂に其身を斬らん。

毀るべきを稱へ
稱ふべきを毀る、
その罪は皆口より生る。

博奕に財を失ふ如く
聖者を謗りて福祉を失ひ
命終りて惡道に入る。

翌日、釋尊はこの偈を大衆に語り給ひ、瞿波離比丘の墮獄は、舍利弗、目連の兩人を謗つた報であることを示して、聖者を誹謗る罪の大なることを御說きになつた。

提婆達多が釋尊に怨みを懷いたやうに、瞿比丘は命終るまで舍利弗、目連の兩人を怨んだ。傳ふる所によれば、尊者目犍連は深く瞿比丘を憫み、神通を現はして鉢曇摩地獄に至り、虛空に結跏趺坐し、指を彈いて彼の比丘を喚んだ。その時瞿比丘の身體は極寒に裂けて焰のやうに血烟りを上げ、百頭の牛の爲めに、その舌を裂かれてをつたが、頭をあげて「汝は誰ぞ」と問ふ。目連は「我は釋迦佛の弟子、字は目連、姓は拘離多である」と告げると、瞿比丘は怨みの眦を上げて「我はこの惡趣に墮在しながらも、なほ汝を見なければならぬか。」と叫んだ。叫びの終らざるに千頭の牛は、其舌を裂いた。目連はこの言語に絕したもの凄い光景を見て、愁の眉を曇らせて祇園に歸つたと云ふことである。

凝りに凝つた憤怨の念は、自然に大鉢曇摩地獄を造つて、永劫の苦みを受ける瞿比丘の心は、氷塊のやうに結んで解けない。目連の濺いだ慈愛の涙も、遂に溶く便はなかつた。あゝ彼は今も尙ほ毒我を抱いて氷獄に鎖されてゐるであらうか。

（一）『增阿』第三〇『中阿』第五。
（二）『四律』第五、『誦律』第三一。
（三）『四律』第一三。
（四）『雜阿』第四八、『增阿』第一二。
（五）『雜阿』第一二。

第七章　舍利弗と外道

一、浮彌比丘

內に向つて教團の模範となり、諸比丘を教養した舍利弗は、外に對しては、當時の異教者に向つて常に先鋒となつて、破邪の劒を振つた。

或時、釋尊が竹林精舍に在せし時、尊者浮彌は耆闍崛山にあつて道を修めた。その時衆多の遊行者、尊者浮彌の許を訪れて苦樂の原因に就いて質問を發した。彼等は從來の論理法によつて、苦樂の原因は自ら作す所か、他の作す所か、自他集つて作す所か、又は自他の因にあらずして無因なるか、四句に分類して問ひつめた。けれども浮彌は釋尊の教に從つて、苦樂の原因は其等の何れでもなく、只因緣によつて生ずることを述べた。けれども彼等は浮彌の說に滿足することが出來なかつた。彼等の主とする處は理論の精確なることである。然るに釋尊は四句の分類のやうな、單なる形式的の理論を斥けられた。單なる論理の完全は、吾等の實際生活に何等の力もない。修道の要とする所は、論理の完全を期するのではなくして、實際上の心身の練磨である。不動の力を獲ることである。この功果を收めしむるものは形式的の理論でなくして、釋尊御自身の實驗から獲たる十二因緣の教理である。こゝの所が當時の外道異學者と佛教の分れる所である。そして相こそ變れ、東西を通じて眞の宗教と、僞の宗教と分れる所である。釋尊は戲論を捨てゝ淨行を取り、外道は淨行を捨てゝ戲論を執つた。是等の道理の解らう筈のない外道は、論理法に合はぬ浮彌の緣生の說を聞いて罵りつゝ去つた。

外道の罵詈を受けた浮彌は、遠からぬ樹下に端坐してゐる舍利弗を訪れて、外道と問答して罵られることを申した。舍利弗は懇に彼を慰め、汝の云うた所は少しも間違

うてはをらぬ。苦樂の原因は自他等の四句にあらずして、衆多の緣によつて起るものであると敎へた。

兩人の問答を傍の樹下に聞いてをつた阿難は、直に竹林精舍に赴いて逐一申し上げると、釋尊は非常に舍利弗を御讃めになつた。

「阿難よ、尊者舍利弗は來り問ふものがあれば、いつも其問ひに應じて善く答へる。諸の比丘は正に舍利弗のやうでなくてはならぬ。阿難よ、我嘗つて王舍城の山中にあつて、多の外道に事を尋ねられたことがある。其時我は舍利弗と同じやうに答へた。無明によつて漸次に外界を感受する生あり、老死あり、こゝに苦樂が生じてくる。故に根本の無明を滅すれば、隨つて世間の老病、憂苦を滅することが出來る。」

（一）『雜阿』第一四。

二、槃特に代つて世典婆羅門を敎化す

上の出來事は、尊者浮彌を通して、間接に外道に對する舍利弗の見解を述べた丈であるが、彼は亦直接に外道と論議した。

釋尊、迦毘羅城（Kapila vastu）の尼拘留（Nyagrodha）園に在せし時、國中の豪貴の人々五百餘人、公會堂のやうな處に集つて、何事か語り合うてをる所へ、世典といふ遊行者婆羅門が來つて「誰にても我と論議を共にする人があるか」と云ふと、釋種の人々は半ば戯れに「卿と論議を共にする高才博學の人は、今この國に兩人ある。一人は智慧のない、言語の醜陋しい、取捨の區別も解らぬ周利槃特比丘、他の一人は釋種の如來瞿曇であるが、この人も無知無聞の醜陋しい、穢惡い者らしい。卿が若しもこの二人に勝ち得たならば、吾々五百人で金千兩を贈るであらう。」と云ふ。婆羅門は之を聞いて、心に思ふやう、釋種の人々は聰明過ぎて虛僞に富んでゐる。我もし兩人に